263.2
345

0050441000

0050441-000

263. 2－345

朗読法精説

日下部重太郎・著

中文館書店

昭和7

AHJ

この著作物は、著作権者不明のため、著作権法第６７条の規定に基づき、平成１２年５月１５日付けで文化庁長官の裁定を受け使用するものです。

10P54

朗讀法精說

東京高等師範學校教授
日下部重太郎著

東京中文館藏版

正誤表

頁	行	誤	正
四一	一五	十一字目の下に落字	心髓（Shinzui）
四一	六	十三字目の下に落字	禁止（Kinshi）
四三	六	（二）　摩擦音	（三）　前舌音
四三	七	（三）	（二）
七八	四	句	句（一名連語）
七八	八	名詞句（一名連語）	名詞句
一〇六	七	（Lent）（Modcpato）	（Lento）（Moderato）
一八六	八	番町　道をきゝ	番町　道をきゝ
二三三	五	petite ponme	petites pommes
二三四	二	du fois	du foie
二三四	八、九	最初のです、私が何遍も賣る、	最初です、私が膽を賣るのは
二三四	一二	私が何遍も	私が膽を
二六四	一一	四川は hn	四川は hu
二七八	六、八	タ行音	タ行字の音

263.2-345

卷頭に

この書物を著すに當り、すべて學藝の修養とその發達とについて、先哲の名言を思ひ出したことが幾つかあります。その一つは「徒然草」に記すところ、

「能をつかんとする人、よくせざらん程は、なまじひに人に知られじ、うち／＼よく習ひ得てさし出でたらんこそ心にくからめと、常に言ふめれど、かく言ふ人、一藝も習ひ得ること無し。未だ堅固かたほなるより、上手の中にまじりて、そしり笑はるゝにも恥ぢず、つれなく過ぎてたしなむ人、天性その骨なけれども、道になづまず、みだりにせずして、年をおくれば、堪能のたしなまざるよりは、つひに上手の位にいたり、徳たけ、人に許されて、ならびなき名を得ることなり。」

また一つは「玉勝間」に記すところ、

「古よりも後の世のまされること、萬づの物にも事にも多し。その一つを言はんに、古は橘をならびなき物にしてめでつるを、近き世にはみかんといふ物ありて、この蜜柑にくらぶれば、橘は數にもあらず、けおされたり。この一つにて推し量るべし。或は古には無くて、今は有る物も多く、古はわろくて、今のは善きたぐひ多し。これをもて思へば、今より後もまたいかに有らん。今にまされる物多く出で來べし。今の心にて思へば、古は萬づに事足らず、あかぬ事多かりけん。

されどその世には、さはおぼえずや有りけん。今より後また、物の多く善きが出でこん世には、今をも、しか思ふべけれど、今の人、事足らずとはおぼえぬが如し。」

なほ一つは「福翁百話」に記すところ、

「眼前に在る一木一石、一紙一毫も、之を眞理原則に照らして、その性質を說き、その效用を明かにし、次第次第にその理を推究して玄妙に入り、玄の又玄なるものに達すれば、人間の方寸に宇宙を包羅して、日月も小なり芥子も大なりとの思想を生ずるに至るべし。」等々。

花とならびの岡の邊に幾代の春をすごす法師や、敷島の大和心を朝日ににほふ山櫻花と歌つた翁や、高尙の理は卑近の所にあると語つた三田の先生らの名言を、廣き世の人々と共に讀み味ひたいと思ひます。

こゝに此の書をまとめるために、古今の學藝の恩人の惠みを蒙つたことを深く感謝いたします。さうして到らぬ所や誤つた所については、特に識者の是正を願つておきます。

昭和七年の秋

日の本の國語のしもべ　しるす。

朗讀法精說

目次

第一　序說……一

朗讀法の實用と趣味(一)　朗讀法の研究(二)　諸先覺の唱道(三)　洋書の事(三)　音韻調査報告(四)
近來の音聲研究書(四)　音聲學協會(四)

第二　朗讀法とは何か……五

朗讀法とは何か(五)　エロキユーション(五)　演述(六)　諳誦(六)　朗讀(六)　讀物と語物と謠物(六)
思想感情の會得(七)　朗讀法の自覺と運用(七)

第三　朗讀練習の方法……二

語部(二)　祝詞と宣命(二)　物語と朗詠(二)　謠曲と狂言と淨瑠璃(二)　聲明(二)　朗讀法の組織的研究(二)　發音法と表出法(二)　發音練習(二)　正讀練習(二)　美讀練習(二)

第四　發音法……一六

一　發音器官の事……一六

氣流發聲部(一六)　音響發生部(一六)　共鳴洞(一六)　鼻腔(一六)　口腔(一七)　咽頭(一八)　喉頭(一八)
聲門(一八)

二　國語音の要素……一九

集團共通の音聲(一九)「五十音圖」の性質(一九)　五つの短母音(二〇)　母音圖(二〇)　母音の順序(二一)
中間母音(二三)　有聲音と無聲音(二三)　續音と斷音(二三)　カ行字の音及びその
鼻音(二四)　サ行字の音(二五)　ザ行字の音(二五)　タ行字の音(二五)　ダ行字の音(二六)　ナ行字の音
(二六)　ハ行字の音(二七)　バ行字の音(二七)　パ行字の音(二八)　マ行字の音(二八)　ヤ行字の音(二九)
ラ行字の音(二九)　ワ行字の音(二九)　父音表(三一)　訛りの出來るわけ(三一)　謂はゆる拗音(三三)
カ行字の清拗音と濁拗音(三四)　シヤ行字とチヤ行字との清音と濁音(三五)　そのほかの拗音(三六)
拗音の言葉(三七)　假名とローマ字との對照音圖(三八)　音聲の種別による圖表(三九)　長母音(四〇)
二重母音(四〇)　母音のわたり(四一)　わたりの音(四一)　撥音(四一)　促音(四三)

三　語音變化の事……四四

國語音の單位(四四)　語音變化の四種類(四四)　綴字と發音(四五)　字音假名遣(四六)　二語連合の字
音(四八)　和語假名遣(四八)　梵唄と謠曲(五一)　文語文と口語文(五一)

四　アクセントの事……五二

アクセントの研究(五三)　日本語は高低アクセント(五三)　アクセントの型(五三)　地方アクセント
の比較(五四)　東京語のアクセントの性質(五五)　アクセントの型の種類(五五)　平板式と起伏式
(五六)　漢字三音考の說(五七)　同綴字の語のアクセント(五八)　人名のアクセント(五八)

五　發音練習の事……五九

模範と練習(五九)　母音を主とする練習(五九)　父音を主とする練習(六〇)　アクセントの練習(六二)
語音の斷續(六三)　言語の紛亂(六四)　語言の清濁(六四)　發音矯正の事(六六)　百人百癖(六六)　矯正
法(六六)　小聲發音法(六七)　徐々發音法(六七)　母韻發音法(六七)　父音發音法(六八)　混成法(六八)
興味ある發音練習(六八)　早言(六九)　早言の分類(六九)　頭韻をふむもの(七〇)　脚韻をふむもの(七〇)
連鎖を成すもの(七一)　紛れ易い類音を含むもの(七一)　面白く拍子取を成すもの(七二)　早言の發
達(七三)　早言應用の注意(七三)

第五　表出法……七五

一　句讀……七五

句讀一名ポーズ(七五)　語法的句讀(七六)　句點の例(七六)　讀點の例(七七)　挿入の例(八二)　文の成

立(八三)　美辭的句讀(八四)　强めのポーズ(八五)　整句のポーズ(八五)　休止の長さ(八七)

二　重念(ねん)……八八

重念一名エンフアシス(八八)　理解的重念の二種(八九)　一般的のもの(八九)　特殊的のもの(八九)
主眼(八九)　對應(九〇)　緣語や諷喩(九〇)　情調的重念(九一)　かさね(九二)　ひきのばし(九三)　さけび(九三)　とぎれ(九三)　しはがれ、かすれ、さゝやき、無聲(九五)

三　昇降……九五

昇調と降調と(九五)　降調の場合(九五)　意味完結(九五)　疑問の語を入れた問(九六)　假の問(九六)
命令や希求や宣告(九七)　憤怒や憎惡(九八)　感激や慨歎(九八)　降調の二種(九九)　昇調の場合(九九)
意味未完結(九九)　疑問の語を入れない問(一〇〇)　歡喜や仁愛や有望(一〇〇)　絶叫や號令(一〇一)　崇拜や稱讃(一〇一)　驚愕(一〇一)　祈願(一〇二)　非常の調子(一〇二)　アイロニーや皮肉や頓智(一〇二)

四　讀聲の高低・强弱・緩急……一〇三

讀聲の總體について(一〇三)　聲帶と聲門(一〇三)　聲の高低(一〇四)　人聲の音域(一〇四)　男聲と女聲(一〇四)　聲の强弱(一〇五)　音の緩急(一〇六)　音色(一〇六)　音聲の調和(一〇六)　感情と調子(一〇六)　樂記の所說(一〇七)　感情表出と讀聲との一覽表(一〇七)　讀聲の變化(一一一)　單調(一一一)　聲の强め方(一一一)　淨瑠璃の表出法(一一三)

五　讀聲の高低・强弱・緩急の文例……一一三

一、莊重(一一四)　二、畏敬(一一五)　三、稱讃・感謝(一一七)　四、勝喜び(一一九)　五、歡喜(一一九)　六、滿足(一二〇)　七、謙遜(一二〇)　八、謹厚(一二一)　九、悲哀(一二二)　一〇、愁歎(一二三)　一一、沈鬱(一二四)　一二、不平(一二六)　一三、憂懼(一二六)　一四、歎願(一二七)　一五、失望(一二八)　一六、壯美(一二八)　一七、壯快(一二九)　一八、上機嫌(一三〇)　一九、怨恨(一三〇)　二〇、報復(一三二)　二一、激怒(一三三)　二二、叱責(一三四)　二三、自慢(一三四)　二四、侮蔑(一三六)　二五、嘲笑(一三六)　二六、戲弄(一三六)　二七、滑稽(一三七)　二八、驚愕(一三九)　二九、恐怖(一四〇)　三〇、畏懼(一四一)　三一、煩悶(一四三)　三二、疑惑(一四三)　三三、優柔(一四三)　三四、祕密(一四四)　三五、羞恥(一四五)　三六、懺悔(一四五)　三七、柔和(一四六)　三八、仁慈・親切(一四六)　三九、安寧(一四七)　四〇、優美(一四八)　四一、慷慨(一四九)　四二、勇武・豪邁(一五〇)　四三、壯烈(一五二)　四四、祈願(一五三)　四五、忠實・熱誠(一五五)　四六、確信(一五八)

六　詞藻と表出法……一六〇

詞藻と文章(一六〇)　直喩法(一六〇)　示例法(一六二)　隱喩法(一六三)　諷喩法(一六三)　提喩法と換喩法(一六四)　聲喩法(一六五)　擬人法(一六七)　現寫法(一六九)　誇張法(一七一)　稀薄法(一七一)　引用法(一七三)　枕詞法と序詞法(一七三)　掛詞法(一七四)　緣語法(一七五)　口合法(一七六)　反覆法(一七六)　集合法と分列法(一七七)　列叙法(一七八)　改說法(一七八)　急轉法(一七八)　倒置法(一七九)　省略法(一八〇)　對偶法(一八一)　對比法(一八三)　漸層法(一八四)　警句法(一八五)　反言法と皮肉法(一八六)　矛盾法(一八六)　疑問

法三種（一八）　設問法（一九〇）　問答法（一九一）　感歎法（一九二）　整句法（一九四）　押韻法（一九六）　連鎖法（一九七）

第六　朗讀法餘說……一九八

一、朗讀者の心得（一九八）　二、教師の心得（一九九）　三、朗讀と人數（二〇一）　四、惡讀（二〇二）　五、癖なほし（二〇三）　六、朗讀と呼吸（二〇四）　七、呼吸演習（二〇五）　八、聲の異狀（二〇七）　九、素讀と朗讀と諳誦（二〇八）　一〇、韻文の朗讀（二〇九）　一一、宗教書の朗讀（二一三）　一二、語物や謠物と朗讀（二一三）　一三、朗讀等の修養（二一五）

附錄

一、日本「早言」集（附、支・英・獨・佛の早言）……二二七

一、アクセントの文例……二三五

一、「五十音圖」の研究……二四一

一、朗讀法精說索引……二八三

目次終

朗讀法精說

日下部重太郎著

第一　序說

朗讀法の實用と趣味

明治初年に我が國民の新教育が興つてから既に六十餘年、國民教育は益々盛になつてゐる。さうして國語教授は國民教育の重要な部分を占め、國語國文を練り磨く所の素養となる朗讀の發達は、國語教授の成績を擧げるのに緊要である。特に現今は標準語を立てゝ之を全國にひろめるのだから、學校を始として一般の讀書界でも朗讀を盛にすることが望ましい。また朗讀は談話や演說その他廣くエロキューション卽ち能辯術の素養として實用の上からも趣味の上からも大切なものである。

朗讀法の研究

我が國語の朗讀法の研究の必要については、明治二十年代及びその後に外山正一・坪內雄藏・伊澤修二・三宅米吉・關根正直・饗庭篁村・岡倉由三郎らの諸先覺（一）によつて唱へられたのであつた。しかしその研究は容易に進まなかつた。その時分には國語の朗讀法の研究書

といふものが殆ど無かつた。前に坪内雄藏博士が主宰された早稲田の文藝協會において、朗讀法の研究が始められたと聞いたが、その成果としての研究書は現れなかつた。余は明治四十年前後からその研究を始めたが、國語方面の參考書の乏しいのに困つた。先づ幾多の洋書[一]を參考とし、國語の實際について研究して見て、大正三年に初めて「國文朗讀法」[三]といふ小著を發表した。何分にもその頃は、國語調査委員會の「音韻調査報告書」[四]などは有つたが、國語の音聲に關する基礎研究が、思はしく進んでゐない憾が有つた。その後に官省と民間とから、音聲に關する研究が發表され、大正十五年には「音聲學協會」[六]が設けられ、その會員らの研究を編輯した「音聲の研究」が昭和二年から毎年發表されてゐる。近來は朗讀が蓄音機で聽かれ、またラジオで放送される。かやうにして我が國語の朗讀法も段々と發達すべき氣運に向つたことは誠に喜ばしい。

〔註一〕明治時代に朗讀の研究が盛に唱へられたのは、その廿年代である。その研究の必要が感ぜられたのは、是より先に、普通教育の發達、公私について朗讀の增加、從前の文藝の研究、言文一致體の文章の勃興、特に西洋のエロキューションの研究の刺戟によるのである。外山博士は、明治十年代から新體詩と共に朗讀法を奬め、時々公會の席で自作の新體詩を朗讀し、廿九年に「新體詩及び朗讀法」の一篇を公にされた。坪内博士は、廿六年に「小羊漫言」を刊行し、その中に、宿論の讀法を興さんとする趣意を載せ、卅八年には同志と共に文藝協會を創立し、朗讀の一部門を設けられた。

諸先覺の唱道

伊澤修二氏は、十年代から發音及び讀方に留意し、卅六年に樂石社及び樂石學院を創建し、國語正讀、吃音矯正などを實行し、四十四年に「國定讀本正讀法」を著された。三宅米吉博士は、廿二年に「文」第一卷に「讀本教授ノ趣意」と題して國文の讀み方を說かれた。關根正直博士は、かねて同志と共に「讀會」を設け、廿四年に「早稲田文學」第一卷に「國文朗讀法」の一文を寄せられた。また櫻庭算村氏は、廿四年に「國民之友」第百五號に「讀かた」について說かれた。岡倉由三郎氏は明治卅四年に「發音學講話」を著された。その他は、此に之を略する。

洋書の事

〔註二〕その頃參考とした書物は、次の如きもので有つた。Elocution は「能辯術」或は「朗讀法」と譯される。單に之を「能辯術」と譯すれば、朗讀法をも含むものと了解されたい。

C. Fleming: "The Art of Reading & Speaking". (フレミング氏の朗讀及び談話の法)
Rice: "The Art of Reading". (ライス氏の朗讀法)
J. M. D. Meiklejohn: "Expressive Reading". (メイクルジョン氏の表情朗讀法)
W. Graham: "Elocution". (グレーアム氏の能辯術)
C. J. Plumptre: "Lectures on Elocution". (プラムプトル氏の能辯術講話)
J. Forsyth: "The Ptactical Elocutionist". (フオルシス氏の實用的能辯家)
J. Walker: "Elements of Elocution". (ウオーカー氏の能辯術原理)
J. Millard: "Grammar of Elocution". (ミラード氏の能辯術の語法)
G. L. Raymond: "The Orator's Manual". (レーモンド氏の能辯家要覽)
W. Vietor: "Elemente der Phonetik". (フィエトル氏の音聲學原理)

以下に何氏の說と記すのは、それ〳〵その著書に據つたのである。

〔註三〕「國文朗讀法」大正三年十月初版丁未出版社發行、大正五年四月增訂再版。長らく絕版。

〔註四〕「音韻調査報告書」一冊、附、「音韻分布圖」廿九枚、文部省國語調査委員會編纂、明治卅八年三月日本書籍株式會社發行。

〔註五〕その書物は、

佐久間鼎著「國語のアクセント」、大正六年心理學研究會發行。

文部省編纂「アクセントとは何か」、大正八年同省發行。本書の編述は、國語調査主任保科孝一・國語調査囑託安藤正次・東條操・神保格・佐久間鼎の諸氏の擔任で出來た。

佐久間鼎著「國語の發音とアクセント」、大正十一年同文館發行。

神保格著「國語音聲學」、大正十四年明治圖書株式會社發行。

石黑魯平著「國語教育の爲の音聲學」、昭和三年目黑書店發行。

佐久間鼎著「日本音聲學」、昭和四年京文社發行。

神保格著「尋常小學國語讀本の發音とアクセント」、昭和五年厚生閣發行。

神保格著「話言葉の研究と實際」、昭和六年明治圖書株式會社發行。

〔註六〕「音聲學協會」は、大正十五年九月に「廣く日本語及び日本領土內の言語の音聲を研究すること」を目的として設立された。會長は上田萬年、副會長は藤岡勝二・新村出、顧問は岡倉由三郎・高楠順次郎、幹事は市河三喜・神保格・橋本進吉・石黑魯平・三宅武郎の諸氏。事務所は東京市小石川區竹早町百廿番地。會員の研究を編輯した「音聲の研究」を每年發行してゐる。

音韻調査報告

近來の音聲研究書

音聲學協會

朗讀法とは何か

エロキュトション

第二　朗讀法とは何か

朗讀法といふことは一應わかつてゐるやうだが、國語の代表的辭書に「朗讀」を「よみあぐる」とか「聲高くよみあぐること」と說明してある位に過ぎない。また支那では早く唐朝〔七〕の文學者の文に「朗讀」といふ語があるけれども、それは「默讀」に對して云つた位のものである。「讀みあぐる」とか「朗讀」といふからには、そこに何等かの方法があつたはずである。たゞ之を朗讀の方法として組織的に記述したか否か、それが遺つてゐるか否かと云ふに、我が國でも支那〔八〕でも、之を組織的に記述した書物が見えなかつたのである。

さて西洋においては、英語で謂はゆるリーディング(Reading)卽ち朗讀は、エロキューション(Elocution)〔九〕の一類としてあり、その研究が盛である。エロキューションの定義は繁簡幾樣にも說かれてゐるが、先づ、

言語〔一〇〕の意味を聽者が十分に了解するやうに發表するばかりでなく、なほ言語の力と美と諧調とをも感ずるやうに發表する術である。

といふやうな定義が、繁簡宜しきを得たものと思はれる。これを言ひ換へて見ると、

言語文章を正しく且つ趣味あるやうに、言ひ表はし又は讀みあげる術である。

演述
諳誦
朗讀
讀物と語物と謠物

といふことになる。さうしてエロキューションは、これを次の三類に分けて見られる。

一、演述即ちオラトリー(Oratory)　この中には演說や講話や談論や對話などを含み、身振や手眞似を伴ふ場合もある。〔一一〕

二、諳誦即ちレシテーション(Recitation)　既成の文章を複現することにおいては朗讀と同樣であるが、文章を見ないで行ふのである。

三、朗讀即ちリーディング(Reading)　既成の文章を見て之を讀みあげることである。諳誦は朗讀の出來た後に行はれるのであり、演述に熟達するためには朗讀と諳誦との素養を要する次第である。

そこで朗讀法といふものは、既成の文章を見て、正しく且つ趣味あるやうに、之を讀みあげる方法であると云はれる。こゝに、朗讀即ち「讀む」といふ術と、「語る」といふ術と、「謠ふ」といふ術と、「純音樂」といふ術との異同及び關係を一言しておきたい。〔一二〕音樂家の說明によれば、讀物は即ち朗讀する種類のもので、語物には、朗讀に音樂的の節が從として加はり、謠物には、語り物におけるよりも更に節が大切となつて、意義の方が從となり、純音樂に至つては、音ばかりの節となるのである。かやうな次第で、朗讀は、淨瑠璃の如き語物や、謠曲の如き謠物にまで關係を持つのである。

思想感情の會得
朗讀法の自覺と運用

さて朗讀法の定義に擧げたとほり、既成の文章を正しく且つ趣味あるやうに讀みあげるのであるから、朗讀する前に、必ず先づ、その文章の內容たる思想感情を能く會得して、之を我がものとすべきである。さもなければ、その朗讀は、精神のこもつてゐない不自然なものとなる。〔一三〕「上手な朗讀とは、人工的に話すのだ」と說いた人もあるが、〔一四〕「上手な朗讀とは、むしろ自然的に話すのだ」といふ方が、より適當と思はれる。かの九代目團十郎が〔一五〕「遠藤武者盛遠」を演じた時の袈裟遺書の朗讀や、文樂座の攝津大掾〔一六〕が「酒屋の段」を語る時の半七書置の朗讀の如きは、その眞に迫るの妙境に達したものだ。「由良之助をやれば、先づ由良之助の心となれ」とは、先師團十郎の敎訓であると、〔一七〕その高弟から聞いた所である。それ故に、その思想感情を會得しかねる程度の文章を無理に朗讀し又はさせようとするのは、禁物である。さうして、その程度に適當した文章を選んだ上で、能く之を會得し又はさせてから朗讀すべきである。朗讀法にたよれば、何でも上手に朗讀が出來るものではない。上手な朗讀を成すがためには、必ず先づ適當な文章の思想感情を我がものとしてから、適切に朗讀法を運用すべきものである。

所で、常々の對話や談論においては、時と場所と相手とに應じて自然に各自の思想感情を言ひ表はすのであるが、朗讀においては朗讀者の心一つで、文章中にある他の人々の心

情を複現せねばならぬ。平生は別に氣をつけないで言葉遣をしてゐるのを、朗讀においては、言葉遣にさま〳〵氣をつけて、此處はかう、其處はさう、と工合好くせねばならぬ。それが朗讀法の說く所である。その說く所は、皆當然の事ばかりだと氣がつくのである。けれども、その當然の事を能く自覺して練習し、之を自由自在に運用することが必要なのである。〔一八〕ロック(J. Locke)は「恰も天才と思はれるほど優れた人々でも、多くは反覆練習の結果に由るものだ。」と敎へた。〔一八〕ジョンソン(B. Johnson)は「藝術は、習ひ熟すれば自然に等しい。」と說いたやうに、練習の功を積めば、つひには妙境に入ることを得るのである。そこで、朗讀練習の方法に說き進まねばならぬ。

〔註七〕唐の詩人李義山が「與陶進士書」の中に、「有始朗讀、而中有失字壞句、不見本義者」とある。爾雅には「明朗也」とあり、說文には「朗明也」とある。康熙字典に「朗」は「朗」の本字としてある。

〔註八〕前に我が國に來て居た浙江省の錢稽孫氏らに尋ねても、かやうな書物は見當らないとのことで、本國の學者に問合せてもらつたところ、同氏の叔父から「漢文朗讀法不二但未レ見、似竟未二有一此書。(中略)讀法之作、絕無二其人一、可レ怪可レ羞。」と云ふ返答があつた。

〔註九〕エロキューション(Elocution)といふ語は、もとエロクイ(Eloqui)即ち「言ひ出す」といふ意義のラテン語から出てゐる。

〔註一〇〕C. J. Pumtre: "Lectures of Elocution"

〔註一一〕手眞似や身振は、心情を發表する自然の方法で、言語を助けるものである。之を科とも云ひ、英語では Gesture と云ふ。科の事は、エロキューションや言語學の書物の中に附說してある。その特說の書としてはベーコン(A. M. Bacon)氏の "Manual of Gesture"(ジェスチュア要覽)やオット(E. A. Ott)氏の "How to Gesture"(ジェスチュアの仕方)やモシャー(J. A. Mosher)氏の "The Essentials of Effective Gesture"(實用ジェスチュア精髓)などがある。科は指示と描寫と符號との三種に分けられる。さうして世界的に一樣なる科と國民的に特有なる科とがある。朗讀には科を伴なはせるに及ばないが、演說などには之を伴なはせねばならぬ。國語における科の研究も忽せにしてはならぬ。

〔註一二〕田村虎藏氏の直話。

〔註一三〕Rice: "The Art of Reading".

〔註一四〕C. Fleming: "The Art of Reading & Speaking".

〔註一五〕九代目市川團十郎の實名は堀越秀、明治時代の俳優の泰斗であり、その藝道は、同廿年四月に天覽の榮を辱くした。卅六年に六十六歳で歿した。

遠藤武者盛遠は、誤つて貞女袈裟御前を殺し、月光に照して其の遺書を讀み、翻然大悟して僧となり、文覺と號した。

〔註一六〕この竹本越路太夫は、實名は二見金助、大阪淨瑠璃界の泰斗と仰がれ、小松宮殿下から攝津大掾の稱號を賜はつた。大正三年に七十九歳で隱退し、その後に歿した。

お園は、燈火の下で夫半七の書置を讀み、夫を怨まずして我が身を咎め、克く舅姑に孝行を尽に貞

烈を盡くすの心を顯した。

〔註一七〕九代目團十郎の高弟松本幸四郎氏。

○山岡鐵舟も、三遊亭圓朝に「口で話さず、心で話せ」。と諭したと云ふ。

〔註一八〕ロック(J. Locke)は英國の哲學者、西暦一七〇四年に七十三歳で歿した。

○ジヨンソン(B. Johnson)は英國の桂冠詩宗、西暦一六三七年に七十四歳で歿した。

〔註一九〕近來のエロキユーシヨン研究書には、次の如きものがある。

H. Brown: Essentials of Reading & Speaking. (ブラウン氏の朗讀と談話との精髓)

J. Rigg: Elocution for Schools. (リグ氏の學校のための能辯術)

R. I. Patry: Elocution for Teachers & Students. (パトリー氏の教師と學生とのための能辯術)

V. McClure: Practical Elocution Book. (マクルア氏の實用能辯術書)

語部
祝詞と宣命
物語と朗詠
謠曲と狂言と淨瑠璃

第三　朗讀練習の方法

我が國においては、遠く上古に語部〔二〇〕が有つて、神代このかたの事を話し傳へ、祭祀の職にある人々は、祭神に向つて祝詞〔二一〕を讀みあげ、また宣命使は、皇族及び群臣の參列の所などで宣命〔二二〕を讀み聽かせたのである。本居宣長の歷朝詔詞〔二三〕解の序說に、

ふるき書籍目錄に宣命譜といふもの出でたり。今は傳はらぬ書なれば、いかさまなるものにか知られねど、譜と名づけたるをもて思ふに、その讀揚ざま、音聲の巨細・長短・高低・曲節などをしるべしたる物にこそありけめ。

と說かれてゐる。果してその想像の如きもので有つたか否かはさておき、さすがに本居翁の說だけ有つて、簡單ながらも朗讀法の要點に接觸してゐる說である。平安朝の數多の物語〔二四〕も、和漢朗詠集も、名からして物語と云ひ、朗詠と云ふ。鎌倉時代に現はれた平家物語の如きは、徒然草〔二五〕に、

行長入道、平家物語を作りて、生佛といふ盲人に語らせけり。（中略）かの生佛が生れつきの聲を今の琵琶法師は學びたるなり。

と記してある。室町時代から現はれた謠曲〔二六〕や狂言や淨瑠璃など、何れも能辯の術に基づか

聲明

朗讀法の組織的研究

ぬものはない。それらの發達には、佛家の聲明(一七)(一名梵唄)の恩惠がある。聲明はもと佛教と共に印度から支那に傳へられ、それが弘法大師や慈覺大師によつて支那から我が國に傳へられ、音聲研究の技藝として、廣く宗教及び藝術の上に應用された。斯の如く磨かれて、我が國のエロキューションは大いに進歩し、中江兆民居士(一八)は、今一度大阪へ行き、文樂座で越路太夫(後の攝津大掾)を聽いてから死にたいとさへ述懷した。かやうに古代から我が國に朗讀法の實質はありながらも、之を組織的に研究して明細に記述說明して世に弘める の風が起らなかつたのは、惜しむべき事であつた。西洋においてはギリシヤやローマの昔からエロキューションが能く研究され、近代に至つては益〻盛に研究されて、その方法を組織的に記述說明してゐるから、その發達が顯著であるのである。

今、朗讀法の組織を軍隊の教練にたとへて見るに、百萬の大軍の行動も、その基づく所は各個教練から始まるのだ。各個教練が出來てから小部隊の教練を行ひ、それから順に大部隊の演習を行つて、遂に大軍の行動が見事に出來るのである。朗讀の事も之と同樣だ。一音一言の發音が正しく出來ないのに、一句一節が善く讀みあげられるはずがなく、ましてや一段一章の讀みあげの好成績は期待されないのである。一音一言の發音さへ正しく出來ない者が、漠然と直ちに文章の朗讀練習に收掛るのは、實に覺束ない次第である。「急がば まはれ、瀨田の唐橋」の敎訓もあるとほり、先づ發音を正して後に、順を逐つて文章の朗讀に進むのが宜しい。そこで朗讀法の理法は、

發音法と表出法

一、發音法——言語文章における音聲を明確に發する方法。

二、表出法——言語文章における思想及び感情を適當に表出する方法。

の二つに大別し、更に之を細別して說くべきである。さて、その理法を實際に適用する練習は、便宜のため、およそ次の三類に大別すべきである。

發音練習

(A) 發音練習一名機械的朗讀練習——言語文章の音聲を明確に發するための練習。

正讀練習

(B) 正讀練習一名論理的朗讀練習——言語文章の思想を正しく讀み表はす爲の練習。

正讀練習には、明確な發音と、理解を正しくするに足る所の表出とが、必要である。

美讀練習

これは、尋常小學國語讀本でいへば、「物ノ價」(二九)「ガラス工場」「我が國民性の長所短所」の如き非感情的文章を讀む場合に適當する。

(C) 美讀練習一名表情朗讀練習又は審美的朗讀練習——言語文章の思想感情を正しく且つ趣味あるやうに讀み表はすための練習。美讀練習には、明確な發音と、理解を正しくし趣味を感ぜしめるに足る所の表出とが、必要である。これは、同讀本の「扇のまと」「曾我兄弟」「勝安房と西鄕隆盛」の如き感情的文章を讀む場合に適當する。

さて感情的文章を讀むのには、美讀の程度までに至るべきだが、少くとも正讀の程度には及びたい。それで、或文章を正讀の程度にするか、又は美讀の程度にするかは、その文章の性質如何によることであり、或はその朗讀者の熟練如何によることである。以下の章に朗讀法研究の二大綱たる發音法と表出法とについて解說しよう。

〔註二〇〕上古、朝廷に仕へて、天つ神の事蹟を語り傳へた部族である。古語拾遺に據るに、上古には文字が無かつたので、貴賤老少みな口から耳へと次々に語り傳へたのである。

〔註二一〕祝詞（のりと）は「宣言（のりとごと）」の約で「のりとごと」と言を重ねても云ひ、神に對して宣り申す詞である。

〔註二二〕宣命（せんみやう）は國語を以て勅命を宣布すること、又はその文書で、古は御即位・改元・立后・立太子等の時の大儀に用ひられたもの。

〔註二三〕歷朝詔詞解は上古の宣命六十二文を本居宣長が解說したもの。本書に引用した所は、その總說にある。

〔註二四〕物語は「はなし」即ち談話の義で、傳記や小說などを記した書物をいふ。和漢朗詠集は、藤原公任が和漢の詩歌文章中の名句を集めた書物で、之に節をつけてうたふのである。

〔註二五〕徒然草の第二百廿六段から引用。

〔註二六〕謠曲は「うたひ」とも云ひ、能樂に用ひる歌曲であり、節をつけてうたふものである。狂言は中古の田樂に附屬して起つた喜劇であり、近古からは能樂の間に演じ、對話式に出來てゐる。淨瑠璃は織田信長の頃から始まり、後には三味線に合はせて語る語物の一種である。

〔註二七〕聲明（しやうみやう）は、古代印度の五明（聲明と工巧明（くぎやうみやう）と醫方明（いはうみやう）と因明（いんみやう）と內明（ないみやう））の一つで、音韻や文字や言語の道を明かにする學藝を云ふ。それが佛敎に連れて、支那それから日本に傳はつた。日本では、通例、佛事法會等に行ふ梵唄・讃頌などをさして聲明と云つてゐる。

〔註二八〕中江篤介は兆民居士と號し、晩年に不治の病を覺悟して「一年有半」を著した。この述懷はそれに見えてゐる。明治卅四年歿す。年五十四。

〔註二九〕「物ノ價」（九の十一）、「ガラス工場」（十一の廿七）、「我が國民性の長所短所」（十二の廿七）

〔註三〇〕「扇のまと」（四の十七）、「曾我兄弟」（四の廿四）、「勝安房と西鄕隆盛」（十二の廿七）

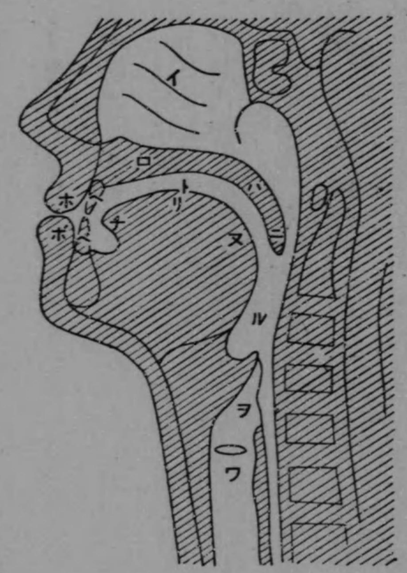
第四　發音法

言語に正しい明らかな發音を要するのは、活字版に正しい鮮かな活字を要するやうなものである。字體に正しい標準を要するやうに、音聲に正しい標準を要する。語音に昔と今との變遷があるから、今の標準音は昔の標準音とは合はない所があり、また同時代の標準音と方言音とも合はない所がある。わが現代の國語の標準音といふのは、現今の東京語の標準的發音に據るのである。この章には、その發音法について說かう。

一　發音器官の事

氣流發生部
音響發生部
共鳴洞
鼻腔

まづ發音器官の事から說く。發音器官は氣流發生部と音響發生部と共鳴洞との三部に分れる。その氣流發生部は肺である。さうして大概は肺から呼出する氣流を利用して音聲を發する。つぎに音響發生部は、聲帶から唇に至るまでで、喉頭の內にある聲帶で聲を生じ、それから口蓋と舌と唇とで破裂音や摩擦音を生ずる。つぎに共鳴洞といふのは、主として咽頭と口腔と鼻腔とであり、中にも口腔は各母音の別を生ずる要所であり、鼻腔は鼻音を發する要所である。なほ說明を加へて見ると、鼻腔は、中央にある鼻中隔といふ壁によつて、左右兩方の空洞に分れ、前方の鼻孔によつて外氣を通じ、後方は咽頭に開く。口腔は、上唇と下唇と、上齒と下齒とで、外方からの入口を作り、左右兩方は頰の內面で圍まれ、上方には口蓋があつて丸天井のやうな形をする。硬口蓋は、上齒の列の間は上顎骨を藏する所で堅い。硬口蓋の縁邊の齒に近い所を齒齦（しぎん）といふ。卽ち「はぐき」である。軟口蓋は口蓋の奧の半分で骨を藏しないから軟い。口內を覗いて見ると、軟口蓋の後端はアーチ形の門のやうに見え、その中央に垂れ下つた小肉片がある。それが懸壅垂（けんようすい）卽ち「のどびこ」である。口腔の床に當る所は舌の表面であり、その表面を假に舌尖と舌端と前舌面と後舌面



〔三一〕
發音器官の縱斷面圖
（說明）咽頭の下方は食道に連なり、喉頭の下方は氣管に連なる。飲食物をのみ下す時には、喉頭の上につき出た會厭が下つて喉頭を閉す。後部軟口蓋は上げ下げをして鼻腔への氣息道の閉ぢ開きをする。

イ　鼻腔　　チ　舌尖
ロ　硬口蓋　　リ　前舌面
ハ　軟口蓋　　ヌ　後舌面
ニ　懸壅垂　　ル　咽頭
ホ　上唇と下唇　　ヲ　喉頭
ヘ　上齒と下齒　　ワ　聲帶
ト　口腔

とに分けて見る。舌尖とは舌の尖端の所をいひ、舌端とは舌尖から左右に連なる舌のへりをいひ、前舌面とは硬口蓋と相對する部分をいひ、後舌面一名奥舌面とは軟口蓋と相對する部分をいふ。さて咽頭は、上方は鼻腔と相連なり前方は軟口蓋によつて口腔と境し、下方は喉頭の入口と食道の入口と相連なる空洞をいふ。咽頭と喉頭との境に會厭(えゑん)があつて、飲食物をのみ下す時には、それが氣管へ入らぬやうに蓋をする。なほ喉頭は、氣管の上端に位し數箇の軟骨で圍まれてゐる一區劃で、その中に聲帶がある。聲帶は、身體の前後の方向に左右から棚のやうに張り出した靱帶筋肉の粘膜より成り、筋肉の作用によつて左右に開いたり、左右から近よつて來て中央で密着して空氣の出入を遮斷したり、又は稍近よつて中間に狹い空隙を殘したりすることが自由である。聲門といふのは、その空隙をさして云ふのである。手を喉頭のある所の外方に當てゝ見ると、俗に「喉佛(のどぼとけ)」といふ凸つた軟骨に觸れる。その軟骨の內側の喉笛の所に聲帶とその聲門があるのである。

咽頭

喉頭

聲門

〔註三一〕この圖は W. Vietor: "Elemente der Phonetik" に據る。

「舌尖」を「舌頭」ともいひ、「前舌面」を「舌上」ともいひ、「後舌面」を「舌本」ともいひ、また「舌上」と「舌本」との中間を特に「舌中」ともいふ。

二　國語音の要素

集團共通の音聲

我等の發音器官から發する音響には、笑ひ聲や泣き聲やせきやくしやみなどのやうに反射的に生ずるものもあり、または個人特有の奇聲といふやうなものもあるが、我等は之を一定の言語音聲の中には入れない。一團の民族は成るべく同樣な音聲を用ひて思想感情を表はさうとするから、その音聲には共通の習慣が成立ち、その習慣の成立つた集團の中にある者は、その音聲をその集團の習慣に適應させようとする結果、一定の言語音聲を習得することになる。その民族の者がその言語に同化するばかりでなく、他民族の者もその集團の中に育てば、必ずその語に同化されるのである。卽ち日本人の子も米國の社會に育てば英語を習得し、米人の子も日本の社會に育てば日本語を習得する。さうして地方語ばかりで育てば地方語を習得し、善く標準語で教育すれば標準語を習得するのである。

五十音圖の性質

わが國語では、標準音を練習するに「五十音圖」〔三二〕を用ひてゐる。五十音圖は悉曇(しつたん)〔三三〕卽ち梵字綴字書における字母の序列を參考し、我が國語音を經緯(たてよこ)に配置したものに、假名といふ音節文字を當てたものである。五十音圖と呼ぶけれども、昔から阿行と也行と和行とに同音同字が有り、後世の標準音では異字同音の假名なども出來てゐるから、隨分不均齊な音圖となつてゐる。さうして假名書きで、「直音」とか「拗音」とか、または「清音」とか「濁音」とか「半濁音」〔三四〕とか呼んでゐるのは、今日の音聲學から見ると、よほど不合理なものである。

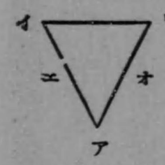
それで先づ「五十音圖」や「拗音圖」などといふものゝ正體を吟味しよう。しかし假名は音節文字であるので、音韻組織や音韻變化を確實に說明するのに不適當であるから、單音文字であるローマ字〔三五〕を以て、假名と對照して說明して行くこととする。尤も音聲學を說く積りでは無いから、それは其の書物に讓り、こゝには、標準音の要領を說き、且つ有り勝の誤解を除きたいと思ふ。

五つの短母音

ア　イ　ウ　エ　オ
a　i　u　e　o

この五つは、我が國語の標準短母音である。アは、口を廣く大きく開き、舌を自然に低めて發音し、イは、口を扁平に狹く脣を開き、前舌面を硬口蓋に近づけて發音し、ウは、口を平たく小さく開き、後舌面を軟口蓋に近づけて發音する。エは、オとイとの中間の母音で、イの場合より脣を稍廣く開き、舌を稍低めて發音し、オは、オとウとの中間の母音で、ウの場合より脣を稍大きく圓く開き、後舌面を稍低めて發音する。

母音圖

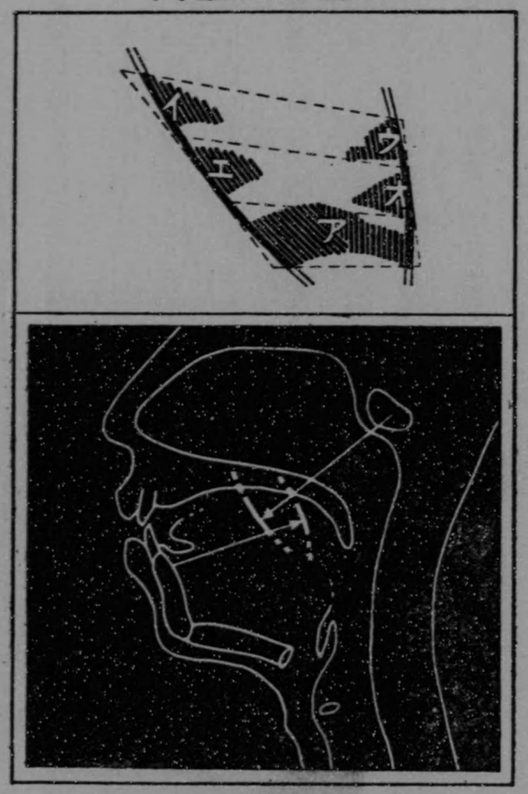


從來の音聲學者の謂はゆる「母音三角」は、舌の位置によつて圖示したものである。しかし、實際の形はゆがみ曲つた三角に類似する所の舌の運轉と口の開合との狀態を、假に三角と名づけたのである。次のページに

大西雅雄氏の國語の母音圖表〔三六〕を「音聲の研究」第二輯から縮寫して、國語の母音の位置を示す。

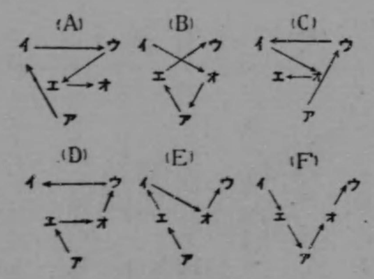
現今普通の「五十音圖」の母音の順序は、「五十音圖」の祖圖卽ち天台座主良源傳本と稱するものの順序と同じく、悉曇を參考したもので、その順序はアイウエオである。これを謂はゆる「母音三角」を以て圖示すると、次のページの(A)圖の如くである。また(B)圖のイオアエウの順序は、

大西母音圖表



藤原道長のころの古寫本「孔雀經音義」の卷末に附記された音圖に見えるものである。また(C)圖のアウイオエの順序は、鎌倉時代の初期文治年間に「管絃音義」の文中に記され

たものであり、(D)圖のアエオウイの順序は、(C)圖と同じころに顯昭法師の「古今集註」の文中に記されたものである。また(E)圖のアエイオウの順序は、西洋のアルファベットにおける母音字の排列である。以上の五種の排列は、次に母音の條件の比較に示すやうに、互に特色を有するものである。



	(舌の前後の位置)	(顎や舌の開き)	(脣の開いた形)
イ	前母音	小開き	平口
エ	前母音	半開き	平口
ア	中母音	大開き	平口
オ	奥母音	半開き	圓口
ウ	奥母音	小開き	平口

此のやうに比較して見ると、口腔における諸器官の勞力が比較的に少く且つ順序好く發音し得るのは、(F)圖のイエアオウの順序であり、前母音から中母音へ、中母音から奥母音へと進むものである。その次は、(F)圖の順序を逆にしたウオアエイの順序であらう。しかし、それは只五種母音の連續發音の便利から云ふことである。實際の國語に現れてくる母音は、種々雜多であるから、進んで困難なアオイウエの如き順序をも加へ、種々の順序を以てその發音練習を行ふのが可いのである。

中間母音

わが國語の標準短母音は此の五つで有るけれども、人の口で發し得られる中間母音は、この間に數多ある。我等が外國語を學ぶに當つて、甚だ發音しにくい母音のあることを感ずるのは、わが國語に普通用ひない中間母音があるからである。ドイツ語におけるoウムラウト(Umlaut)の如きは、中々我等の發音し難い所のものである。名高い"Goethe"の發音の如き、その一例である。また奥羽や關東あたりの人がエとイとを混同して、「御願致しします」などと云ふことがあるのは、エとイとの或中間母音を發するのである。また名古屋地方の人の發音に、アとエとの中間母音がある。その音は、「海津郡」や「海東郡」などのア音において、著しく氣がつく。

有聲音と無聲音

母音は、喉の聲帶の振動を伴なふ音で、有聲音である。聲帶の振動を伴なはぬ音を無聲音と呼ぶ。母音の外に濁音なども有聲音で有る。また母音は、長く引き續けて發し得る音、卽ち續音である。母音の外にも續音がある。三一ページの表に示す摩擦音や鼻音がそれである。長く引き續けて發しられない音を斷音と呼ぶ。同じ表に示す破裂音がそれである。

續音と斷音

長母音や二重母音の事は、後に說かう。

カ行字の音

カキクケコ　ガギグゲゴ

ka ki ku ke ko　ga gi gu ge go

カキクケコは、父音（一名子音）kと母音aiueoとの熟音である。kは、後舌面と軟口蓋との接着で起る氣息の閉止を吹き破つて發する音である。kは無聲音で斷音である。

ガ行字の音及びその鼻音

ガ行の父音gはkの有聲音である。ガ行音が「伺ふ」「萩」「泳ぐ」「蒼笠」「眞心」の如く、語の中または下にある場合、「人が」の如く助詞となる場合には、gが鼻へかゝつて鼻濁音ngとなるのが、東京語その他の通例である。この場合にも、假名遣ではガギグゲゴの假名を用ひ、普通のローマ字綴りでもgを用ひてゐる。但し、必要に應じて、ガギグゲゴの假名、ngかġまたはŋを用ひることもある。

右の場合にngとなるのは、近畿・東海・東山・北陸の諸道（以上の大部分）淡路・阿波などである。但し、それが鼻へかゝらぬ地方も隨分廣い。卽ち九州や中國や四國や關東や越後などの全部又は幾部分においてである。それらの地方では、之をgと發音する事を許容して宜いが、標準音としては、ngを用ひるべきである。九州から近畿地方へ來てゐた人が、凡てngを用ひるのは不正であると說いたと云ふことがある。これは、すべてngを以て訛り音と思ひ誤つたものと見える。之に反して、一語の始にあるgをも鼻濁に發音するのは訛りであるから、正さねばならぬ。

サ行字の音

サシスセソ　ザジズゼゾ

sa shi su se so　za ji zu ze zo

サシスセソは、父音s（但しシの父音はsh）と母音aiueoとの熟音である。sは、前舌面と硬口蓋の前部との狹い間で氣息を摩擦させる音である。shは、sよりも下脣を稍廣く開き、前舌面と硬口蓋との狹い間で氣息を摩擦させる音である。ローマ字でshと書いても、二音では無く、一音である。それで、之を〜などと書くこともある。sもshも無聲音で續音である。

ザ行字の音

ザズゼゾの父音zは、sの有聲音であり、ジの父音jはshの有聲音である。jは稀にzhと書くこともあるが、やはり二音では無い。

タ行字の音

「芹」「先生」などを訛つてシェリ（sheri）シェンシェー（shenshē）などと言ひ、また「錢」「大膳」などを訛つてジェニ（jeni）ダイジェン（daijen）などと言ふのは、訛音である。これは正さねばならぬ。

タ　チ　ツ　テ　ト　ダ　ジ（ヂ）　ズ（ヅ）　デ　ド

ta chi tsu te to　da ji (dji) zu (dzu) de do

タチツテトは、父音t（但しチとツとの父音は各別のもの）と母音a i u e oとの熟音である。tは、前舌面のへりに近い部分と硬口蓋の前邊（上齒齦）と上齒の裏との接着で起る氣息の閉止を吹き破つて發する音である。tは無聲音で斷音である。チの父音は、從來英語風の綴りを用ひてchと書くのだが、實はtとshとの二合父音で、精細にはtshと綴るべきである。ツの父音は、從來の綴りの如くtとsとの二合父音である。

ダ行字の音

ダデドの父音dは、tの有聲音である。ヂとヅとの父音は、古の標準音ではジとズとの父音と各別で有つた事は、その假名の字體を各別にしてゐる事や、西部かの方言音において各別に發音してゐる事で考へられる。しかし東京語其の他の發音では、前に說明したジとズと同じくji, zuと言つてゐる。舊いローマ字綴りではヅをdzuと書いて有るけれども、今の標準音とはならない。

ジとヂ、ズとヅとの發音の別は、今は高知・宮崎・鹿兒島・長崎・佐賀などの諸縣に殘つてゐる。その他の諸府縣では、ジにヂ、ズにヅが合併され、または其の區別が不分明となつた。之を區別する地方では、それを許容して宜しいが、標準語としては東京語の發音に從ふべきである。

ナ行字の音

ナ　ニ　ヌ　ネ　ノ

na　ni　nu　ne　no

ナニヌネノは、父音nと母音a i u e oとの熟音である。nは、dが鼻へかゝつた音である。ニの場合は、前舌面が口蓋の中央の方へ廣く接觸する。「退（の）く」を方言にドクと言ひ、「男女」を漢音ではダンヂョ、吳音ではナンニョと言ふなど、謂はれのある事である。

ハ行字の音

ハ　ヒ　フ　ヘ　ホ

ha　hi　fu　he　ho

ハヒフヘホは、父音h（但しフの父音はf）と母音a i u e oとの熟音である。hは、通常の呼吸の場合より聲門を少しく狹め、氣息を吐き出して發する音である。フの父音fは、英語の脣齒音のfの如く强くは無いが、兩脣を近寄せ、その間から氣息を吹き出す時に、兩脣が少し摩擦される音である。hもfも無聲音で續音である。

〔三七〕ハ行の古音がf、更に遡つてはpで有つたらうと云ふ事は、所々の方言音や日本語音と支那語音などとの比較研究に據つて、既に先學の考證された所である。奥羽や出雲などの方言音に、その古音の殘留と見るべきものが有るけれども、それは今の標準音に從ふべきものである。

パ行字の音

パ　ピ　プ　ペ　ポ　バ　ビ　ブ　ベ　ボ

パ行字の音

pa　pi　pu　pe　po　ba　bi　bu　be　bo

パピプペポは、父音pと母音aiueoとの熟音である。pは、兩脣の接着で起る氣息の閉止を吹き破つて發する音である。pは無聲音で斷音である。

パ行字の父音bは、pの有聲音である。卽ちpとbとは、淸音と濁音との關係である。

ハ行字の音は、變遷の上から云へば、その古音はパ行字の音と淸濁の關係が有つたと認められるけれども、今のハ行字の音はパ行字の音と別種のものであり、たゞ僅かにフの發音において脣音の殘留が認められる。しかも其のフの脣音たる性質は微弱なものである。今音では、ハ行字の音はほとんど氣息音に變じてゐるから、パ行字の音をハ行字の音の半濁音と呼び、パ行字の音をハ行字の音の濁音と呼ぶのは、假名の字體に拘泥した事で、音聲學の上では、正しい呼び方とは云はれない。

マ行字の音

ma　mi　mu　me　mo

マミムメモは、父音mと母音aiueoとの熟音である。mはbが鼻へかゝつた音である。「煙」をケブリともケムリとも言ひ、「文武」を漢音ではブンブ、吳音ではモンムと言ふなど、謂はれのある事である。

ヤ行字の音

ya　i (yi)　yu　e (ye)　yo

ヤ　イ(イ)　ユ　エ(イ)　ヨ

ヤユヨは、父音yと母音auoとの熟音である。yはイの發音の際よりも前舌面を硬口蓋に一層相近づけて舌に力を入れ、脣を稍兩側へ引締めて發する音である。yは半母音とも呼ばれ、有聲音で續音である。ヤ行には、昔から第二と第四との假名にア行の假名を共用してゐる。しかしyiyeの音が有り得べく、且つ現に「癒える」と言ふ樣な場合には、母音のわたりでiyeruと聽かれるのであるけれども、それは特例である。通例は之をエと發音してゐる。

ラ行字の音

ra　ri　ru　re　ro

ラリルレロは、父音rと母音aiueoとの熟音である。このrは、「舌のへり（舌端）を上齒莖（上齒齦）に輕くあて、之を離すときに出る有聲音である。」と神保格氏の「國語音聲學」に說いてある。〔三八〕これには幾多の說があつて、破裂音卽ち斷音とするのに對して、流動音卽ち一種の摩擦音で續音だとも說かれてゐる。

rはdまたはjまたはzと相互に訛ることがある。發音法が似てゐるからである。後に

例をあげる。正さねばならぬ。

ワ　イ(ヰ)　ウ(ヲ)　エ(ヱ)　オ(ヲ)

wa　i (wi)　u (wu)　e (we)　o (wo)

ワは、父音wと母音aとの熟音である。wは、ウの發音の際よりも、脣を一層相狹め、これに力を入れて發する音である。尤もこのwは、英語音などにおけるwほどに脣をつぼめる强い音ではない。wは半母音とも呼ばれ、有聲音で續音である。ワ行には、昔から第三の假名にア行の假名を共用してゐる。

キエヲは、昔からア行のイエオと假名を異にしてゐる事や、或地方の音にその父音が存してゐる事を見ても、その古音は wi, we, wo で有つた事が考へられる。今も「魚」「硫黄」と言ふ樣な場合には、母音のわたりで uwo, yuwō となることがあるが、それは特例である。今の標準音では、通例キエヲをイエオと同じに發音してゐる。

以上は「五十音圖」といふものに含む父音を說明したのである。次に我が國語に含む父音表を作つて、以上に說明した父音と父音との相互の關係を明かにしよう。

（注意）父音とは、母音卽ちVowelに對して云ふ名稱で、Consonantの譯語である。しかし之を「子音」とよぶのが、從來多く用ひられた譯語である。

	破裂音		鼻音	彈音	摩擦音	
	無聲音	有聲音	有聲音	有聲音	無聲音	有聲音
脣音	p	b	m		f	w
舌端音（齒、齒龈）	t	d	n	r		
前舌音（硬口蓋）					s sh	z j y
後舌音（軟口蓋）	k	g	ng			
喉音					h	

（萬國音聲記號では）ng＝ŋ　兩脣のF　j＝ʒ　sh＝ʃ　y＝j　ch＝t＋ʃ

從前「五十音圖」において漠然と音通及び韻通と呼び、經の通ひ、緯の通ひなどと說いた事は、前に揭げた母音圖と上の父音表とによつて合理的に說明される。例へば、京阪地方の人の訛りに「おません」を「おまへん」と云ふのは、摩擦音sのがhに變つたものである。諸所の方言の訛りに「茶釜」を「ちやマガ」と云ふのは、鼻音のmとngとの轉換である。「席」を「ミしろ」と云ふのは、母音uがiに變つたのである。なほ次に示すやうな訛りの出來たわけを吟味するのも、おもしろい。

○「鉛筆」をインピツまたはエンペツ

○「虹」をネジ　○「夢」をイメ　○「螢」をホタロ　○「心」をケケレ〔三九〕　○「風呂敷」をフルシキまたはフドシキ〔四〇〕　○「ランプ」をダン

ブ　○「枝」をエラ　○「鼠」をネルミ　○「地震」をリシン　○「水差」をミルザシ　○「紅葉」をモミリ　○「風車」をカラグルマ　○「門松」をカロマツ　○「驚く」をオロロク　○「五つ宛」をイツツルツ　○「雪達摩」をユキラルマ　○「おめでたい」をオメレタイ　○「禮」をデー　○「錢」をデニ　○「座敷」をダシキ　○「鞭」をブチ　○「蟬」をセビ　○「招く」をマネグ　○「東」をシガシ　○「人」をシト　○「身體」をカララまたはカダラ　○「小刀」をコガタラ　○「釣瓶」をツブレ　○「油」をアルバ　○「拘る」をカカラウ　○「晦」をツモゴリ　○「卵」をタガモ

〔註三二〕「五十音圖」の事は、附錄の「五十音圖の研究」に詳にする。

〔註三三〕悉曇は、梵語の Siddham の音譯で、梵語の綴字書の名稱である。その字母は、通例は摩多十二箇、之に體文三十五箇を加へて四十七箇としてある。「五十音圖」は悉曇を參考として作つたものであることを、附錄「五十音圖の研究」において明かにする。

〔註三四〕假名書きで「直音・拗音・清音・濁音・半濁音」などいふのは、假名の字形や綴字に拘泥した名稱である。

〔註三五〕發音的に出來てゐる「標準式」のローマ字綴り方を用ひて說明し、なほ必要に應じて萬國音聲記號を對照する。「標準式」は我が國語のローマ綴り方として我が國の內外に廣く行はれてゐるものである。

〔註三六〕大西雅雄氏は「音聲の研究」第二輯に「國語の母音圖表に就ての一考察」と題して、「母音圖表を說明し、その中に述べて云ふ「斯くして到着した私の日本母音圖表は、三角形や四角形ではなく、二つの異なる基點を有する二つの異なる曲線——恰も平假名の『い』字を太くした線、否寧ろ面と稱すべきもの——である。私は假に之を『い字圖表』と呼んで置く」と。

〔註三七〕ハ行古音の考證は、上田萬年博士の「國語のため」の「P音考」や、新村出博士の「東方言語叢考」の「波行輕唇音沿革考」などに詳である。

パ行音を從來の音圖においてはハ行音に對する「次清音」または「半濁音」と稱へてゐるのは、音聲學から云へば誤である。音聲學から云へば、pは清音で、bは之に對する濁音である、hまたはfはpやbの清音と云はれない。

〔註三八〕rは流動音とも呼ばれてゐる。また之を半母音に擬した人もある。

〔註三九〕古今集の東歌に「かひがねをさやにも見しが、けゝれなく、よこほりふせるさやの中山」（甲斐歌）とある。「けゝれ」は「こゝろ」の母音の轉化。

〔註四〇〕ラ行音のダ行音への訛りは、西部地方が殊に著しい。西鄕從道侯の名は、實は「隆道」の字音訛りから來たといふ。東京から福岡へ轉校した或小學生が、ウドン（饂飩）と言つて、福岡の小學生らにウロンであるとやり込められたと云ふのは、實に胡亂な話である。香川縣にも「タロッノカロノウロンヤ」（多度津の角の饂飩屋）といふ樣な例がある。大阪あたりにも斯ういふ例がある。

これから謂はゆる拗音の事を說かう。拗音とは、頗る不確かな名目であるが、凡そは或父音と「ヤ」「ユ」「ヨ」もしくは「ワ」と重なつて一つの熟音となるものとして說かれてゐる。姑く慣例の假名書きの順に之を說明して見よう。けれども拗音とは假名書きに拘泥した、

カ行字の清拗音と濁拗音

非學理的の名稱で、その中には、シャ、シュ、ショの如き單父音と母音との熟音もはいつて居るのである。

キャ	キュ	キョ	ギャ	ギュ	ギョ
kya	kyu	kyo	gya	gyu	gyo
(クヮ)	(クェ)		(グヮ)	(グェ)	
(kwa)	(kwe)		(gwa)	(gwe)	

これはカ行字の清拗音と濁拗音である。一語の中かゝ下においては、濁拗音は鼻へかゝつて鼻濁拗音 ŋya, ŋyu, ŋyo, ŋwa となること、左の通り。（萬國音聲記號では鼻濁の ŋg に ŋ を用ひる）

○行脚 anŋya　悪逆 akuŋyaku
○汗牛 kanŋyū　闘牛 tōŋyū
○金玉 kinŋyoku　崩御 hōŋyo
○因果 inŋwa　圖畫 zuŋwa

助詞の「が」のほかは、すべて一語の始にある gを鼻濁に發音するのは、訛りであるから、

シャ行字とチャ行字との清音と濁音

正さねばならぬ。

前にカ行字の音の所に述べた如く、ガ行字の鼻濁の無い地方では、濁音として發音することを許容して宜しいが、標準語の鼻濁音の事は、少くも一通り心得させるべきである。

ガ行の鼻音の無い地方の人に、その鼻濁音を強ひて發音させると、アンニャ（行脚）、トーニュー（闘牛）、ハンニャシンニョー（般若心經）などと訛り易い。

クェとグェとは、「法華」「源氏」などの場合に、假名遣として殘つてゐることがあるけれども、今は一般に、ケ及びゲと同樣に發音してゐる。

カとクヮ、ガとグヮとの別は、九州・四國・北陸道（以上の大部分）大阪・奈良・和歌山・鳥取・島根・秋田・青森などの諸府縣〔四二〕には殘つてゐる。それは字音假名遣においてクヮ、グヮと記す所の總べての語をさう發音するのではなく、幾分かの語にとゞまるのである。その外では、クヮはカ、グヮはガと同じに發音してゐる。卽ち東京語を始め「藥罐・觀音・火事・喧嘩・願書」をヤカン・カンノン・カジ・ケンカ・ガンショと發音してゐる。但し、その拗音が存在してゐる地方では、之を許容して然るべきである。

シャ	シ	シュ	ショ	ジャ	ジ	ジュ	ジョ
sha	shi	shu	sho	ja	ji	ju	jo

チャ cha	チ chi	チュ chu	チョ cho
ヂャ ja (dja)	ヂ ji (dji)	ヂュ ju (dju)	ヂョ jo (djo)

前にサ行字の音の所に述べた通り、shもjも各一つの父音であるから、實は拗音とは云はれない。たゞ假名書きの樣式から見た分類で、シとジとを除く外を假に拗音圖といふものに入れるまでである。

前に說いた通り、チとツとは、實は單父音でないけれども、假名の字體などの都合で之をタ行字の音としてあるのである。

チとツとの濁音は、標準音においてはシとスとの濁音と同一になつてゐる。但し、チとツとの濁音が存在してゐる地方では、之を許容して然るべきである。ヅはもとヘボン式では dzu と綴り、"Shidzuoka, Numadzu, Kōdzu" の例に綴つたのであるが、ローマ字會式卽ち標準式では標準語にヅとズとの別が無いと認め、之を zu と改めた。後にヘボン氏も之に從つた。

そのほかの拗音

ニャ nya	ニュ nyu	ニョ nyo
ヒャ hya	ヒュ hyu	ヒョ hyo
ビャ bya	ビュ byu	ビョ byo
ピャ pya	ピュ pyu	ピョ pyo
ミャ mya	ミュ myu	ミョ myo
リャ rya	リュ ryu	リョ ryo

拗音の言葉

拗音は字音の語に用ひることが最も多い。それは從來の國語音にも感化を及ぼしてゐる。また拗音を國語の聲喩の語に用ひることも少くは無い。例へば、「キョロ〳〵眺める」「ニュッツと出る」「ヒューと鳴らす」「ビョン〳〵飛ぶ」の如きである。

以上に說明した國語の諸音を、假名書きに標準式ローマ綴りを對照して次に圖表とする。しかし「五十音圖」の如きは、その製作當時から幾時代かを過ぎて、段々と假名それ自身の音價にも異同を生じてきた今日では、それは假名の字形の排列圖としては不可も無いが、國語音の排列圖としては不適當である。現代の國語音のためには、三九ページに示す如き排列圖を用ひるべきである。

假名とローマ字との對照圖

〔假名の音をローマ字綴りに對照した圖表〕

ア a	イ i	ウ u	エ e	オ o			
カ ka	キ ki	タ ku	ケ ke	コ ko	キャ kya	キュ kyu	キョ kyo
サ sa	シ shi	ス su	セ se	ソ so	シャ sha	シュ shu	ショ sho
タ ta	チ chi	ツ tsu	テ te	ト to	チャ cha	チュ chu	チョ cho
ナ na	ニ ni	ヌ nu	ネ ne	ノ no	ニャ nya	ニュ nyu	ニョ nyo
ハ ha	ヒ hi	フ hu	ヘ he	ホ ho	ヒャ hya	ヒュ hyu	ヒョ hyo
マ ma	ミ mi	ム mu	メ me	モ mo	ミャ mya	ミュ myu	ミョ myo
ヤ ya	イ i	ユ yu	エ e	ヨ yo			
ラ ra	リ ri	ル ru	レ re	ロ ro	リャ rya	リュ ryu	リョ ryo
ワ wa	(キ)イ (wi)i	ウ u	(ヱ)エ (we)e	(ヲ)オ (wo)o			
ガ ga	ギ gi	グ gu	ゲ ge	ゴ go	ギャ gya	ギュ gyu	ギョ hyo
ザ za	ジ ji	ズ zu	ゼ ze	ゾ zo	ジャ ja	ジュ ju	ジョ jo
ダ da	(チ)ジ (dji)ji	(ヅ)ズ (dzu)zu	デ de	ド do	(ヂャ)ジャ (dja)ja	(ヂュ)ジュ (dju)ju	(ヂョ)ジョ (djo)jo
バ ba	ビ bi	ブ bu	ベ be	ボ bo	ビャ bya	ビュ byu	ビョ byo
パ pa	ピ pi	プ pu	ペ pe	ポ po	ピャ pya	ピュ pyu	ピョ pyo

音聲の種別による圖表

ア a	イ i	ウ u	エ e	オ o	ヤ ya	(ユィ) (yi)	ユ yu	(ユェ) (ye)	ヨ yo
カ ka	キ ki	ク ku	ケ ke	コ ko	キャ kya		キュ kyu		キョ kyo
ガ ga	ギ gi	グ gu	ゲ ge	ゴ go	ギャ gya		ギュ gyu		ギョ gyo
ガ ŋa	ギ ŋi	グ ŋu	ゲ ŋe	ゴ ŋo	ギャ ŋya		ギュ ŋyu		ギョ ŋyo
サ sa	(スィ) (si)	ス su	セ se	ソ so					
シャ sha	シ shi	シュ shu	(シェ) (she)	ショ sho					
ザ za	(ズィ) (zi)	ズ zu	ゼ ze	ゾ zo					
ジャ ja	ジ ji	ジュ ju	(ジェ) (je)	ジョ jo					
タ ta	(ティ) (ti)	(トゥ) (tu)	テ te	ト to					
チャ cha	チ chi	チュ chu	(チェ) (che)	チョ eho					
(ツァ) (tsa)	(ツィ) (tsi)	ツ tsu	(ツェ) (tse)	(ツォ) (tso)					
ダ da	(ディ) (di)	(ドゥ) (du)	デ de	ド do					
ナ na	ニ ni	ヌ nu	ネ ne	ノ no	ニャ nya		ニュ nyu		ニョ nyo
ハ ha	ヒ hi	(ホゥ) (hu)	ヘ he	ホ ho	ヒャ hya		ヒュ hyu		ヒョ hyo
(ファ) (fa)	(フィ) (fi)	フ fu	(フェ) (fe)	(フォ) (fo)					
パ pa	ピ pi	プ pu	ペ pe	ポ po	ピャ pya		ピュ pyu		ピョ pyo
バ ba	ビ bi	ブ bu	ベ be	ボ bo	ビャ bya		ビュ qyu		ビョ byo
マ ma	ミ mi	ム mu	メ me	モ mo	ミャ mya		ミュ myu		ミョ myo
ラ ra	リ ri	ル ru	レ re	ロ ro	リャ rya		リュ ryu		リョ ryo
ワ wa	(キ) (wi)	(于) (wu)	(エ) (we)	(ヲ) (wo)					

長母音

是から長母音や二重母音や撥音などに就いて說かう。

アー　イー　ウー　エー　オー

ā　ī　ū　ē　ō

和語の「嗚呼」「兄さん」「夕」「鰈」「蝙蝠」など、漢語の「牛乳」「丁寧」「東京」など、洋語の「ヤード」「ピール」「アルミニューム」「ページ」「ソーダ」などを發音するのに、東京語を始め、大部分においては、假名遣の如何に拘らず、長母音を用ひるのである。但し、地方によつては之を aa, ii, uu, ee または ei, oo または ou などと二母音に發音する所も有り、また人によつても、さう發音することもある。

ローマ字綴りの長母音は、フランス語の綴字風に âi, îi, ûi, êi, ôi として山形の長音符を附けることが、近來行はれてゐる。なほ長母音のうち、一般に、ī を iī, ē を eī として二つの母音字を以て書くことが、從來の綴字法である。

二重母音

アイ　ウイ　オイ　等

ai　ui　oi

一音節として發音する二母音を特に二重母音といふ。「愛」「外郎」呼掛の語の「オイ」などの發音の場合に、それが出來る。

母音のわたり

母音のわたり

「仕合」「引合」「工合」の如き熟語においては、母音がわたつて、アがヤまたはワと響き、シヤイ、ヒキヤイ、グワイの例に發音することがある。そのわたりに生ずる音を「わたりの音」といふ。但し、斯樣にしないで、そのアをアと發音しても可い。

わたりの音

撥音

〔四一〕ン

n（詳しくはnに四種ある）及び m

撥音は、〔四二〕假名では通例ンの一字を以て表記してゐるものである。實際において撥音に五種の別がある。

（一）脣のン。「眞丸」「散歩」「御殿場」などの如く、ンの次の音が m, p, b の如き脣音の場合のン。卽ち、氣流を兩脣で止めて鼻へ漏らし響かせるンであり、m で表はす。

（二）舌端のン。「前途」「運動」「神嘗」「甘露」などの如く、ンの次の音が t, d, n, r の如き舌端音の場合のン。卽ち、氣流を舌端と前部硬口蓋とで止めて鼻へ漏らし響かせるンであり、n で表はす。

（三）前舌のン。「文字」「田地」「參上」などの如く、ンの次の音が i の如き前舌音の

場合のン。卽ち、氣流を前舌面と硬口蓋とで止めて鼻へ漏らし響かせるンであり、ŋで表はす。

（四）後舌のン。「軍旗」「金魚」などの如く、ンの次の音が k, g の如き後舌音の場合のン。卽ち、氣流を後舌面と軟口蓋とで止めて鼻へ漏らし響かせるンであり、ŋで表はす。

（五）無障碍のン。「蘭」「晴天」「親愛」「檢査」「儉約」「訓和」などの如く、語尾のンか、ンの次の音が母音または s, sh, y, w の如き摩擦音であり、氣流を鼻へも口へも漏らし響かせるンであり、ẽで表はす。

普通のローマ字綴りでは、m と n とで表記する。卽ち、

（一）ma'nmaru, sa'npo, Gotemba.　（二）zento, undô, Kannamc, kanro.

（三）monji, denji, sanjô.　（四）gunki, kingyo.

（五）ran, seiten, shin'ai, kensa, ken'yaku, kunwa.

〔註四一〕ンの假名をウンといふのは、呼び名であつて、その音聲價値ではない。

〔註四二〕歷史的字音假名遣で、例へば「天」をテヌ「金」をキムなどと書く撥音の區別は、我が現代の國語音ではすたれてゐる。歷史的假名遣における撥音の n と m との別は、今では「三郎」「信濃」「男信」（上野の利根郡の鄕名）などの場合に殘つてゐる。

最後に促音の事を說かう。

促音は、或父音が、舌または脣などに支へられて摩擦するか、又は急につまつて出來るものである。それで、別に促音と云ふものが有るわけでは無いが、慣例に從つて、姑く之を促音として說かう。促音に左の四種の別がある。

（一）脣音（p）の場合。例へば「立派」「佛法」

（二）摩擦音（s又はsh）の場合。例へば「一切」「決心」

（三）舌端音（t）の場合。例へば「一旦」「一等」

（四）後舌音（k）の場合。例へば「學校」「別家」

促音は、ローマ字綴りでは、促る父音の字を重ねて、

（一）rippa, buppō.　（二）issai, kesshin.　（三）ittan, ittō.　（四）gakkō, bekke.

と書いてある。假名書では「つ」または其の小字などを用ひ、「いつさい」「いつさい」「いっさい」「いッさい」などと書いてゐる。但し「學校」「擊劍」などの如く、舊入聲の字音の「く」「き」がカ行の音と連合して促音となる場合は、その「く」「き」のまゝで綴るのもある。

國語音の單位

語音變化の四種類

三　語音變化の事

前節に述べた標準音は、我が國語音の單位卽ち音節となるのである。各々の語は、一箇乃至數箇の單位から成立ち、その諸語の中には、古往今來、種々な發音上の變化を生じた。我等は文章を讀むのに、語音變化の事を心得て置かねばならぬ。語音變化は、結果から見て、凡そ左の四種類として見られる。

○音韻の轉化するもの

（イ）母音の轉化。例へば、「酒屋」sakeya を sakaya,「木の葉」kinoha を konoha.

（ロ）父音の轉化。例へば、「煙」keburi を kemuri,「塞ぐ」futagu を fusagu.

○音韻の轉換するもの

（ハ）父音の轉換。例へば、「新し」aratashi を atarashi;「山茶花」sanzaka を sazanka.

○音韻の減少又は融合するもの

（ニ）母音の脫落。例へば、「荒磯」araiso を ariso,「手洗」tearai, を tarai.

（ホ）父音の脫落。例へば、「本意」hon'i を hoi,「衝立」tsukitate を tsuita'e.

（ヘ）熟音の脫落。例へば、「文箱」fumibako を fubako,「私」watakushi を watashi.

（ト）熟音が母音又は父音となるもの。例へば、「素人」shirobito を shirouto (shirōto)、「商人」akibito を akiudo または akindo.

（チ）二つの母音が融合して一つの母音となるもの。例へば「高市」Takaichi を Takechi,「靱負」yugioi を yugei,「申す」mausu を mōsu.

○音韻の增加するもの

（リ）母音の增加。例へば「六日」muka を muika,「詩歌」shika を shiika.

（ヌ）父音の增加。例へば「春雨」haruame を harusame,「五合」gogō を gongō.

尤も右の四種類の中の一變化以上が、一語に同時でなく漸次起つたものも少くは無い。例へば「雨戶」(あめど)をアマド、「今日」(けふ)をキョー、「蝙蝠」(かはほり)をコーモリ、「笄」(かうがい)をコーガイといふが如きものである。右の如き語音變化は、主として生理的作用及び心理的作用により起つて來て、遂に一般に是認されるに至つたもので有る。語音變化は、時代が立つに從つて、段々增してゐる。同樣の語音變化で有つても、未だ一般に是認されて居ないものは方言または訛誤として取扱はれるのである。

言語の發音は、時代の推し移る間に變遷するから、昔の綴字卽ち假名遣と今の發音と一

致しないものが出來てゐる。先づ字音假名遣から云へば、左の字音假名遣一覽には、漢音も吳音も擧げてある。例へば「業」「納」を「ごふ」「なふ」とよむのは吳音で、「げふ」「だふ」とよむのは漢音である。また〔　〕中の例は、第一の父音を濁るものである。

（發音）

○おう（應）あう（櫻）あふ（押）わう（王）……オー
○こう（工）かう〔孝〕こふ〔劫〕〔豪〕〔業〕かふ（甲）くわう（光）……コー
○そう〔宗〕〔壯〕さう〔增〕〔像〕さふ〔挿〕〔雜〕……ソー
○とう〔東〕〔當〕たう〔同〕〔堂〕たふ〔答〕〔納〕……トー
○のう（能）なう（腦）なふ（納）……ノー
○ほう〔峯〕〔方〕はう〔謀〕〔亡〕はふ〔法〕（漢）〔乏〕（音）ほふ〔法〕（吳）〔乏〕（音）……ホー
○もう（蒙）まう（盲）……モー
○よう（用）やう（樣）えう（要）えふ（葉）……ヨー
○ろう（樓）らう（郎）らふ（蠟）……ロー
○きよう〔共〕〔凝〕きやう〔京〕〔仰〕けう〔敎〕〔堯〕けふ〔協〕〔業〕……キョー
○しよう〔升〕〔丞〕しやう〔正〕〔常〕せう〔小〕〔饒〕せふ（涉）……ショー
○ちよう（徵）ちやう〔長〕〔丈〕てう〔朝〕〔條〕てふ（蝶）〔帖〕……チョー
○によう（女）にやう（孃）ねう（尿）ねふ（捻）……ニョー
○ひよう（氷）ひやう〔評〕〔病〕へう〔表〕〔廟〕……ヒョー
○　みやう（明）めう（妙）……ミョー
○りよう（陵）りやう（良）れう（料）れふ（獵）……リョー
○いう（右）　ゆう（勇）いふ（邑）……ユー
○きう〔久〕〔牛〕きゆう（宮）きふ（急）……キュー
○しう〔秋〕〔獸〕しゆう〔終〕〔從〕しふ〔習〕〔十〕……シュー
○ちう（晝）ちゆう〔中〕〔重〕ちふ（蟄）……チュー
○にう（柔）にゆう（乳）にふ（入）……ニュー
○ひう〔彪〕〔謬〕……ヒュー
○りう（流）りゆう（隆）りふ（立）……リュー

と片假名書きの通りに發音してゐる。さうして「空」「數」「通」「風」をクー、スー、ツー、フー、「永」「計」「制」「貞」「寧」「平」「明」「例」「衞」をエー、ケー、セー、テー、ネー、ヘー、メー、レー、エーと發音し、又「伊」も「爲」もイ、「衣」も「惠」もエ、「於」も「惡」もオ、「加」も

二語連合の字音

「果」もカ、「氣」も「華」もケ、「自」も「治」もジ、「主」(坊主)も「圖」もズ、「山」も「三」もサンと發音してゐる事は、前にも說いて置いた。二語(又は二語以上)が連合するときに、左の例の如き音便の出來ることがある。

○「天皇」をテンノー、「親王」をシンノー、「銀杏」をギンナン、「延引」をエンニン、「云々」をウンヌン、「萬葉」をマンニョー、「觀音」をカンノン、「四天王」をシテンノー、「三惡道」をサンナクドー。

○「三位」をサンミ、「陰陽師」をオンミョージ。

○「佛恩」をブットン、「新發意」シンボッチ。

○「北方」をホッポー、「六本」をロッポン。

○「日本」をニッポン、「七寶」をシッポー。

○「雜報」をザッポー、「立腹」をリップク。

實は入聲とハ行古音との殘留と見るべきであらう。尙左に之を說く。

漢語の入聲が日本字音の二綴音に變じたものが、カサタワ四行の或音に接する時はいはゆる促音となることがある。例へば「學校」「擊劍」「一冊」「月蝕」「甲冑」「法度」「末輩」の如きである。

次に和語假名遣においても、ほぼ字音假名遣と同樣の現象がある。先づ、長母音に發音

するものの例から云へば、

○こうぢ(小路)　とうとう(遂)　いぬぼうざき(犬吠崎)

いもうと(妹)　みよう(將見)　しろうと(素人)

○かうべ(頭)　たうげ(峠)　はうむる(葬)　まうす(申)　やうやく(漸)

まらうど(客)

○おふて(追手)　きのふ(昨日)

○おふぎ(扇)　さふらふ(候)　はふはふ(這々)　すまふ(相撲)

○とほたふみ(遠江)

○あかほ(赤穗)　なほし(直衣)

○あをめわた(青梅綿)　あかを(赤魚)

○うけう(將受)　みませう(將見)　てうづ(手水)

(上方語)

○けふ(今日)　なにてふ(何云)

○しうと(舅)　うれしう(嬉)　おちうど(落人)　ひうが(日向)

○やぎふ(柳生)　はにふ(埴生)　きりふ(桐生)

○かあ(鴨聲)　さあ(誘聲)　まあ(先)

○にいさん（兄様）　ひいき（贔負）
○にひなめ（新嘗）　ひひな（雛）
○ねいさん（姉様）　へいへい（唯々）
○かれひ（鰈）

語中または語尾の「はひふへほ」及び助詞の「は」「へ」は、「河」「鯛」「危い」「蛙」「勢」「私は」「西洋へ」の例の如く、ワイウエオと發音する。但し、稀に「母」「鷲」「内障眼」「虎斑」「屠」「拔穂」の如きは、假名遣の通りに發音し、「葵」「煽る」「仰ぐ」「倒れる」の如きは、その「ふ」をオと發音して、アオイ、アオル、アオグ、タオレルと言ふ。

「井戸」「居る」「聲」「桶」「惜しい」の如き語の「ゐ」「ゑ」「を」は、すべてイエオと發音し、「富士」「蛆」の「じ」も「藤」「氏」の「ぢ」も、ジと發音し、「葛」「見ず」の「ず」も「屑」「水」の「づ」も、ズと發音する。

また元の音が促音に變じたものも出來てゐる。例へば、

○「提ぐ」をヒッサグ　「幾日」をイッカ
○「討手」をウッテ　「待ちて」をマッテ　「奴」をヤッコ
「全し」をマッタシ　「最」をモットモ　「服部」をハットリ

○「尊し」をタットシ　「新田」をニッタ　「夫」をオット　「謂ひつべし」をイッツベシ
「專」をモッパラ　「適」をアッパレ
○「欲す」をホッス　「當りて」をアタッテ

なほ梵唄や謠曲などでは、「世尊ハ」〔四四〕をセソンナ、「涅槃ヲ」〔四三〕をネハンノ、「念佛ハ」をネンブッタ、「山伏と云ふは」をヤマブシトイッパといふ類の讀み方がある。

〔註四三〕眞宗の和讃に「世尊ハホメタマフ」「涅槃ヲ悟ルベシ」「無明ノ闇ヲ（アンノ）破スル故」などとあり、御文に「稱名念佛ハ如來ワガ往生ヲ定メタマヒシ」などとある。

〔註四四〕謠曲「安宅」に「それ山伏といつぱ、役の優婆塞の行義を受け」云々とあり、その假名も發音に從つてある。

なほまた古の京畿の言語に基づく文語文と、今の東京語に基づく口語文とは、讀み方に違ふ所がある。殊にハ行活用動詞の連用形や連體形や終止形において著しい。例へば、

（古代系の文章）　言うて　逢うて　逢ふこと　追ふ馬　買うて　拾う（尤も古代語の發音そのまゝでは無い）
（東京語の文章）　言つて　逢つて　逢ふこと　追ふ馬　買つて　拾ふ

四　アクセントの事

アクセントの研究

我が國語のアクセントの記錄〔四五〕は、上古の古事記に見え始め、中古の辭書である類聚名義鈔には各語に、平仄四聲〔四五〕の符號をつけてあり、近古に韻鏡が傳來し、近世には段々と學者が國語のアクセントに留意し、現代に至つては西洋から音聲學が傳來して、大いに研究の歩を進め、大正年間に、文部省でアクセント調査があり、保科孝一・安藤正次・東條操・神保格・佐久間鼎の諸氏がその調査に從事され、佐久間鼎氏・神保格氏らの研究がその著書で發表され、音聲學協會の中の會員諸氏によつて益〻精密に研究されてゐる。

〔註四五〕井上奥本氏の「日本語調學小史」及び「日本語調學年表」（共に「音聲の研究」第二輯に收める）に概說してある。

日本語は高低アクセント

○平上去入の四聲は古來支那語音の說明にいふ事である。元和韻譜に曰く「平聲者哀而安、上聲者厲而舉、去聲者清而遠、入聲者直而促。」

アクセントの型

神保格氏の研究に據るに、日本語では强弱アクセントでなくて高低アクセントの習慣がある。日本語アクセントを表記するには發音通りの假名を使ひ、調子の高い部分の側に線を引くのを便利とする。例へばショオカ（唱歌）・ヤワラカイ（柔かい）等の如くである。さうして一語のアクセントの位置に種々の型がある。例へばカキネ（垣根）・ウゴク（動く）・ヨワイ（弱い）等の如きは、文法上の品詞や意義に關せず、何れも三つの音節から成る語で、その第二音節が高くなる。故に此等の語を集め、○印を以て一つの音節を示すことにし、○○○の樣な形を以て示すことができる。かういふものをアクセントの型といふ。

二音節から成る語においては東京語では、

（一）○○、例へば　アメ（雨）・トル（取る）・マダ（未だ）

（二）○○、例へば　コメ（米）・ハナ（花）

（三）○○（大體平かな調子、これは線を引かない）、例へば　ハナ（鼻）・サク（咲）・マタ（又）

の三種の型がある。

三音節から成る語においては、

（一）○○○、例へば　カラス（鴉）・ノンダ（飲んだ）・イマニ（今に）

（二）○○○、例へば　カキネ（垣根）・ハシル（走る）・ヨワイ（弱い）

（三）○○○、例へば　アタマ（頭）

（四）○○○、例へば　トナリ（隣）・カタイ（堅い）・トマル（止る）・ヤガテ（軈て）

の四種の型がある。また○○、○○○等、音節の數に係らず、凡て調子の平かな語を總稱

地方アクセントの比較

して平板式と名づける。更に又○|○、○○|○、○○○|○等、何處かの音節に高い調子のある語を總稱して起伏式と名づける。國語のアクセントが、根本において高低アクセントであることは動かないが、その樣式が各地の方言を通じて同じだとは云へない。今、特徵あの三四の方言について例をあげると、

	東京	京都	土佐	長崎
箸	ハ|シ	ハシ|	ハシ|	ハシ|
橋	ハシ|	ハ|シ	ハ|シ	ハ|シ
端	ハシ	ハシ	ハシ	ハ|シ
海	ウ|ミ	ウミ|	ウミ	ウミ|
膿	ウミ|	ウ|ミ	ウ|ミ	ウミ|
花	ハナ|	ハナ	ハ|ナ	ハナ|
鼻	ハナ	ハナ	ハナ	ハ|ナ
油	アブラ	アブラ	アブラ	アブラ|
畑	ハタケ	ハタ|ケ	ハタ|ケ	ハタケ|

この例のやうに地方によつて異同があり、また同じ地方でも社會によつて多少の異同があるのであるが、どのアクセントを標準的のものと見るべきかといふに、まづ東京の教養ある中流社會のものを標準とするのが可からう。東京語のアクセントの性質をいへば、國語の中の二大アクセント、卽ち關東的アクセント並に關西的アクセントの前者に屬し、しかも多少は關西的アクセントの影響をうけてゐるやうである。大體において、東京語のアクセントは、關西的アクセントに比較して、平板式のアクセントが、より多く聞かれるのである。(以上は「國語音聲學」等に據る)

東京語のアクセントの性質

なほ佐久間鼎博士及び神保格氏の研究を綜合するに、アクセントの高低關係には上中下の三段の區別があり、一音節の語においては(一)上と(二)下との二種があり、二音節の語に於ては(一)第一音節上、第二音節中、(これを「上中」と略書する。以下これに同じ)と(二)下中と(三)下上との三種があり、以下、三音節の語には四種があり、四音節の語には五種があり、五音節の語には六種がある。卽ち、

アクセントの型の種類

一音節	二音節	三音節	四音節	五音節
上	上中	上中中	上中中中	上中中中中
下	下中	下中中	下中中中	下中中中中
	下上	下上中	下上中中	下上中中中

平板式と起伏式

さうして單語に於けるアクセントの形式を上中型・下中型・下上型などとよび、型の似たものを合して式とよび、下中型の如き「上」のなきものを平板式とよび、上中型・下上型の如き「上」のあるものを起伏式とよぶ。單語のアクセントは、助詞を加へる場合には、多くは變化しないけれども、〔四六〕熟語や活用聯結や、品詞の轉換等によつて變化することがある。

例へば、

カラス。　カラスガ。　カラスノ。　カラスニ。
スズメ。　スズメガ。　スズメノ。　スズメニ。
アタマ。　アタマガ。　アタマノ。　アタマニ。
オヤ(親)—ネコ(猫)＝オヤネコ。　ハコ(箱)—ニハ(庭)＝ハコニハ。
カド(門)—マツ(松)＝カドマツ。　ユキ(雪)—ダルマ(達磨)ユキダルマ。
ヨイ。　ヨク。　ヨケレバ。　ヨカツタ。
スズシイ。　スズシク。　スズシケレバ。　スズシカツタ。

下上上　下上上中　下上上中中
下上上上　下上上上中
下上上上上

カカナイ。　カキマス。　カイタ。　カク。　カケ。　カコウ。
ハサミ(鋏)。　ハサミ　デ　ハサミキル。

兩氏の研究は「日本音聲學」や「國語音聲學」に詳細である。なほ、前に示したアクセントの型に、文部省編纂の「アクセントは何か」の中に示してある東京語の標準的アクセントを當てると、次の如くである。

漢字三音考の說

一音節　二音節　三音節　四音節　五音節

ヒ(火)　カサ(笠)　カラス(烏)　ニイサン(兄弟)　オツキサマ(御月樣)
ヒ(日)　ハナ(鼻)　スズメ(雀)　ワタクシ(私)　オトモダチ(御友達)
ハナ(花)　コネコ(小猫)　ゴホウビ(御褒美)　オバアサン(御祖母樣)
ハサミ(鋏)　カラカサ(傘)　カタキウチ(仇討)
フデタテ(筆立)　メズラシイ(珍シイ)
タカラモノ(寶物)

（注意）一音節の語の高低は、他の語と連ねて言ふ場合から判定する。例へば「ヒ(火)ニヤケル」「ヒ(日)ニヤケル」「ヒ(火)ヲミル」「ヒ(日)ヲミル」の如きである。

〔註四六〕本居宣長の漢字三音考に「皇國の言語の法、連用の便に隨ひて、同言も三聲(平上去)轉聲

することにて、其の轉聲に依りて義の種々に分るゝことあり。日は平聲、樋は上聲、火は去聲なるを、日影と云ふときの日は上聲、掛樋と云ふときの樋は去聲、火箸と云ふときの火は上聲となり、山は平聲なるを、山風・山松などと云ふときは去聲となり、東山・西山などと云ふときは上聲となり、宇治は去聲なるを、宇治川と云へば上聲、宇治橋と云へば平聲となる如く、何れの言も皆その聲轉するを、もし本音のまゝに呼ぶときは、その義異なり。かの山風・山松の如き、山を本音のまゝに平聲に呼べば、山と風と二つの事になり、山と松と二つの事になるを、轉じて去聲に呼ぶによりて山の風・山の松の事になるが如し。」云々と說いてある。これは上方の發音を例にしたので有るから、東京語の發音に一致しない所がある。

同綴字の語のアクセント

アクセントの最も必要なのは、同綴字の語卽ち同じ音の集合に成る語をいふときにある。例へば、東京語で、

○ハシ(橋)　ハシ(箸)

○キリ(桐)　キリ(霧)　キリ(錐)　キリ(切)

○ハタ(旗)　ハタ(機)　ハタ(畑)　ハタ(端)　ハタ(將)

と云ふが如きである。わが國のアクセントは中々に複雜である。更に今一つ心得べき事は、動物や植物などの名を人の姓名とした場合には、本のアクセントと反對に呼ぶことである。例へば「虎」(トラ)をトラと呼び、「丑」(ウシ)をウシと呼び、「竹」(タケ)をタケと呼び「菊」(キク)をキクと呼び、「柳」(ヤナギ)をヤナギと呼び、「東」(ヒガシ)をヒガシと呼ぶ類ひである。

人名のアクセント

精しく一々の語音にアクセントをつけることは、辭書の務めである。然るに我が國の辭書には、この事が缺陷となつてゐる。今後の標準語辭書には、この缺陷が補充されるべきである。

五　發音練習の事

「勸學院の雀は蒙求を囀る」とは、浸潤の力を云つたものである。曾て或少年が何時の間にか吃音の癖となつた原因を調べて見たれば、教師に吃音の人が有つた。その教師が吃音を直したれば、その少年の吃音も自然に直つたと云ふこと。かやうなわけで、良き發音には、第一に、明確で用意周到なる模範が必要である。さて第二に、注意深くして秩序好く進む練習が必要である。その參考のため、次々に發音練習に關する諸方法を擧げて見よう。

模範と練習

○母音を主とする練習

母音は語音の要素として甚だ大切である。東北や關東あたりの方言に、「兄」と「姉」、「死んだ」と「濟んだ」、「石屋」と「椅子屋」と混亂する所のあるのは、母音が正しくないからであ

母音を主とする練習

父音を主とする練習

ることが多い。母音を正しくするのは、發音の礎と云つても良い。母音を主とする練習法には、

一、短母音を種々の順序に呼ぶこと。（廿一ページ以下參考）

一、長母音を種々の順序に呼ぶこと。

一、短母音と長母音とを錯綜して呼ぶこと。

一、五十音圖のア段乃至オ段を連呼すること。

一、アット、イッソ、ウットリ、エッサ、オットなどの促音を續けて呼ぶこと。

一、凡そ父音を拔きにして先づ、「兄（あに）」をアイ、「姉（あね）」をアエ、「死んだ」をインア」、「濟（す）んだ」をウンアの例に唱へ、さて後に本の父音を加へて呼ぶこと。この法は、吃音矯正に能く用ひられるものである。

○父音を主とする練習

父音は種々に分類して見られるから、その練習も種々に出來る。そこで、父音を主とする練習法には、例へば、

一、夫々の父音を含むこと。（卅九ページ參考）

(p)プー (b)ブー (y)ヤー (w)ワー (k)カーカー (gy)ギャーギャー (sh)シシ (s)ススス (ch)チチ (ts)ツツ (t)トントン (d)ドドン (j)ジャンジャン (py)ピョンピョンの類。

一、名稱または熟語に含む種々の父音。

キョート（京都） トーキョー（東京） ショージョー（猩々） キューヨー（急用） ジュージュン（從順） リョジュンコー（旅順口） シャカニョライ（釋迦如來） ハンニャシンギョー（般若心經） チョージューチューギョ（鳥獸蟲魚） の類。

一、促音を含むもの。

モッテ（以） ユックリ（緩々） ワスレッポイ（健忘） チョット（一寸） ショッコー（職工） シュッチョー（出張） ジュッスー（術數） チュッチョク（黜陟） の類。

一、鼻音を含むこと。

エンニン（延引） ゼンナク（善惡） サンミャク（山脈） ナガノリ（長乘） クギヌキ（釘拔） コグスリ（粉藥） クゲヌマ（鵠沼） ビンゴ（備後） の類。

一、類似の聲音の錯綜。

カラダ（身體） アブラ（油） ツルベ（釣瓶） ヤワラ（柔術） シュス（繻子） シュスズリ（朱硯） コクギカン（國技館） キャラマクラ（伽羅枕） キゲキ（喜劇） マキガミ（卷紙） ナガモチ（長持） ナマゴメ（生米） オアワレミ（御憫） の類。

アクセントの練習

○アクセントの事

アクセントの練習について注意すべきことは、

一、同じ綴りがアクセントを異にして語を異にする例。

ハナ(花)　ハナ(鼻)

ハシ(箸)　ハシ(橋)　ハシ(端)

キリ(錐)　キリ(切)　キリ(桐)

二、同じ語が他の語との熟合によつてアクセントを異にする例。

オヤ(親)　ネコ(猫)　オヤネコ(親猫)

ハコ(箱)　ニハ(庭)　ハコニハ(箱庭)

カド(門)　マツ(松)　カドマツ(門松)

タカラ(寶)　モノ(物)　タカラモノ(寶物)

ニハトリ(鶏＝庭鳥)ガキマス。　ニハ(二羽)トリ(鳥)ガキマス。

ニハ(二羽)ニハトリ(鶏)ガキマス。　ニハ(庭)ニハ(於)トリ(鳥)ガキマス。

・○語音の斷續及び清濁等の事

語音の斷續

歌または文章において、語音の斷續及び清濁などを明かにしなければ、その意味が不十分となつたり、時々非常な誤りが出來たりする。「べんけいがなぎなたをもち」とか「かすみそのへのにほひなる」などと云ふことが、よく例に引かれる。

實際において、子供が、「ニハトリ　ガ　キマス。」を二羽の鳥が居るやうにも讀み、「ニハ　トリ　ガ　キマス」。を二羽の鷄が居るやうにも讀むことが、折々あるのである。

時鳥ほどときすぎずきすぎずにまづまつ我に初音きかせよ

と云ふ歌も、語音の斷續にまごつく例として引かれる。百人一首などを讀みあげる人が、斷續をまちがへて、同じ所を同じ樣に誤讀することが有り勝ちである。

（藤原興風）　誰をかも知る人にせむ高砂の松も昔の友ならなくに（「ならぬに」の意であるから「なら泣くに」のやうに讀むのは誤）

（文屋康秀）　吹くからに秋の草木のしをるればむべ山風を嵐といふらむ（「宜なるかな、山風」の意であるから斷ること）

（紀友則）　久方の光のどけき春の日にしづ心なく花の散るらむ（「しづ心」は長閑な心の意であるから續けること）

（アクセント等の注意）〈○ナラナクニは正、ナラナクニは誤。○ムベヤマカゼは正、ムベヤマカゼは誤。○シヅゴコロは正、シヅゴコロは誤。〉

言語の紛亂

なほ意味の不了解から、甚だしい言語の紛亂の起る場合がある。例へば、

（在原行平）立ち別れいなばの山の峯におふるまつとし聞かば今歸りこむ〔四七〕（「生ふる」を「居る」と讀むのは誤り）

（慈鎭和尙）おほけなく憂き世の民におほふかなわが立つ杣にすみぞめの袖〔四八〕（「覆ふ」を「思ふ」と讀むのは誤り）

〔註四七〕「立ち別れ往ぬ」と「因幡の山」との掛詞。「峯に生ふる松」と「待つ」との掛詞。

〔註四八〕「すみぞめの袖」を「うき世の民に覆ふかな」の意。「わが立つ杣に住み」と「墨染」と掛詞。「わが立つ杣」は、傳敎大師の「阿耨多羅三藐三菩提の佛達、わが立つ杣に冥加あらせたまへ」といふ歌に因つて、比叡山延曆寺をさす。

語音の清濁

また濁點を附けてない例の短冊や官報などを讀むのには、能く語音の清濁に注意せねばならぬ。

（慈鎭和尙）庭の雪に我が跡つけて出てつるをとはれにけりと人や見るらむ

これは「て」も「ば」も清むのであるが、之を濁つて讀めば、狂歌となると云ふこと。百人一首などを讀みあげる人も、隨分と清濁の間違をする。

（安倍仲麿）天の原ふりさけ見ればかすがなるみかさの山に出でし月かも（地名の「春日」を「幽か」と清んでは誤となる）

（在原業平）ちはやぶる神代も聞かず立田川唐紅に水くゝるとは（「くゝる」は絞り染にすること、中を濁れば意味を成さない）

（春道列樹）山川に風のかけたるしがらみは流れもあへぬ紅葉なりけり（山の川の意だから連濁すること）

（紀貫之）人はいさ心も知らず故郷は花ぞ昔の香ににほひける（「いざ心も知らず」と讀むのは誤）

（小野篁）わたの原八十島かけて漕ぎ出でぬと人には告げよ海人の釣舟（海は「わた」で有つて「わだ」では無い）

（藤原定頼）朝ぼらけ宇治の川霧たえ〴〵にあらはれわたるせゞの網代木（「瀨々」を「せゞ」又は「膳所」のやうに讀んではならぬ）

（紫式部）めぐりあひて見しやそれとも分かぬまに雲がくれにし夜半の月かな（「雲かくれ」と清んでは意味をなさぬ）

（鎌倉右大臣）世の中は常にもがもな渚こぐあまの小船のつなでかなしも（斷續をまちがへると無茶苦茶になる）

（古今集、讀人不知）きのふこそ早苗取りしかいつの間に稻葉そよぎて秋風の吹く

（「こそしか」は係結であるから、「取りしが」と讀むのは誤）

（新古今集、藤原道信）　散りのこる花もやあると打群れて深山がくれを尋ねてしかな

（願ひの「がな」であつて、感歎の「かな」ではない）

かの土佐日記の正月七日の條に、「歌主またまからすといひて立ちぬ」とある。これを北村季吟の土佐日記抄に「又まからず」と讀んで「又參じませう」の意に解したのに誤られて、後の註釋者が將棋倒しになつた。富士谷御杖（ふじたにみつゑ）の土佐日記燈（明治三十一年刊）と三宅米吉博士の「土佐日記の一節」（明治廿八年國學院雜誌）とには、「まだまからず」と讀んで「未だ罷り去らず」即ち「まだ歸りませぬ」の意に解されたのは、國文學上の一佳話である。

○發音矯正の事

百人百癖

百人百癖とは、發音においても云はれる事である。眞に完全無缺の發音と云ふべきは、殆ど有り得べからざるほどである。或は吃音があり、訥音があり、或は訛音があり、或は人々夫々の癖がある。さうして語音が種々雜多で有つて、中には發音に困難な言葉も少くは無いのである。それで、大方の人に、多少は發音を矯正すべき所が有るものである。その

矯正法

矯正法は種々あるけれども、普通簡易に用ひられる方法は、語學的にして心理的のもの。即ち心理的とは、發音者は虛心平氣にし、又その矯正を助ける人が有る場合には、その人は溫和靜肅である事である。さうして語學的とは、左の如き方法を用ひる事である。

小聲發音法

一、小聲發音法　先づ、さゝやき位から始めて、段々大きくなるやうに幾度か發音すること。例へば、

クリガハゼタ……クリガハゼタ……クリガハゼタ
オアワレミ……オアワレミ……オアワレミ
キマキガミ……キマキガミ……キマキガミ

徐々發音法

二、徐々發音法　先づ徐々と始めて、段々速さを增すやうに幾度か發音すること。例へば、

クーリーガーハーゼータ	オーアーワーレーミ
クーリーガーハーゼータ	オーアーワーレーミ
クリガハゼタ	オアワレミ

キーマーキーガーミ	キーマーキーガーミ
キーマーキーガーミ	キマキガミ

母韻發音法

三、母韻發音法　言語を構成する諸音の父音を取除けて幾度か之を唱へ、然る後に、本の父音を加へて發音すること。例へば

ウイアアエア……ウイアアエア……クリガハゼタ
オアアエイ……オアアエイ……オアワレミ

イアイアイ……イアイアイ……キマキギ

母韻發音法は、「ク・ク・クリガハ・ハ・ハゼタ」の如く、能く父音と母音とが熟合しない場合、卽ち吃音狀態に試みれば、最もきゝめがある。

父音發音法

四、父音發音法　卽ち「母音ぬき」の法であり、父音ばかりを發音すること。例へば

p, p, p,……b, b, b,……

k, k, k,……g, g, g,……ng, ng, ng,……

t, t, t,……d, d, d,……

s, s, s,……z, z, z,……

sh,sh,sh,……j, j, j,……

k, s, t, n, f, m, y, r, w,……g, z, d, b,……

混成法

五、次の例の諸方法のやうな、幾種かの混成法も、きゝめがある。

ウイアアェア……クーリーガーハーゼータ……クリガハゼタ……クリガハゼタ

オーアーワーレーミ……オーアーワーレーミ……オアワレミ

イーアーイーアーイ……キーマーキーガーミ……キマキガミ

○興味ある發音練習の事

早言

發音練習は、とかく機械的、形式的で、無趣味に取扱はれ易いものである。で、敎へる方でも面倒臭く、習ふ方でも面白くないから、その練習が不徹底になりがちである。とはいへ、世の中には、このやうな練習の必要に應ずるものが、各國語とも、趣味的に發達してゐる。我が國語では、これを「早言（はやこと）」または「早口（はやくち）」などといひ、英語でも fast-saying 卽ち「早言」といひ、また oral gymnastics 卽ち「口上の體操」といふ。或は「呂律（ろれつ）まはし」とも「發音遊戲」とも呼ぶ。概して「早言」は、その語句が無邪氣で音聲上の興味のあるものである。「早言」は北村信節の嬉遊笑覽などにも見えてゐるが、記錄以外に民間に流布してゐるものが多い。余は大正三年に國文朗讀法を著した時に、かねて採集して置いた和漢洋の「早言」の幾分かをその中に載せて置いた。その後大正八年中央公論の六、七月號に、菅原敎造氏は「發音遊戲」と題して、和漢洋の多くの「早言」を載せて面白く說述されたことがある。余は今、新に分類を試みて、次に種々の「早言」を發音練習の材料に供しよう。

早言の分類

（甲）「神田鍛冶町の角の乾物屋」の如く、頭韻をふむもの。

（乙）「縞さん紺さん淺黃さん」の如く、脚韻をふむもの。

（丙）「牡丹にからしゝ竹に虎、虎をふまへて和藤內、內藤樣はさがり藤」の如く、連鎖卽ち尻取を成すもの。

（丁）「長持のうへに生米七粒」の如く、紛れ易い類音を含めて幾種かを混成するもの。

（戊）「法性寺入道前の關白太政大臣、というたら」云々、又は「向ふの山に、猿が三匹とまつて」云々の如く、長い語句又は多種多様の語句を面白く綴つて拍子取を成すもの。

頭韻をかむもの

（甲）頭韻をふむもの

○神田鍛冶町の、角の乾物屋で、勝栗買つたら、堅くてかめない。

○京の狂言師が、京から今日來て、今日狂言して、京の故郷へ今日歸つた。

○京の三十三間堂の、佛の數をかぞへて見れば、三萬三千三百三十三體御座るとの。

○私が家の私の木に、鷲が止つたから、私が鐵砲で鷲を打つたら、鷲も驚いたが、私も驚いた。

脚韻をふむもの

（乙）脚韻をふむもの

○美濃の蛇池に、蛇が居るぢやげな、男蛇か女蛇か何ぢやか、分らんぢやげな。（美濃の「ぢや」ことばを尾張人のよんだ歌）

○桑名のナア、ナア〳〵言葉が、やむならナア、借りても三百（文）、つん出すナア。

（桑名から移つた忍藩士の言葉を土着民がよんだ歌）

連鎖を成すもの

（丙）連鎖を成すもの

○ぼたんにからしゝ竹に虎、虎をふまへて和藤内、内藤様はさがり藤、富士見西行うしろむき、むきみはまぐり馬鹿ばしら、柱は二階と縁の下、下谷・上野の山かつら、桂文治は噺家で、でんでん太鼓に笙の笛、えんまは盆とお正月、勝頼さんは武田びし、菱餅三月雛まつり、祭萬燈だいしやたい、鯛にかつをにたこまぐろ、ロンドン異國の大みなと、登山するのはお富士さん、三遍廻つて煙草にせう、正直正太夫いせのこと、琴にさみせん笛たいこ、太閤さまは關白ぢや、白蛇の出るのは柳島、しまの財布に五十兩、五郎十郎曾我兄弟、鏡臺・針箱・煙草盆、坊やはいゝ子だ、ねんねしな……

紛れ易い類音を含むもの

（丁）紛れ易い類音を含むもの

○青卷紙か、赤卷紙か、黃卷紙か。はい黃卷紙。

○瓜賣が、瓜賣りに來て、瓜賣れば、賣る瓜は古瓜で、古瓜を賣る。

○己が竹垣、なぜ竹立て掛けた。竹立て掛けたかつたで、竹立て掛けた。

○鴨が米喰つて、小鴨が小米喰つて、鴨が米喰ひ、小鴨が小米喰ふ。

○蛙ぴよこ〳〵、三ぴよこ〳〵三ぴよこ〳〵、合せてぴよこ〳〵、六ぴよこ〳〵。

面白く拍子取を成すもの

○生杉葉〳〵、二つ合せて二生杉葉。
○柿一口に餅一口、柿二口に餅二口、柿三口に餅三口、（各々十口まで）
○備後の貧乏なお坊さん、豐後へ行つて豐後の屏風に、備後の貧乏なお坊さんの繪をかいた。
○山の猪、屋根の煤、こはだの壽司に、帶の繻子。

（戊）面白く拍子取を成すもの

○法性寺の入道前の關白太政大臣、と云うたら腹を立てられたから、今度から、法性寺の入道前の關白太政大臣様、と申しませうのう、法性寺の入道前の關白太政大臣様。
○向ふの山に、猿が三匹とまつて、前の猿は物しらず、後の猿も物しらず、中の子猿がよう物しつて、ござれ友達、花見に行こや、花は何處、花地藏の前の櫻花、一枝折ればパッと散る、二枝折ればパッと散る、三枝が先に日が暮れて、何方の紺屋へ宿取ろか、殿様の紺屋へ宿とつて、疊は短し夜は長し、曉起きて空見たら、ぎつこのばつこのきいせんご、船ども漾へて帆を掛けつ、帆掛船の吊り物は、白織赤織、赤地の交つた錦刀。

早言の發達

早言應用の注意

右の種類のものは澤山あつて、發音練習の好い材料となる。なほ卷末の「日本早言集」において多くの材料を供しよう。

さて各地方の「早言」を集めて見るに、それ〴〵特色のある「早言」が行はれてゐて面白い。同じ種類の「早言」でも、地方によつて言ひ方が多少かはり、地方色の加味されてゐるのが、少くはない。「早言」は兒童の言語遊戯を始として、色々發達し、或は噺家の「壽限無」となり、或は狂言の「酢薑」となり、或は歌舞伎の「外郎賣」の臺詞となつてゐる。支那や西洋諸國その他にも、それ〴〵面白い「早言」がある。イギリスのサウゼ（R. Southey）の「ロドーアの瀧」（The Cataract at Lodore）の詩などは、「早言」風に朗讀され、滔々と落ち來る瀧の趣が味はれると云ふ。かの「ノットとショットとの口論」（A quarrel between Knott and Shott）の早言は、古くから喜劇役者の口上にのぼつたものださうだ。また支那語は單音語で平仄の變化が音樂的になつてゐるから甚だ面白い。梵語の陀羅尼の呪文は、意味はわからなくても、深く感に入つて流暢に早言の如く讀誦されるものである。

さて「早言」を國語教授における發音練習に應用するのには、

一、學習者の年齢と學習の程度とに適當するものを選ぶこと。

二、下品なものを避けて、上品なものを選ぶこと。

三、なほこれまでのものを修正し、又は現今に適當なものを新作すること。を心がくべきである。さうして何事も濫用は不都合である。藥も過度に服用すれば毒となるわけだから、「早言」も適度に善用すべきである。

發音法と表出法との關係

句讀一名ポーズ

第五　表出法

此に表出法といふのは、文章の思想感情を音聲にあらはす方法をいふ。前に發音法を說いた時に、言語に正しい明かな發音を要するのを、活字版に正しい鮮やかな活字を要する樣だと述べたが、さて適當にして感興のあるやうに思想感情の表出を要するのは、恰も其の活字を工合好く趣味あるやうに組み上げて活字版を作るやうなものである。活字版には、句讀點があり、活字の大小があり、或はゴシック（太文字）或はイタリック（斜文字）を交ぜ、或は批點を附け、さうして字行の變化も色々ある。そのやうに、朗讀における表出法には、語音の斷續・强弱・昇降・高低・緩急などと云ふ多種多樣の趣がある。これから其の表出法について段々と說いて行かう。

一句讀（くせう）一名ポーズ（休止）

文章に含む思想と感情とに應じて讀み聲を斷續させる事を、此處に句讀と云ふ。英語に之をpauseといひ、國語ではポーズと音譯し、「休止」と意譯する。句讀といふ字義は、增韻に「語絕處謂之句。語未絕而點分之、以便誦詠、謂之讀。」と解說してある。句讀卽ちポー

語法的句讀

ズに語法的句讀と美辭的句讀とある。

先づ語法的句讀とは、語法に〔四八〕おいて說く如く、語意の斷續に從つて讀み聲を斷續させて、語意を明かにする事である。一に之を論理的句讀とも云ふ。句讀は、凡そ句と讀とに分けられる。句とは、文意の終止する場合を云ひ、讀とは、文中で語意の少しく斷れる場合を云ふ。現代は通例、句點には。(ル)を用ひ、讀點には、(テン)を用ひ、名詞を並列する場合には・(ポツ)を用ひ、挿入の語句には特に「(カギ)」又は『(ワイカギ)』を用ひる。そこで、語法的句讀は、語法に據る符號の如く斷續するものである。今、大體、文部省の句讀法案に據つて語法的句讀を示すこととする。

句點の例

【一】〔四九〕句點の例。

すべて文(センテンス)の終止した場合。

(1) 正序のとまり。

○人が雨戸を明けてゐる。

○第一に上陸したのは誰だ。

(2) 倒置のとまり。

○旗を持ちませう、私は。(この場合には述語の下に讀點を切る)

○誰だ、第一に上陸したのは。

(3) 省略のとまり。

○生きて歸る者わづかに三人。

○「それでは日本一の高山は。」(問)

讀點の例

【二】〔五〇〕讀點の例。

(1) 形式から見れば終止してゐても、意義から考へると、次の文に連續するものの下。

○蝙蝠は鳥ではありませぬ、頭もからだも鼠に似て居るけものです。

○和助が樹の下を出て、まだあまり遠くも行かぬ時のことでした、目が暗む樣ないなびかりがすると同時に、耳が裂ける樣な恐しい音がしました。

(2) 同趣の文の下。但し最後の文の下は句點。

○山を越えて行かうか、河に沿つて行かうか。

○己の長をいふこと勿れ、人の短をいふこと勿れ。

○雨は降る、風は吹く、暗さは暗し。

(3) 獨立の感動詞及び呼掛の語の下。但し倒置した場合はその前後に。

○あゝ、兵吉はこれからどうして日を過すだらうか。
○おとうさん、あなたはどこへいらつしやいますか。
○それでも、にいさん、雨が降つたら、しやうがないではありませんか。

(4) 動詞や形容詞や助動詞の中止法を用ひて續けた同趣の語・句・節の下。
○甚だ暑く、うつとうしき日。
○我を生み、我を養ひ、我を敎へた父母。
○燕は南へ去り、雁は北から來る。

(5) 並列した同趣の名詞句（句は十名連語）・名詞節の間。
○座中に琴ひける、笛ふける、鼓うてるがあり。
○規則の整へる、約束の行はるゝ、實に歎賞に堪へたり。

(6) 並列した同趣の形容詞・形容句・形容節の間。
○松の木は、青い、針の樣な葉をもつてゐる。
○身を立て、道を行ひ、尊敬を受けた人である。
○學も博く、德も高い紳士が話しました。

(7) 並列した同趣の副詞・副詞句の間。
○この文は平易に、正確に、且つ面白く作られたり。
○大いに面白く、又大いに有益な話。

(8) 複文の副詞節の下。
○友達は上京を勸めたが、兄はそれに贊成しない。

(9) 從屬節（十名從節）を含んでゐる副部の下。
○知らせを聞いて、巡査の馳せつけた時には、賊は既に影をかくしてゐた。

(10) 複文の主節の主語の下に從屬節が來たときに、主語の下。
○宇佐神社の境內は、老杉枝を交へて、晝なほ暗し。

(11) 或成分に相當する語を特に提示したときに其の下。但し客語に相當するものを提示した場合は、この限でない。
○あの梅の植ゑてある青磁の鉢、あれが私が父に貰つた物です。
○高山彥九郎・蒲生君平・林子平、この三人を寬政の三奇士といふ。

(12) 名詞節の下に助詞の無いときに其の下。
○交通・通信機關の完備せる、人をして國の廣さの短縮せるにあらざるかを疑はしむ。

(13) 主部の長いときに其の下。
○特派員として先月廿五日戰地に出張させた社員某は、昨日本社に詳細な通信を送つて來た。

(14) 他の語を修飾すべき副詞・副詞句が、下に來る語を修飾するやうに見えるおそれあるときに其の下。
○先生が少しばかり、面白い話をなさいました。

(15) 他の語を修飾すべき形容的修飾語が、下に來る語を修飾するやうに見えるおそれあるときに其の下。
○私はこの、芋虫に似た蠶は嫌です。

(16) 主語又は主部が客語の形容的修飾語の主であるやうに見えるおそれあるときに其の下。
○太郎は、目も見えず、耳も聞えぬ父をいたはる。

(17) 個々の名詞が熟語名詞と紛れ易いおそれあるときに其の下。
○母、子を抱く。　○山、上に聳えて高し。　○この人、馬を殺す。

(18) 主語が客語と粘着するおそれあるときに其の下。
○賴朝、範賴・義經をして平氏を攻めしむ。

(19) 假名で書いたときに、語と語とが粘着するおそれあるときに其の下。
○兵を起して、我が國に、てむかひたり。

(20) 形容的修飾語・形容的修飾句・形容的修飾節が、並列した同趣の有らゆる語句を修飾するときに其の下。
○興福寺の、南圓堂・北圓堂・五重の塔を見る。
○汽車の窓から見える、田・畑・山・川皆美し。
○蝶の飛ぶ、菜畑・麥畑の間を過ぐ。

(21) 或句が上にある語と同格であるときに其の前後に。
○家光は、家康の孫、秀忠の子、家綱の父なり。

(22) 並列した同趣の名詞の間にはポツを入れる。但し「や・も・と」などの助詞で並列した場合、接續詞で並列した場合等は、この限でない。
○松島・天橋立・嚴島は日本三景と稱せられたり。
○松島と天橋立と嚴島は日本三景と稱せられたり。
○松島・天橋立及び嚴島は日本三景と稱せられたり。

【三】挿入の例。

（1）カギは、左の諸種の場合の右の肩と左の脚とに入れる。

一、對話の文。

次郎は父の袂を引いて、「おとうさん、今の人はきちがひでせうか。」といひました。

二、獨語の文。

虹は「日はたゞ照るだけだから、誰もほめる人がないのだ。自分はこの通り美しいから、人が皆ほめるのだ。」といひました。

三、獨思の文。

太郎は嬉しくてたまらず、「あゝ、やつぱり起きて書かう、起きて書いても、居ねむりさへせず、勉強するやうに心掛ければよいのだから。」と決心した。

四、引用の文。

孔子も「利によりて行へば、怨多し。」といへり。

（2）フタヘカギは、對話の文、獨語の文、獨思の文、引用の文を引用したときに、其の右の肩と左の脚と

に入れる。

父は文吉に、「もしおとうさんが、おまへのいふ通りになつて、遊に行つて、選擧をしなかつたなら、人は『文吉のおとうさんは、村のためを思はない人だ、村中の人の迷惑するのをかまはない人だ。』と、わるくいひませう。おとうさんは、そんなことをいはれることはだいきらひです。」といひました。

〔註四八〕國語法における文（センテンス）の成立について左に大要を說かう。

「鳥啼く。」「花は美しい。」の如く、一つ一つの語即ち單語を綴つて、まとまつた思想をあらはすものを文といふ。

「鳥」「花は」の如く、思想の主題となる語を主語といふ。

「啼く」「美しい。」の如く、主語となる事物の動作や有樣などを敍述する語を述語といふ。

「秀吉城を大阪に築く。」の「城を」の如く、述語の目的となる語を目的語などといひ、また「大阪に」の如く、述語の意味を補足する語を補足語などといふ。さうして目的語と補足語とを總べて客語（一名補語）といふ。

「小さい鳥が樂しさうに啼く。」「秀吉は、大きな城を攝津の大阪に築いた。」の如く、主語や述語や客語の意味を修飾する語を修飾語といふ。主語とその修飾語とを一括して主部といひ、述語と客語とそれらの修飾語とを一括して述部といふ。

修飾語には、「小さい鳥」「大きな城を」「樂しさうに啼く」の如く、單語のもあり、「攝津の大阪に」「學

校から歸つた弟を」の如く、連語のもあり、「雪の降る日は寒い。」「兄は、馬が駈ける畫をかいた。」「春が來ると、鳥がさへづる。」の如く、節のもある。節には主語と述語との關係を具へ、連語には之を具へない。修飾の役目をする節を從節といふ。從節に對して主となる節を主節といふ。

「花咲き、鳥啼く。」「春は暖く、夏は暑く、秋は涼しく、冬は寒い。」「彼も人なり、我も人なり。」の如く、互に對等である節を並立節といふ。

「鳥啼く。」「小さい鳥が、樂しさうに啼くの如く、主語と述語との關係が唯一回であるのを單文といふ。「雪の降る日は寒い。」「春が來ると、鳥がさへづる。」の如く、從節を含む文を複文といふ。「花咲き、鳥啼く。」「色の美しい花も咲き、聲のよい鳥も啼く。」の如く、幾つかの單文または複文から成立つ文、即ち文の本幹が並立節から成る文を重文といふ。

〔註四九・五〇〕　句讀點は、もと便宜から起つて、漸次、理論的になつたものである。現今といへども、諸作家の句讀點が、必ずしも一致するものでは無く、幾分かは人々の流儀の異同がある。その異同を以て一概に破格のものと見なしてはならぬ。朗讀のポーズも同樣である。

なほ(1)讀點が煩しく多い場合には、誤讀の心配がなければ、重要でない讀點を省くことがある。また(2)通例は讀點を切らない所でも、誤讀の心配があれば、例外に之を切ることがある。例へば、

(1)「高く、貴く、美はしい富士の山」を「高く貴く美はしい富士の山」

(2)「べんけいがなぎなたを持つ。」を「べんけいが、なぎなたを持つ。」

次に美辭的句讀とは、〔五一〕(甲)文中の或語を特に强めて言ふため、(乙)韻文または整句文の口調をとゝのへるために用ひるものである。

美辭的句讀

强めのポーズ

整句のポーズ

(甲)　强めのポーズ

一、强めた語の後を休止する例。

○福田行誠かつて鐵眼の事業を感歎していはく、「鐵眼は一生に三度　一切經を刊行せり。」(十一の廿八)

○安房は大音に「西郷は　どこに居る。」と叫んだ。(十二の廿六)

(二)　强めた語の前を休止する例。

○ジョージは帽子を振りながら叫んだ。「ウェリントン公爵　萬歲。」(十一の廿六)

○「何とも仰あるべし。我等は　かんにんの四字を知り侍れば、惡口せられても、少しも腹立ち侍らざるなり。」とて笑ひゐたりとぞ。(高二の廿一)

○「天川屋の義平は　男でござるぞ。」(忠臣藏)

〔註五三〕　引例に「(十一の廿八)」と記したのは「尋常小學國語讀本卷十一の第廿八課」の略記であり、また「(高二の廿一)」と記したのは「高等小學讀本卷二の第廿一課」の略記である。以下皆同樣。

(乙)　整句のポーズ

一、韻文の句讀

○日本中の小學校、三萬近くありといふ。三萬近き學校に　分れて學ぶわれ〳〵の望に向ふ足なみは　皆一せいにそろふなり。(七五調の新體詩)(七の六)

○沖を走るは　丸屋の船か、丸にやの字の　帆が見える。（七七七五の調の民謠）（十二の五）

○七重八重　花は咲けども、山吹の　みの一つだに　無きぞ悲しき。（古歌）（高一の二）

○代々を重ねて　榮行く村の　鎭めといます　神の御前に、いでや誠の　心捧げて　祖先に恥ぢぬ　勤立（いさなし）てん。（七七調新體詩）（高二の四）

○敷島の　大和心を　人問はゞ、朝日に匂ふ　山櫻花。（和歌、本居宣長）

○櫻咲く　御國しらすと、百敷の　千代田の宮に　神ながらいます。（和歌、正岡常規）

○古池や、蛙とびこむ　水の音。（俳句、芭蕉）

○春のやよひの　あけぼのに、
　四方の山邊を　見わたせば、
　花ざかりかも　しら雲の
　かゝらぬ峯こそ　なかりけれ。（今樣、慈鎭和尙）

二、整句文の句讀

○祇園精舍の鐘の聲、諸行無常の響あり、沙羅双樹の花の色、盛者必衰（しやうじやひつすい）の理（ことわり）をあらはす。驕れる者久しからず、たゞ春の夜の夢の如し。猛き人も遂には亡びぬ、偏に風の前の塵に同じ。（七五調を加味した文）（平家物語、祇園精舍）

○天文廿三年、秋の半ばの頃かとよ、上杉謙信は八千餘騎を從へて、川中島に打つて出づ。われ此の度の戰は、武田信玄を追つ詰めて、親しく雌雄を決せんと、渦卷き返す犀川を、渡つて陣をぞ取りにける。（琵琶歌、川中島）

○不破の關屋は荒れ果てゝ、猶もるものは秋の雨の、何時か我がみのをはりなる、熱田の八劍伏し拜み、汐干に今やなるみ潟、傾く月に道見えて、明けぬ暮れぬと行く道の、末はいづくと遠江、濱名の橋の夕潮に、引く人もなき捨小舟、沈み果てぬる身にし有れば、たれか哀れと夕暮の、晩鐘（いりあひ）なれば今はとて、池田の宿に着き給ふ。（太平記、東下り）

〔註五一〕　美辭的句讀は、語法的句讀の法を以て律すれば破格のものである。それで、兩方の句讀の一致しないことがある。例へば「しら雲の、かゝらぬ峯こそ」の如き、「渦卷き返す犀川を、渡つて陣をぞ取りにける。」の如き、「晩鐘なれば今はとて、池田の宿に着き給ふ。」の如きである。語法的句讀から云へば、（イ）や（ロ）の如きは、讀點を切らない所であり、（ハ）の如きは、讀點を切るべき所である。

句讀を如何に長く休止すべきか。それは、緩やかに讀む文章と急に讀む文章とに由つて、程度がちがはねばならぬ。特に美辭的句讀は、同じ文章の中でも、思想感情の變化に應じて、休止の長短がちがはねばならぬ。〔五二〕しかし凡その標準はどうか。之について、ザンダ

ース氏は、讀の最も短い休止卽ちコンマの場合は一と數へる間、つぎに短い休止卽ちセミコロンの場合は一二、やゝ長い休止卽ちコロンの場合は一二三四と數へる間を置き、句における最も長い休止は一二三四五六と數へる間を置くべき事を說いてゐる。またコンマは一、セミコロンは二、コロンは三、ピリオドは四を數へる間休止するが可いといふ說もある。數をよむ速度にもよることで、つまり、これは凡その心得に過ぎないから、場合によつて斟酌すべきものである。挿入の語句をうけた「と」は小さく讀む。

〔註五二〕休止時間の事は、サンダース(C. W. Sanders)氏の著書"Union Fourth Reader"(ユニオン第四讀本)に據る。なほ右の書に、インタロゲーションマーク卽ち?も、エクスクラメーションマーク卽ち!も、ピリオドと同じ休止時間としてある。從來の我が國文には、句點を以て、右の三種の符號の何れもを表はしてある。近來の國文には、西洋風の符號を用ひるものもある。

二　重念

重念とは「重く念む」といふ意義の支那語である。英語に之をエンファシス(Emphasis)と呼び、抑揚又は强調などと譯し、或語をその前後より强く發音することである。しかし重念といふ方が、一層適切で且稱へ易いやうに思ふから、此處に重念の名稱を用ひる。重念は理解的重念と情調的重念とに別けられる。

重念一名エンファシス

理解的重念の二種

一般的のもの

特殊的のもの

まづ理解的重念は理解を助けるための重念であり、一般的のものと特殊的のものとに別たれる。一般的の理解的重念は、平生格別氣付かずに居るもので、例へば「鯨は獸類だ」と言ふときには、おのづと「鯨」と「獸類」とが重念になつて居る。支那語においても同樣に「鯨是獸類」と言ふのである。卽ち、主要の語は重念、其の他の語は輕念となるのは、自然である。しかし是は一般的の事で、特殊の場合には、補助の語でも重念になるのである。例へば「鯨は獸類で有るか無いか。」との疑問に對しては「獸類だ」と答へねばならぬ。かやうなのを特殊的の理解的重念と呼ぶ。さらに分り易い例を對句に取つて云へば、

○沙漠地方ニ居ルラクダハ灰色デ、雪ノ中ニ住ム北極熊ハ眞白デアル。(九の五)

○一時の朋友を得ることは易く、眞の知己を得ることは難い。(高一の十二)

主眼

と重念をするのは、一般的の理解的重念できまつた事である。けれども特殊的の理解的重念は、場合によつて起るものであるから、一般的のものゝ樣に一定してゐない。例へば次の言葉は、重念の仕方で主眼の置き所が四通りに理解される。

○私は決して之を話さなかつた。(他人が話したのだらう)

○私は決して之を話さなかつた。(これまでに一度も)

○私は決して之を話さなかつた。(他の事を話したが)

○私は決して之を話さなかつた。（思つた事は有るが）

それで問を受ける場合にも、能く重念の有り所に注意せねばならぬ。試みに左の問に對する否定の一例を答へて見るのも、亦一興である。

（問）林君は昨日來たか。
（答）否、林君の使が。
（問）林君は昨日來たか。
（答）否、一昨日。
（問）林君は昨日來たか。
（答）否、來なかつた。

右の如く特に主眼とする所を重念するのである。なほその例をあげると、

○「いつも人より一時前に參つて居ります。」「一時も前に。」といつて信長は驚いた。（七の十八）

○天祥いはく、「我は宋の臣なり。いづくんぞ二朝に仕へんや。願はくば我に死をたまへ。」（十の十八）

○ナポレオン常にいへらく、「不能といふ語は唯愚人の辭書に在り。」（高三の十）

修辭の關係において、特に前と後と對應を成す所は、重念せねばならぬ。例へば

○からころも、きつゝなれにし、つましあれば、はるゞゝきぬる、たびをしぞ思ふ。（在原業平が三河の八橋のかきつばたを見て、之を各句の上によみこんだ和歌）

○古の奈良の都の八重櫻、今日九重ににほひぬるかな。（伊勢大輔）

また平家の嫡長重盛の宣言は、

○「年號は平治なり、花洛は平安城なり、我等は平家なれば」（平治物語）

と重念すべく、又かの天正の三傑（信長・秀吉・家康の三公）を三幅對にした十七文字は、

○啼かざればころしてしまふ時鳥。
○啼かざれば啼かせてみせう時鳥。
○啼かざれば啼くまで待たう時鳥。

と重念すべきである。緣語や諷諭の語なども、やはり重念するのが可い。

○武藏野はかるかやのみと思ひしに、かゝる言葉の花や咲くらん。（後土御門天皇から太田道灌に賜はつた御製）（高一の二）

○二つもじ、牛の角もじ、すぐなもじ、ゆがみもじとぞ、君はおぼゆる。（後嵯峨上皇の皇女悦子内親王が御父帝に「こいしく思ひ參らせ給ふ」の意を申上げられた御歌）（徒然草）

○久方の月の桂も折るばかり、家の風をも吹かせてしがな。（菅公の母大伴氏）

○衣のたては綻びにけり、
　年をへし絲の亂れの苦しさに。（義家と貞任との連歌）

○「諸君、こゝろみに此の卵を卓上に立てゝごらんなさい。」（コロンブスの卵）（八の廿）

○七重八重花は咲けども、山吹のみの（實の、簑）一つだに無きぞ悲しき。（高一の二）

○この船のよるてふ事を夢のまもわすれぬが世の寶なりけり。（黑船の畫の贊）（松平定信）

○世の中を何のへちまと思へども、ぶらりとしては暮されもせず。（元の木工綱）

○早蕨が握り拳を振りあげて、山の横面はる風ぞ吹く。（蜀山人）

次に情調的重念は、强い感情をあらはすための重念で、理解的重念よりも更に强くすべきものである。情調的重念に色々の場合がある。卽ち、

情調的重念

（イ）かさね（同じ語を重ねること）　かさね

○ココ　ホレ　ワンワン。ココ　ホレ　ワンワン。（二の十七）

○春　ガ　來々、春　ガ　來々、（四の二三）

○「しつかりやれ。もう少しだ、もう少しだ。（十一の廿）

○「急いで橋を切落せ。早く〳〵。」（高二の六）

○桃太郎は首尾よく凱旋しました。めでたし〳〵。（童話）

（ロ）ひきのばし（語を引延して言ふこと）　ひきのばし

○「五郎さん　ばんざい。」（三の廿）

○「一太郎やあい。其の船に乘つてゐるなら、鐵砲を上げろ。」（七の十二）

○蜀山兀として阿房出づ。（阿房宮賦）

○かれは義勇忠孝の士なり。（芭蕉が和泉三郎をほめた言葉）（奥の細道）

○嗚呼、忠臣楠子之墓。（湊川八字の碑）

○「天、勾踐を空しうするなかれ。時、范蠡無きにしもあらず。」（天―勾踐を―空しう―するなかれ。時―范蠡―無きに―しもあらず）（十の廿七）

（ハ）さけび（大聲で叫ぶこと）　さけび

○「一ばんがち、五郎　さん　の　舟。」「五郎　さん　ばんざい。」（三の廿）

○「杉野はいづこ、杉野は居ずや。」（八の廿四）

○「そら、落ちるぞ。早く引返せ。」（高二の六）

○「端武者どもには目なかけそ。大將軍と組んで討て。」（高三の廿九）

○高綱大音聲をあげて、「宇多の天皇に九代の後胤、近江の國の住人佐々木三郎秀義が　とぎれ

四男、佐々木四郎高綱、宇治川の先陣ぞや。」と名乘つたる。（平家物語）

（ニ）とぎれ（語の間を休止すること）

○「それは餘りな御言葉です。」（それは―餘りな―御言葉です）（九の廿四）

○ケーザルは〔五三〕ルビコン河の畔に留れり。何故彼は留りたりや。（何故―彼は―留りたりや。）（羅馬史）

○此の期に及び、申上ぐる言葉も無し。たゞ御最期の尋常を願はしう存じます。（たゞ御最期の―尋常を―願はしう―存じます）（忠臣藏、由良之助の詞）

（註五三）ルビコン（Rubicon）河は、アペニン山脈の東側を流れてアドリヤ海に注ぐ小河。ケーザルが此に停つて熟慮し、遂にポンペーウスの討滅を決心して渡河した所。それで「ルビコン河を渡る」とは、また決心斷行の意味に用ひられる。

（ニ）の場合において、餘り多く又は餘り長く休止するときは、重念の效力を減ずる事になる。右の如く四種に分けて見たけれども、二種以上同時に起る事が屢々有る。特に我等國民の心の底から溢れ出る「ばんざい」又は「いやさか」の三唱、卽ち、

萬歲―、萬歲―、萬―歲――。　彌榮―、彌榮―、彌―榮――。

に至つては、實に四種の情調的重念が一時に起るものである。

しはがれ、かすれ、ささやき、無聲

重念の度合は聲の强弱大小を以て表すものであるが、しかし甚だ深い重念が、時として

昇調と降調と

降調の場合

意味完結

は「しはがれ」「かすれ」を以て表出されることがある。これは聲の强大の極は、しはがれて能く聲が出なくなり、かすれてしまゝかもである。兩極端は一致するともいひ、重念の反對の「ささやき」や無聲が却て效を奏することもある。白樂天が琵琶行に「此時無聲勝有聲」などと云ふことも、詩人の空想で無いどころか、眞に實感を寫したものと思はれる。

三　昇降

昇降とは言葉のあげさげ、卽ち昇調と降調とを指して云ふ。同じ言葉でも、「地球は圓い。」と降調にいへば定說となり、「地球は圓い。」と昇調にいへば疑問となる。降調を「降り音調」、昇調を「昇り音調」とも云ふ。

まづ降調の通例の場合を擧げて見れば、

一、意味の完結した場合。

○ウシ　ガ　キマス。（卷一）

○「ドウゾ　オアガリ　クダサイ。」（二の二）

○アレアレ　アガル、ヒカウキ　ガ。（二の廿四）

○あぶないことだ、もし宗任に惡い心があつたら。（五の廿一）
○犬を見て猫は背中へ腹を立て。（高三の七）
○筑波ねのこのもかのもに蔭はあれど、君がみかげにますかげはなし。（古今集）
○嗚呼忠臣楠子之墓。（湊川八字の碑）

疑問の語を入れた問

二、疑問の語を入れた問の場合。
○「ナゼ　ナク　ノ　カ。」（四の五）
○「まだ一里半もあるのですか。」（五の十八）
○「だれだい、今笑つたのは。」（六の八）
○「何しに此所へ參つた。」（八の四）
○「何か御注意下さることはございますまいか。」（十一の十七）
○「人は何の爲に此の世に生れて來たのか。」（十二の十九）
○「我々の行末はどうなるだらうか。」（同上）
○花の雲、鐘は上野か、淺草か。（芭蕉）

假の問

三、假に設けた問の場合。
○それでも本氣か。（本氣で有るまいぞの意）
○なんと面白いぢや無いか。（甚だ面白いの意）
○行かうぢや無いか。（行かうの意）（次の四問は說明を略す）
○「オチヨ　サン　デス　カ、ヨク　イラツシヤイマシタ。」（二の二）
○「お前のやうに、犬の世話やねずみを取ることばかり熱心では、困るではないか。」（十二の三）
○「沖を走るは丸屋の船か、丸にやの字の帆が見える。」（十二の五）
○此の英雄を養成したる舊師の喜は如何。（高二の八）

命令や希求や宣告

四、命令や希求や宣告の場合。
○ツノ　ダセ、ヤリ　ダセ、アタマ　ダセ。（卷一）
○「花　ヲ　サカセテ　ミ　ヨ。」（二の十七）
○「紀州の男は、其の金をまちがひなくとゞけるやうに致せ。人夫には此方から手あてを致す。」（七の十七）
○「壯吉、（中略）かういふ風に束ねて運んでくれ。」（十の八）
○「勝ちて持歸れ。然らずんば之に乘りて歸れ。」（高一の廿四）
○以後不都合のないやう心得よ。

○何々の罪によりて何々の刑に處す。

憤怒や憎惡

五、憤怒や憎惡の場合。

○「コレ　ハ　ニセモノ　ダ。ニクイ　ヤツ　ダ。」(二の十七)

○「無言の行に口をきくといふ事があるか。」(十一の十六)

○「あなたがたは、とんでもない人たちだ。」(同上)

○「お前には、もう何もやらぬぞ。永の勘當だ。」(十二の十四)

○おのれ師直、眞二つ。放せ本藏、放しやれ。(忠臣藏)

○總じて此の程、につくしにくしと思ひつるに、いで物見せてくれん。(「につくしにくし」は反覆の語、速度が加はつて、上は長く下は短く言ふ。)(謠曲、安宅)

感激や慨歎

六、感激や慨歎の場合。

○「ほうら、もう　ぢき　しようぶ　だ。」(三の廿)

○「文天祥は眞の男子なり。」(十の十九)

○「あゝ、五海里の海上を僕も泳ぎきることが出來たのだ。」(十一の廿)

○「若し自分にもこんな親友を持つことが出來るなら、王者の富貴も榮華もいらない。」(高一の十三)

降調の二種

昇調の場合

意味未完結

○「あゝ、余をして六時間イギリス海峽の主たらしめば、必ず世界の大王たるを得べきに。」(高三の十)

○萬歳、萬歳、萬歳。

○天顏に咫尺し、誠に恐懼の至に堪へず。

降調に、(甲)自然に只おとすと、(乙)おさへておとすとの二種がある。右の諸項のうち感情的または意味を強める降調は(乙)に屬する。

次に昇調の場合の大要を擧げて見れば、

一、意味未完結の場合。(例外は「詞藻と表出法」の章にも說く)

○オトウサン、モウ　イクツ　ネタラ、オ正月　デス　カ。」(二の十三)

○耳　ハ　ナンテン　ノ　ハ　デ、目　ハ　ナンテン　ノ　ミ　デス。」(二の十六)

○アレアレ　アガル、ヒカウキ　ガ。(二の廿四)

○「まあ、いつて　ごらん。」「おやゆび、人さしゆび。」(三の六)

○松島・天の橋立・宮島の三つを、昔から日本三景と申します。(五の十六)

○一時の朋友を得るは易く、眞の知己を得るは難い。(高一の十二)

○我が國の梅の花とは見たれども、大宮人はいかゞいふらむ。(安倍宗任の歌で、平家

物語の劍卷に見え、梅の花を示して「これは如何に」と尋ねた大宮人の侮りに答へたもの。）（右の或例の如く、稍長い並立節や稍長い副詞節を持つ文章は、その節と節との間の未完結の所でも、降調を用ひる。）

二、疑問の語を入れない問の場合。

疑問の語を入れない問

○「それでは日本一の高山は。」（六の二）
○「サウデス。マダアリマセウ。」（六の十九）
○「寒からうが。」（七の十八）
○「お前は知つてゐるだらう。」（七の廿）
○「社長さんはえらい方なんでせう。」（九の十三）
○「それに樂譜もございませんが。」（十二の九）

三、歡喜や仁愛や有望の場合。

歡喜や仁愛や有望

○「おばあさん、今日は。」（四の六）
○「とよちやんかね。丈夫でゐるよ。」（八の廿二）
○「後を追つて御いでになつたら、大てい追つけませう。」（十一の十七）
○「何でうらむわけがございませう。」（十二の十四）
○「今年も豐年だ。氏神樣のお祭には、何でも好きなものを買つてやるぞ。」（高一の九）
○「船がはいるよう。」（高一の廿二）

四、絕叫や號令の場合。

絕叫や號令

○「おきよ、すけつね。曾我兄弟がまゐつた。」（四の廿五）
○「總員起し。」「兩舷直整列。」「露天甲板洗へ。」「顏洗へ。」（九の十五）
○「そら、もう一息だぞ。襲へ襲へ。」（九の廿二）
○「薪は無いか。薪は無いか。」「出來た出來た。」（十の九）
○「なうなう、旅のお方、おもどり下さい。お宿致しませう。」（十の十二）
○「しつかりしろ。負けるな、負けるな。」「ふかだふかだ。」（十一の十三）
○「てがらは仕勝ちぞ。かゝれかゝれ。」「組うち。」（十一の七）
○や、勝つた。
○遠からん者は音にも聞け。近からん者は目にも見よ。（太平記、村上義光）

五、稱讃や崇拜の場合。

崇拜や稱讃

○「コレハメヅラシイ。ミゴト、ミゴト。」（二の十七）
○「ウェリントン公爵萬歲。」（十一の廿六）
○「我ながらも、義平はよく驅けたるものかな。あ、驅けたり。」とぞほめたりける。

驚愕

六、驚愕の場合。

○「一時も前に。」といつて信長は驚いた。（七の十八）

○「にいさん、にいさん、（中略）もう一つ、小さい北斗星のやうなものが出來てゐますね。」（九の十九）

○「あゝ、あなたはベートーベン先生ですか。」（十二の九）

○あの人が死んだ。（高三の廿九）

祈願

七、祈願の場合。

○海神ねがはくば潮を退けて、道を開かせたまへ。（七の六）

○「今一度本國へ歸さんと思し召さば、この矢はづさせ給ふな。」（平家物語、那須與一）

○「本願過ち給はずば、必ず引上し給へ。」（平家物語、女院御往生）

非常の調子

なほ文中の或部分に非常の調子を用ひて、他とは際立つて調子の昂るのを感せしめることがある。この非常の調子は、アイロニー（irony）や皮肉や頓智などの表出をする場合に用ひる。例へば、

アイロニーや皮肉や頓智

○そさう者壺を買ひに行き、うつむけてあるを見て、「こんな口の無い壺があるものか。」と言ひながら、ひつくりかへし、底も拔けてゐる。」（高一の十一）

○走ることを自慢にする者あり。或時盜人を追ひかけ行く。向ふより友達來り、「なんだ／＼。」「盜人を追つかけてゐる。」「何處にゐる。」「あ、追越してしまつた。」（高一の十一）

○黑犬をちやうちんにする雪の道。（高三の七）

○犬を見て猫は背中へ腹をたて。（高三の七）

の如きである。

四　讀聲の高低・强弱・緩急

讀聲の總體について

これから讀聲總體の高低と强弱と緩急とについて說く。高低とは、調子卽ち Pitch の事であり、强弱とは、强さ卽ち Force の事であり、緩急とは、時間卽ち Tempo の事である。

總じて高聲は陽氣であり、尖銳の感を起させ、低聲は嚴肅であり、鈍重の感を起させる。又テンポの速い方は陽氣だが、その極端は擾亂となり、遲い方は沈靜だが、また陰鬱を感ぜしめる。

聲帶と聲門

手を喉頭に當てゝ見ると、俗に「喉佛」といふ凸つた軟骨に觸れる。この軟骨の所の內側に

喉笛（聲門）がある。聲門は左右兩聲帶の間をいふので、そこが或程度に開いてゐるところへ肺臟から出る空氣があたると、聲帶が振動する。その振動の耳に聞えたものが聲である。聲門は、常の呼吸をしてゐる時は開いてゐるが、聲帶の附屬筋の働きで、半開きにもなり、全く閉ぢる樣にもなる。聲帶が張れば調子が高くなり、弛めば低くなる。絃樂器にたとへると、絲が張れば音が高く、弛めば低くなると同じ理である。音の高い低いと云ふことは、一定の時間に聲帶に起る振動の數の多い少いを指すのである。音樂の方では、一秒時間に二百五十六振動すること卽ち「は調」第一音を眞中とし、それから上も下も幾音階かに分けてある。一音階は順次に二倍の振動を爲すものである。卽ち

聲の高低

人聲の音域

樂器の音域

||||は	4096
||||は	2048
||||は	1024
||||は	512
||||は	256
||||は	128
||||は	64
||||は	32
||||は	16

人聲の音域

聲帶の自然の構造によれば、女や兒童の聲は大人の男の聲より高い。そのわけは、肺臟の空氣の量が、女は男より少いからで、小壜に小口、大壜に大口の譬で、女や兒童の聲門は男のより狹く張つてゐる。それで、男聲は强さに優り、女聲は高さに優る。從つて男聲は莊

男聲と女聲

重の方、女聲は輕快の方が得意である。音樂で、一般人聲の音域を左の如くに分ける。

- 人聲
  - 女聲
    - 高聲（Soprano）（上高音）
    - 中聲（Mezzo Soprano）（次高音）
    - 低聲（Alto）（高音）
  - 男聲
    - 高聲（Tenor）（保持音）
    - 中聲（Baritone）（上低音）
    - 低聲（Bass）（低音）

小兒の聲は、男女とも女聲の音域に入る。ソプラノ（高音部）の最下音とバス（低音部）の最上音と相接し、兩部に一音階の差がある。男聲ばかりか女聲ばかりを用ひるのを單性といひ、兩方を併せ用ひるのを複性といふ。さうして高中低各三部の男聲又は女聲の唯一部を用ひるのを單音といひ、二部を併せ用ひるのを二重音といひ、三部を併せ用ひるのを三重音といふ。それで、單性二重音、複性三重音などと云ふ種類がある。

聲帶の張りは同じでも、肺臟から吐き出す空氣の力が强大であれば、聲帶の振動が强く、その力が弱小であれば、その振動が弱い。その力は空氣の分量の大小による。音の强弱を音の大小などとも云ふ。音樂の方で、通例之を次の如く分ける。

聲の强弱

甚弱(Pianissimo)　弱(Piano)　中(Mezzo forte)　強(Forte)　甚強(Fortissimo)

調子の緩急とは、發音と時間との關係をいふ。一定の時間に發する音の數の尋常より多いのが急、少いのが緩である。

音の緩急

例へば、一秒時間に「ほととぎす」の五音を發するのを尋常とすれば、同時間に「こうし」の三音を發するのは緩で、「ほととぎすとぶ」の七音を發するのは急である。音樂の方で、これを次の如く分ける。

甚緩(Lent)　緩(Adagio)　中緩(Andante)　中(Moderato)　中急(Allegretto)　急(Allegro)　甚急(Presto)

音色

さて量的要素の高低・強弱・緩急は同じで有つても、人々各々の發音器官の工合や習慣がちがふから、百人は百色、千人は千色の音色が出る。それで、「あれは誰の聲だ」と識り別けられるのである。この音色は、各個人の特有の質的要素で有つて、一般の量的要素とは別のものである。さて合唱又は齊讀の時には、或者はソプラノ、或者はアルト、或者はテナー、或者はバス、尙その中間音部を以てし、ハ調の第四音を主標準として出發すれば、能く音聲の調和が出來る。これを「調子が揃ふ」とも「調子が合ふ」とも云ふのである。

音聲の調和

心情表出と讀聲

高低・強弱・緩急は心情によつて變化する。〔五四〕母の愛や觀音の慈悲を語る時は、優しい聲になる。驚いた時、怒つた時は、荒い聲になる。愛してゐる人に語ると同じ樣に、惱んでゐる者に物言ふことは有るまい。親切に語る時と冷淡に話す時とは、調子がちがふ。哀しい時には聲が沈み、嬉しい時には聲に活氣がある。讓步服從しようとする時の聲は、おのづと弱くなり、論破屈服させようとする時の聲は、知らず識らず強くなる。

樂記の所說

〔註五四〕禮記の樂記篇に曰く、「凡音之起、由二人心一生也。人心之動、物使二之然一也。感二於物一而動、故形二成聲一。聲相應、故生レ變。變成レ方、謂二之音一。比レ音而樂レ之、及二干戚羽旄一、謂二之樂一。樂者、音之所二由生一也。其本在二人心之感一於物一也。是故其哀心感者、其聲噍以殺。其樂心感者、其聲嘽而緩。其喜心感者其聲發而散。其怒心感者、其聲粗而厲。其敬心感者、其聲直而廉。其愛心感者、其聲和而柔。」云々。「成レ方」は曲調を成すの意。「干戚羽旄」は舞樂の具である。「干」は盾、「戚」は斧、「羽旄」は鳥の羽をつけた旄。「噍」は聲がよわつて澤の無いこと、「殺」は聲が衰へてゐること。「嘽」は聲が寬いでゐること。

今、讀聲を、凡そ高・中・低と强・中・弱と急・中・緩との各三段に分け、之に多少の程度をつけて說く事とする。凡そ中揃の讀聲は、尋常の對話や引用や說述など、すべて尋常の表出に用ひる。左に多種多樣の心情の變化に應ずる高低・强弱・緩急を表としよう。

心情表出と讀聲との一覽表

第五表出法

番號	心情	高低	强弱	緩急	例となる文章
一	莊重	低	中	緩	(一) 智識ヲ世界ニ求メ大ニ皇基ヲ振起スヘシ。(五箇條ノ御誓文)

二	畏敬	低	中	緩	
三	稱讃	中高	中	中急	
四	勝喜び	高	強	中急	
五	歡喜	高	中	中急	
六	滿足	中	弱	緩	
七	謙遜	中	弱	中緩	
八	謹愼	中	弱	緩	
九	悲哀	低	混合	緩	
一〇	愁嘆	高	混合	緩	
一一	沈鬱	低	強	緩	
一二	不平	高	弱	中急	
一三	憂懼	中高	弱	中急	
一四	歎願	低	弱	緩	
一五	失望	低	中	緩	
一六	壯美	中高	強	緩	

(二)鈴を鳴らしてかしはでうてば、神々しくもこだまに響く。(高二の四)

(三)ほんたうにえらい人ですね。(九の十三)

(四)上杉方はどつとときの聲をあげた。(七の十四)

(五)耕造さんのおかげで、信作の命が助かりました。(八の三)

(六)武勇絶倫先考に代り之を激賞すとの御言葉をいたゞき武夫の滿足も之に過ぎず候。(高一の廿一)

(七)いや、名前を申し上げる程の者ではございません。(十の十二)

(八)あの青年が私の室にはいる前、先づ着物のほこりを拂ひ、はいると靜かに戸をしめました。(十の廿五)

(九)怒と失望と後悔とに身も魂もくだけ果てた王は、我にもあらず荒野の末にさまよい出た。(十二の十四)

(一〇)中尉はあふのけに倒れてゐる。北風はもう一度鼻先をなでてもらひたくなつて、そつと額を主人の肩のあたりへすりよせた。中尉の手はじつとして動かない。(九の廿二)

(一一)「お〻降つたは〳〵。世に榮えてゐる人がながめたら、さぞ面白い事であらうが。」感がいに打沈みてとぼ〳〵と歩を運ぶ。(十の十二)

(一二)第二の僧は、二人とも規則を破つたのが不快でたまらない。「あなたがたは、とんでもない人たちだ。」(十一の十七)

(一三)もうこの子一人になりましたのに、近い中に又其のの大蛇がたべにまゐります。(五の三)

(一四)べつにのぞみはございませんが、唐糸の身代りに立ちたうございます。(六の十五)

(一五)あゝ、余をして六時間イギリス海峽の主たらしめば、必ず世界の大王たるを得べきに。(高三の十)

(一六)あれ〳〵、虹が立つてゐる。森も小山も下に見て、向ふの田から大空の、雲までとゞく弓のなり。(五の十七)

一七	壯快	高	弱	急	
一八	上機嫌	高	弱	急	
一九	怨恨	中	強	急	
二〇	報復	低	強	中急	
二一	激怒	高	強	急	
二二	叱責	中高	強	中急	
二三	自慢	中	強	中緩	
二四	侮蔑	高	強	中急	
二五	嘲笑	高	強	中	
二六	戲弄	高	弱	中	
二七	滑稽	高	弱	中急	
二八	驚愕	高	強	急	
二九	恐怖	高	中	急	
三〇	畏懼	低	混合	中緩	
三一	煩悶	中低	弱	緩	

(一七)ざあつと降出した。雷が鳴る。庭中の雨脚をすさまじく見せて、ぴかりと電が光る。(高三の廿一)

(一八)からすのなかない日はあつても、五一ぢいさんがうたはない日はない。」と村の人からいはれるほど、いつもきげんよくうたふぢいさんです。(三の十一)

(一九)此のまゝ切腹を命ぜられても、石田めとは中直りは致さぬ。(七の廿三)

(二〇)おきよ、すけつね。曾我兄弟がまゐつた。(四の廿四)

(二一)王は駒も張裂けんばかりに怒り、早速馬にむちうつて、次女リガンの許に走つた。(十二の十四)

(二二)泣くものをかまはず力まかせに手を引くとは情を知らぬ不屆者。(八の十一)

(二三)ナポレオン常にいへらく、「不能といふ語は唯愚人の辭書に在り。」(高三の十)

(二四)此の村の名を言ふと、「あゝ、あの貧乏村か」と言はれたものださうだ。(五の十九)

(二五)汝が如き愚なる文盲は實に論し難し。(高二の廿一)

(二六)オマヘタチハ、ウマクワタシニダマサレタナ。(四の五)

(二七)犬を見て猫は背中へ腹を立て。(高三の七)

(二八)その時「ふかだ〳〵。」といふ船長のけたゝましい叫び聲が聞えた。(十一の十三)

(二九)一人はもうにげる間がないので、地にたふれて、死んだふりをしてゐました。(五の廿五)

(三〇)其の勢に呑まれて兵士等は思はす道を開いた。(十二の廿六)

(三一)彼は益々世のはかなさを感じた。「人は何の爲に此の世に生れて來たのか。我々の行末はどうなるだらうか。」(十二の十九)

三二	疑惑	中低	弱	緩
三三	優柔	中	弱	緩
三四	祕密	低	弱	中緩
三五	羞恥	中低	弱	緩
三六	懺悔	中高	中	中急
三七	柔和	中低	弱	中
三八	仁慈	中低	弱	緩
三九	安寧	中	弱	中緩
四〇	優美	中	弱	中
四一	慷慨	中高	強	中緩
四二	勇武	高	強	中緩
四三	壯烈	高	強	急
四四	祈願	低	中	中急
四五	熱誠	中	中	中急
四六	確信	中高	強	中

(三二)一言の答もなく、山吹の花一枝を差出す。持賚其の意を解せず。(高一の二)

(三三)助からば我も共に助からんと思ひ、互に目を見かはして、彼方此方へ泳ぎありき給ひける。(平家物語)

(三四)萬じゅは其の夜ひそかにうばをつけて石のらうをだつねました。(六の十五)

(三五)同胞の勝利をさも自慢げにをどりはねて喜んだのが、今更恥づかしくなつた。(高一の廿)

(三六)臭鳳を神にまつつて、此の後は決して人の首を取らぬとちかひました。(八の六)

(三七)私は公爵ウエリントンだ。よい子だから私の頼みをきいてくれ。(十一の廿六)

(三八)佛敎を盛にせんとするは、ひつきやう人を救はんが爲なり。(十一の廿八)

(三九)山の中でも、三軒家でも、住めば都よ、わが里よ。(六の四)

(四〇)さし續けたる日傘は、橋の欄干と共に水に影を落せり。(高三の一)

(四一)やあ、正綱、十四歳の時が二度あるか。(八の四)

(四二)通有はほばしらをたふして、之をはしごにして、敵の船へをどりこんだ。(六の廿一)

(四三)荒波洗ふデッキの上に、やみをつらぬく中佐の叫。「杉野はいづこ、杉野は居ずや。」(八の廿四)

(四四)「海神ねがはくは潮を退けて、道を開かせたまへ。」(七の六)

(四五)「此の四代の後を受けて、國家の爲に、此の學問を大成するのが、お前の役目だ。」(九の六)

(四六)彼は迷の雲がからりと晴れて、はつきりとまことの道を悟り得た。(十二の十九)

〔註五五〕讀聲の高低・强弱・緩急について參考した書物は、J. Millard: "Grammar of Elocution" G.L. Raymond: "The Orator's Manual" 井上武士氏の「初等作曲法」など。

右によつて、その他の心情の調子も類推される。さて右は大體の標準を示したもので、委細に云へば、同じ文章の中にも、種々の變化に應じて、讀聲の變化がなくてはならぬ。その變化は、歡喜・壯快・滑稽・激怒・壯烈の如き心情を表はす場合に著しい。讀聲の變化が無ければ、卽ち單調となる。單調を善用するのは、莊重・畏敬の如き心情を表はす場合である。しかし、その單調といふ事も、實は單調に近いまでで、如何なる朗讀にも、絕對の單調は有り得べからざる事である。

讀聲の變化について注意すべき事は、Stress 卽ち聲の强め方である。レーモンド氏は、之を左の六種に分けてある。

㊀ 頭部の强め(∨符)

壯烈や上機嫌や叱責や慷慨や報復の如き心情の文句。

㊁ 末部の强め(∧符)

不平や懺悔や熱誠や確信の如き心情の文句。

㊂ 中部の强め(∧∨符)

讀聲の變化

單調

聲の强め方

莊重や滿足や壯美や優美の如き心情の文句。

四、複雜の强め（╳符）

疑惑や嘲笑の如き心情の文句。

五、全部の强め（═══符）

勝喜びや激怒の如き心情の文句。

六、顫動の强め（〰〰符）

畏懼や悲哀の如き心情の文句。

〔註五六〕二代目義太夫で、淨瑠璃中興の祖と呼ばれ、延享元年に五十四歳で歿した。竹本播磨掾（はりまのじょう）の「淨瑠璃秘曲抄」の中に記す語り樣を左に拔萃して、參考としよう。

「時代物。地あひも詞も、位をつけて、ゆつたりと語るがよし。されど餘りのびすぎたるは、きゝにくし。

世話物。常に物言ふ心持にて、詞づかひさら〳〵とねばらぬ樣に言ふがよし。地あひの工合も同じ心得なるべし。

位有る人。地あひ詞とも、上品に、ぎごつならぬ樣、やすらかに語るべし。同じ雲の上人にても、官位の高下により、それ〳〵の心持あるべし。

爺婆。すべて老人の趣、詞づかひに心をつくべし。さればとて滅多に齒拔けのまねするはわるし。

子供。愛らしく、かんがちに素直なるがよし。されど餘り子供の聲色する樣なるは、初心らしくきにくし。

うれへ。うさも辛さも自身の事と思ひ取り、涙のこぼれる程に身を入れて語るべし。

手負。音聲は亂れ、調子揃はず、ひく息甲斐無く、つく息ばかりの樣に語るがよけれど、餘りハアハアと騷がしきはわるし。

ちやり。詞づかひ拍子好く、輕う語るが、第一と心得べし。

酒の醉。あたま勝ちに、しりへのもつれる樣に、卷舌にて言ふがよし。

ども。言ひだしが出かね、言ひかけると、けつく口早に續けて言ふものなり。

詰合。男女のつめ合は、自然と聲の甲乙ありて分り易し。男どしのせりふは、よく心得ねば、どちらが言ふやら分り難きものなり。さればとて、きりかはりたる聲をつかふも、けたゝましう聞えてわるし。たゞ聲のつかひ方工夫あるべきなり。

掛合。地あひ詞ともに、うけとり渡しあひの隙（すき）かぬ樣、かぶせうけて語るがよし。物によりて樣々なれば、それ〳〵程よく心がくべし。」

音曲と朗讀との表出法は同一ではないけれども、心情の如何によつて高低・强弱・緩急などを異にすることには、兩者に相似た所がある。それは、朗讀法が音曲を參考すべき所である。

五　讀聲の高低・强弱・緩急の文例

以下の文例を朗讀するには、以上に述べておいた發音法及び表出法の諸條項を好く適用すべきは勿論、次の章に述べる「詞藻と表出法」の諸條項をも好く適用すべきである。

(一)莊重　教育勅語　御誓文　出雲大社　釋迦　俳句

(一) 莊重　低、中、緩

○教育勅語(國民周知につき奉掲に及ばぬ)

○一、廣ク會議ヲ興シ、萬機公論ニ決スヘシ。

一、上下心ヲ一ニシテ、盛ニ經綸ヲ行フヘシ。

一、官武一途、庶民ニ至ル迄各其志ヲ遂ケ、人心ヲシテ倦マサラシメンコトヲ要ス。

一、舊來ノ陋習ヲ破リ、天地ノ公道ニ基クヘシ。

一、智識ヲ世界ニ求メ、大ニ皇基ヲ振起スヘシ。(五箇條ノ御誓文)

○時に天照大神の使者建御雷命此の地に來りていふやう、「大神の勅にいはく、『此の葦原の中つ國は皇孫之をしろしめすべし。』と。快く此の國をたてまつり給ふや如何に。」(十二の二)

○釋迦は泣悲しんでゐる人たちに、「私は行はうと思つたことを行ひ盡くし、語らうと思つたことを語り盡した。これまで說いた敎そのものが私の命である。私のなくなつた後も、めい〳〵が其の敎をまじめに行ふ所に、私は永遠に生きてゐる。」と諭して、靜かに眼を閉ぢた。(十二の十九)

○元朝の見るものにせん富士の山(宗鑑)(高二の十五)

(二)畏敬　遠足　伊勢參宮　ウェリントンと少年　青の洞門　鎭守に詣でて　所年祭の祝詞　和歌

○元朝や神代の事も思はるゝ(守武)

○元朝や家に讓りの太刀はかん(去來)

○田子の浦ゆ打出でて見れば眞白にぞ不盡の高嶺に雪はふりける。(萬葉集、山部赤人)

(二) 畏敬　低、中、緩

○八幡樣の高い石だんを上りつめた所に、しめをはつた大きな杉の木がありました。御神木ださうです。(五の十)

○御門の前でうやうやしく拜禮してから、神殿の御もやうを拜した。(中略)何のかざりもない御神殿を拜して、まことにおそれ多い氣がした。(六の廿六)

○ジョージは、かねてウェリントン公爵が勳功も高く、りつぱな人であるといふ事を聞いてゐたので、帽子をぬいで恭しく敬禮して、さて靜かに口を開いた。(十一の廿六)

○老僧が始めてのみを此の絕壁に下してからちやうど三十年目に、彼が一生をさゝげた大工事が、みごとに出來上つた。(十二の廿一)

○鳥居くゞりて登る石段、一足毎に心さわやぎ、鈴を鳴らしてかしはでうてば、神々しくもこだまに響く。(高二の四)

○言別きて、伊勢に坐す天照大御神の大前に白さく、皇大御神の見はるかします四方

の國は、天の壁立つ極み、國の退き立つ限り、青雲のたなびく極み、白雲の墜坐向伏す限り、青海原は棹柁ほさず、舟の艫へ至り留る極み、大海原に舟滿ち續けて、陸より往く道は、荷の緒縛ひ堅めて、磐根・木根履みさくみて、馬の爪の至り留る限り、長道ひまなく立ち續けて、狹き國は廣く、峻しき國は平らけく、遠き國は八十綱打掛けて引き寄する事の如く、皇大御神の寄さしまつらば、荷前は皇大御神の大前に、横山の如く打積みおきて、殘をば平らけく聞しめさむ。又皇御孫命の御世を、た長の御世と、堅磐に常磐に齋ひ奉り、茂し御世に幸へ奉るが故に、皇吾が睦つ神漏伎・神漏彌の命と、鵜じもの頸根衝拔きて、皇御孫命の帛幣を、稱辭竟へ奉らくと宣る。（新年祭の祝詞の一段）

〔註五七〕「特別に言葉を改めて、伊勢にまします天照大御神の大前に天皇の白させ給ふ事は、大御神の照臨し給ふ四方の國は、天の壁の立つはてまで、地の遙かに天につくはてまで、青雲のたなびくはてまで、白雲が地に接するはてまで、大海には貢の船の棹柁をほさず、舟の艫先の至り留るはてまで、外國往來の船を滿ち續け、また陸にて往來する道には、租調の荷の緒を結ひ堅めて、岩根や木の根を踏み通つて、馬の爪の至り留るはてまで、長き道を間斷無く立ち續けて、狹い國は廣くし、峻しい國は平かにし、遠い國は多くの綱を打掛けて引き寄せる如く、大御神が國を御委託になるならば、貢物の初穗を大御神の大前に、横山の如く澤山に獻じ積み置いて、その殘りをば平安に召し上るであらう。又天皇の御代を永き御代として長へに祝ひ奉り、繁昌の御世として幸を與へ給ふ故に、吾が親しい御祖の勅命として、鵜のやうに頸を地に垂れついて敬ひ、天皇のうづ高い嚴めしい奉り物を以て、十分に頌德の辭をのべ奉るとの仰せを宣りきかす」の意。

（三）稱讃・感謝　中高、中、中緩

○感心だ、感心だ。えらい子だ。信作が落ちたのにかまはず馬をかけさせたら、大勝に勝つのに、人の命にはかへられないと思つて、相手を助けてやつたのはえらい。如何にも見上げた心掛けだ。（八の三）

○「ほんたうにえらい人ですね。」「いや、これから先があの人のほんたうにえらい所だ。」（九の十三）

○さすがの王も其の不敵に呑まれて、「もう燒くに及ばぬ。あゝ、あつぱれな勇士だ。敵ながらもお前のやうな勇士は殺すに忍びない。歸れ。」と彼をゆるした。（高二の六）

○舊師ボンネルは直ちにビスマークを訪ひ、辭を改めて其の偉勳を稱揚し、「閣下よ、余は閣下がかつて其の愛讀せられたる世界歷史の中に、今日は自ら壯絶なる一節を記人せられたるを祝す。」と。（高二の八）

○旅順ハ東清ノ咽喉ニシテ、露國ノ據ツテ以テ東亞ヲ窺ヒシ所ナリ。其ノ地タルヤ、

（三）稱讃感謝競馬
老社長
護國の目と腕
ビスマークの幼時
乃木大將への感謝狀

山海ノ險ヲ扼シ、峯巒深固、露國以テ要塞ト爲シ、經營十年、人工ヲ窮極シ、號シテ「難攻不落」ト稱ス。將軍第三軍ヲ督シ、聯合艦隊ト水陸相應ジ、合圍半歲、其ノ堅壘ヲ拔キ、其ノ巨艦ヲ殲シ、遂ニ敵帥ヲシテ手ヲ束ネテ降ヲ乞ヒ、城ヲ開キテ命ヲ寄スルニ至ラシム。其ノ戰鬪ノ烈、勳功ノ偉、古來未ダ比數ヲ見ズ。是レ　聖天子偉德ノ隆赫ニ由ルト雖モ、亦將軍以下、忠誠勇武、鞠躬盡瘁ノ致ス所ト云ハザルヲ得ズ。夫レ鋭ヲ挫キ、强ヲ破リ、命ヲ土芥ニ比シ、公ノ爲メ私ヲ忘レ、以テ君國ニ盡スハ、臣子ノ大節、而シテ將軍以下實ニ是レヲ以テ終始ス。豈所謂「道理貫ニ心肝、忠義塡ニ骨髓」」モノニ非ズヤ。獨國威ヲ中外ニ發揚スルノミナラズ、東亞治安ノ端モ亦、將ニ由ツテ開カレントス。健次郎等此ノ盛事ニ際シ、其ノ關係スル所重且大ナルヲ以テ、感激ニ勝ヘズ、功勞ヲ稱讃シ、復辭ノ口ヲ衝イテ出ヅルヲ禁ゼザルナリ。（全文）

（註五八）明治三十七八年の役、旅順陷落の時、旅順攻圍軍司令官乃木陸軍大將へ呈せられた感謝狀の數ある中で、これは、時の東京帝國大學總長理學博士山川健次郎氏が、同大學を代表して呈せられたものである。

「難攻不落」、「道理貫ニ心肝」云々の引用語句は、回顧の氣味で徐ろに讀むこと。「是レ」の下の闕字の所は、少し休止して後に「聖天子偉德の隆赫」と莊重に讀み、「健次郎等」は、小聲にて謙遜の心を以て讀むこと。「道理貫ニ心肝」云々は、蘇東坡が李公擇に與へた書に、「吾儕雖ニ老且窮一、而道理貫ニ心肝一、忠義埋ニ骨髓一、直須レ談ニ笑於死生之際一。」とあるを引用。

（四）勝喜び　高、强、中急

○クルマ　ニ　ツンダ　タカラモノ、イヌ　ガ　ヒキダス　エンヤラヤ。サル　ガ　アト　オス　エンヤラヤ。キジ　ガ　ツナヒク　エンヤラヤ。（卷一）

○彥六が與五左衞門を組みふせた。武田方が之を見て、聲をあげて喜ぶと、與五左衞門は忽ちはねかへして、彥六を組みしき、手早く首を取つてさし上げた。上杉方はどつとときの聲をあげた。（七の十四）

（五）歡喜　高、中、中急

○信吉は少しはなれて、今度はおとよの顏を見ながら、「おとよ、おとうさんが歸つてうれしいか。」と言つた。（八の廿二）

○濱には益々人數が增して右往左往に入亂れる。籠を持つてゐるもの、棒をかついでゐるもの、飛廻る子供、それを追ふ犬、嬉しさうに張切つた空氣があたりにみなぎる。（高一の廿二）

○ビスマークは深く其の舊恩を謝し、靜かに答へて、「否、先生の稱揚の辭は、我の敢て

（四）勝喜び　モモタラウ
川中島の戰

（五）歡喜　啞の學校
漁船歸る
ビスマークの幼時

當る所にあらず。されど多年の素志こゝに遂げて、歴史研究の效果の空しからざりしを喜ぶ。」と。（高二の八）

（六）滿足　中、中、緩

○「正一も大分役に立つやうになつたなあ。」あみ笠をかぶつた父がふり向くと、母もすげ笠をそちらへ向けて、「ほんたうにさうですね。（中略）」と言ひながら、正一を見てにつこりした。（九の十四）

○ぢいさん今年六十の、坂を越えたる足もとに、大いなる石横たへて、なほ怠らずこつ〳〵と、何をか常に刻みゐる、めがねをかけてはつぴ着て。（九の十八）

○報國丸にての働きにつきては兄上にも非常に御喜びなされ早速御手紙を以て武勇絶倫先考に代り之を激賞すとの御言葉をいたゞき武夫の滿足も之に過ぎず候。（高一の廿一）

（七）謙遜　中、弱、中緩

○レマン將軍は靜かに、「おほめにあづかつて恐れ入る。しかし部下の者は、最後までベルギーの名譽をけがさなかつたつもりである。」（九の九）

○「失禮ながらお名前を聞かせて頂きたい。」「いや、名前を申し上げる程の者ではございません。」主人はけんそんして言はず。（十の十二）

○「有難うございます。しかし誠に粗末なピアノで。それに樂譜もございませんが。」と兄がいふ。（十二の九）

（八）謹厚　中、弱、緩

○人が主人に向つて、どういふお見込で、あの青年をお用ひになつたのかと尋ねた。主人は答へて、「あの青年が私の室にはいる前、先づ着物のほこりを拂ひ、はいると靜かに戸をしめました。きれいずきで、つゝしみ深いことは、それでよく分りました。（中略）かういふ點から、いろ〳〵の美質をもつてゐることを見定めて、あの青年をやとふことにしたのです。りつぱな人の紹介狀よりも、何よりも本人の行がたしかな保證です。」といつた。（十の廿四）

○話が古事記のことに及ぶと、宣長は「私はかね〴〵古事記を研究したいと思つてをります。それについて何か御注意下さることはございますまいか。」（十一の十七）

○筑紫におはします所の御門も固めておはします。大貳の居どころは遙かなれども、樓の上の瓦などを、心にもあらず御覽じやられけるに、又いと近く觀音寺といふ寺の有りければ、鐘の聲をきこしめして作らせ給へる詩ぞかし。

月光の曲

（八）謹厚　たしかな保證

松阪の一夜

配所の菅公

都府樓纔看瓦色　観音寺只聽鐘聲　（大鏡の一節）

〔註五九〕右の一節は、讒言により、一朝にして大臣の榮職から太宰權帥に左遷された菅公の忠誠謹慎の事をしるす。「固めておはします」は閉門謹慎をいふ。「大貳」は太宰府の次官で、當時は藤原興範。「樓」は太宰府の官衙である都府樓をさす。「觀音寺」は天智帝勅建の名刹。「都府樓」云々は、菅家後集の「不レ出レ門」と題する律詩の領聯。

（九）悲哀　低、混合、緩

○私の下で、長い間しよんぼりとして居まして、日がくれてから村へはいりました。其の後間もなく死んだのです。さむい日のことで、あまり氣のどくでしたから、私が風の音をごうつとさせてやりましたら、送つて行く人が「此の人も一本杉の外にないでくれるものがなくなつた。」といひました。（四の廿）

（九）悲哀
一本杉
くりから谷
リヤ王物語

○親が落ちれば其の子も落ち、弟が落ちれば兄も落ち、馬の上には人、人の上には馬、かさなりかさなつて、ずゐぶん深いくりから谷が平家の人馬で埋まりました。（六の六）

○怒と失望と後悔とに身も魂もくだけ果てた王は、我にもあらず荒野の末にさまよひ出た。（中略）王は二三の忠臣にかしづかれて、とある小屋に一夜を明かしたが、何時の間にかもう發狂してゐた。（十二の十四）

芳宜園大人を祭る文
北風號

○こゝに文化の五とせ九月八日、平春海謹みて芳宜園大人のおくつきの御前に、菊の初花一枝をたむけ、香の木一ひらをたきて、うなねつきてまうさく。あはれかなしきかも。君はわれに十といひて一とせのこのかみにおはすなるが、今そのかみを思ひ出づるに、君はまさに盛りの齡におはして、吾はまだわらはにてぞ侍りける。常に縣居の庭に物學びにゆきかひたる時、あしたにまゐるとては、君のみはかしのしりへに從ひ、ゆふべにまかるとては、君の御袖のもとにすがりて、あひうるはしみまつれること、親子はらからにも何か異ならむ。書よむとては、君を師ともたふとみ、歌つくるとては、吾をおとゝいのつらにぞ敎へたまひける。（下略）（琴後集）

〔註六〇〕これは、村田春海の歌文集「琴後集」の名文。芳宜園は加藤千蔭の號。千蔭も春海も縣居大人賀茂眞淵に學び、歌人として文章家として名高い。「おくつき」は墓。「うなねつきて」は首を垂れて。「あはれかなしきかも」は漢文の「嗚呼哀哉」に同じ。「十といひて一とせのこのかみ」は十一歳の年上。「そのかみ」は其の昔。「みはかし」は御佩刀。「うるはしみまつる」は親しみ奉る。「はらから」は兄弟。「おとといのつら」は弟子の列。

（一〇）愁歎　高、混合、中

○主人の姿を見つけると、靜かに其のそばに立止つた。中尉はあふのけになつて倒れてゐる。北風はもう一度鼻先をなでてもらひたくなつて、そつと顏を主人の肩のあ

（一〇）愁歎
北風號

リヤ王物語

たりへすりよせた。中尉の手はじつとして動かない。北風はもう一度あの勇ましい號令が聞きたいと思つて、訴へるやうな目付で主人の顏を見下し、左右の耳をそばだてゝみた。しかし聞えるのは、かすかな息づかひばかりであつた。（九の廿二）

○コーデリヤは父の手を取つて泣きながら、「其のコーデリヤでございます。」「涙をこぼしてくれるのか。お前はわたしをうらんでゐるはずだが。」「何でうらむわけがございませう。何でうらむわけがございませう。」王は尙あらぬ言葉を口走つてゐたが、其の言葉の端々にも、前非を悔い、自分を責めて娘にわびる眞心がこもつてゐた。コーデリヤはそれを聞いて腸をちぎられるやうな思がした。（十二の十四）

（一一）沈鬱　低、强、緩

○信吉は「おう、おとよ。」といつて、娘の手をはなして、頭の先から足の爪先までながめたが、しばらくして、「おとよ、大きくなつたなあ。わしはあちらに居ても、お前の事ばかり心配してゐた。」といつて、（下略）（八の廿二）

○たもとの雪を打拂ひ〳〵つゝ此方へ來かゝれるは、此の家の主人なるべし。「おゝ、降つたは〳〵。世に榮えてゐる人がながめたら、さぞ面白い事であらうが。」感がいに打沈みてとぼ〳〵と歩を運ぶ。（十の十二）

（一一）沈鬱

啞の學校

鉢の木

瀧澤馬琴の苦心

野分の夕

○秋より冬に入りては、其の探り書きすらもかなはずなりて、さながら雲霧の中に在るが如く、わづかに東西を辨じ、晝夜を知るを得るのみ。（高一の廿七）

○野分立ちて、にはかに膚寒き夕暮のほど、常よりも思し出づること多くて、靫負の命婦といふを遣はす。夕月夜のをかしきほどに、出し立てさせ給ひて、やがてながめおはします。（中略）命婦かしこにまかで着きて、門引き入るゝより、氣はひあはれなり。やもめ住みなれど、人ひとりの御かしづきに、とかくつくろひ立てて、目安きほどにて、過ぐし給ひつるを、闇にくれて、ふし沈み給へるほどに、草も高くなり、野分にいとゞ荒れたる心地して、月かげばかりぞ、八重葎にもさはらず、さし入りたる。（源氏物語、桐壺）

〔註六一〕これは、桐壺の卷の野分の段の始である。御寵愛を蒙つた桐壺の更衣の歿後、野分の夕に御門が一入お物思ひになり、御使を亡き更衣の母君の邸へ遣はされる所である。「野分立つ」は、初秋の頃あらしめいて風の吹くこと。「常よりも」云云は、折柄とて御門は常よりも桐壺の更衣を思ひ出し給ふことが頻りであること。「靫負」は命婦の呼名。「命婦」は內侍ノ司の女官の名稱。「をかしき」は面白きこと。「やがてながめ」は、御物思ひが深いから、命婦を御遣しになつて、そのまゝ夕月夜をながめて、茫然として居たまふの意。「まかで着く」は、御所から退出して里方につく意。「門引き入る」云々は、牛車を門から引き入れる時からが、もう哀れな樣子である意。「やもめ住み」は、母

君は、按察使大納言といふ夫に早く後れて寡居して居られた事を云ふ。「人ひとり」云々は、更衣一人を後見するために、彼是と住居を修理して、見苦しく無い程度にくらされたこと。「闇にくれて」は、藤原兼輔の歌「人の親の心は闇にあらねども、子を思ふ路にまどひぬるかな」をにほはせて、更衣をかなしむ嘆きにくれまどひて母君の伏し沈みたまふこと。「月影」云々は、紀貫之の歌「とふ人もなき宿なれど、來る春は八重むぐらにも障らざりけり」をにほはせてある。「八重葎」は、茂つたむぐらといふ草。

(一二)不平　高、弱、中急

○住持は心得ぬ事に思ひて、或日其の畫師に、「君は畫を以て一家を成せる人なるに、數年の間一度も筆を取り給ひし事なし。我もとより衣食の費をいとふにあらざれど、何時までもかくておはすべきにあらねば、今は何處へなりとも行きて君の技をふるひ給へ。愚僧も所用ありて京に上り、或は一二年滯在せんもはかり難し。」(十一の十一)

畫師の苦心

○第二座の僧は、二人とも規則を破つたのが不快でたまらない。「あなたがたはとんでもない人たちだ。」三人とも物を言つてしまつたので、上座の老僧がもつたいらしい顔をして、「物を言はないのはわしばかりだ。」(十一の十六)

(一三)憂懼　中高、弱、中急

○「私どもには、もと娘が八人ございました。それを八岐の大蛇が來て、毎年一人づつ

無言の行

大蛇たいぢ

たべました。もう此の子一人になりましたのに、近い中に又其の大蛇がたべにまゐります。」(五の三)

眞の知己

○彼は途中風波の爲に妨げられたのであつた。若し期日に後れるやうなことがあつては、一つには無二の親友を殺し、二つには二言を吐いた惡名を後の世に傳へると思へば、居ても立つてもゐられない氣がしたが、如何とも仕方がなかつた。(高一の十三)

(一四)歎願　低、弱、緩

○萬じゆはおそる〳〵、「べつにのぞみはございませんが、唐糸の身代りに立ちたうございます。」と申しました。(六の十五)

萬じゆの姫

○薩摩守申されけるは、「此の二三箇年は、京都の騷、國々の亂出で來、君既に帝都を出でさせ給ひぬ。平家一門の運命今日はや盡果て候ふ。忠度かねて撰集の御沙汰あるべき由を承り、生涯の面目に一首なりとも御えらびに入るを得ばと存じ居り候ひつるに、斯かる世の亂出で來て、其の沙汰も無く候ふは、こよなき歎に候ふ。この後世靜まりて、撰集の御沙汰候はゞ、是なる卷物の中に然るべき歌もあらば、一首なりとも御恩を蒙りたく、まかり越して候ふ。」とて、日頃よみ置かれたる歌どもの中に、秀歌とおぼしきを百餘首書集められたる卷物を鎧の引合より取出でて、俊成

故郷の花

卿に奉らる。（高二の廿六）

（一五）失望　低、中、緩

○「あの波を御らん。かはいさうだが、とても人間業では救へない。」（十の五）

○娘の答に失望した王は、例の烈しい氣性から、苦り切つて、「お前にはもう何もやらぬぞ。永の勘當だ。」と言渡した。（十二の十四）

○イギリス海軍の優勢なりしため、其の計畫は失敗に終れり。ナポレオン切齒して曰く、「あゝ、余をして六時間イギリス海峽の主たらしめば、必ず世界の大王たるを得べきに。」と。而して此の聯合艦隊は、トラファルガーの一戰に、ネルソンの率ゐたるイギリキ艦隊に擊破せられて、殆ど全滅に歸せり。ナポレオンの失意察すべきなり。（高三の十）

（一六）壯美　中高、强、緩

○あれ〳〵、虹が立つてゐる。森も小山も下に見て、向ふの田から大空の、雲までとどく弓のなり。だれがかけたか虹の橋。（五の十七）

○世界の公園といはれてゐるスイスは、到る處我が日本のやうに景色がよい。私は今ジュネーヴ市のモンブラン橋のてすりにもたれて、ジュネーブ湖上の風光に見とれてゐます。るり色の水に浮ぶルソー島、湖畔に連なる綠樹・白壁、はるかに紺青の空にそびえて、雪をいただくアルプスの連峯。久しく單調平凡な景色にあきてゐた私には、如何にも心地よく眺められます。（十二の八）

（一七）壯快　高、中、急

○瀧の上手にかけた石橋を渡り、木立の深いゴート島に行つて、もう〳〵と立ちこめる水煙の間から近く瀧をながめるのもよく、下手に廻つて、カナダの方からはるかに全景を見渡すのも面白い。殊に遊覽船に乘つて、頭から雨のやうなしぶきを浴びながら、瀧つぼを見物して廻るのは、實に壯快です。（九の八）

○秋だ、秋だ、實に秋だ。つい後の逗子の山々も、氣のせゐか少し鳶色になつたやうだ。不動樣のあたりに頻りにもずの鳴くのが聞える。葉山から逗子のステーションに通ふがた馬車のラッパの音が聞える。（高二の九）

○ざあつと降出した。雷が鳴る。庭中の雨脚をすさまじく見せて、ぴかりと電が光る。見る〳〵庭は川になる。雨が飛石を打つてはねかへる。目に入る限りの青葉が一葉一葉に雨を浴びて、嬉しさうにぞく〳〵身を震はしてゐる。「あゝ、好いおしめりだ。」（高三の廿一）

（一五）失望　燈臺守の娘　リヤ王物語

ナポレオン

（一六）壯美　虹

ヨーロッパの旅

（一七）壯快　ナイヤガラの瀧

鯵釣

夕立雲

（一八）上機嫌　高、弱、急

（一八）上機嫌　五一ぢいさん

○五一ぢいさん は おもしろい ぢいさん です。「からす の なかない 日 は あつて も、五一ぢいさん が うたはない 日 は ない。」と 村 の 人 から いはれる ほど、いつも きげん よく うたふ ぢいさん です。（中略）ざぶざぶ おちる 水 の おと、とんとん ひびく きね の おと、その にぎやかな 中 から、「しごと なされ よ、きりきりしやんと、かけた たすき の きれる ほど。」（三の十一）

○「お前 は たいそう とんち が ある と 聞いた。此の からかみ に かいて ある とら を しばつて 見せ よ。」「しばつて お目 に かけます。どうぞ こゝ へ 追出して 下さいませ。」（四の十四）

お話二つ

（一九）怨恨　中、强、急

（一九）怨恨　曾我兄弟

○十郎 が 五つ、五郎 が 三つ の 年 に、父 は くどう すけつね に ころされました。母 は 泣き ながら 二人 の 子ども に、「何 と いふ くやしい 事 だらう。お前たち が 大きく なつたら、此の かたき を 取つて おくれ。」と いひました。五郎 は まだ 小さくて、何も 分りません でした が、十郎 は なみだ を おさへて、「きつと 此の かたき を 取つて 見せます。」と答へました。（四の廿四）

○清正は腹を立てゝ、「神々も照覽あれ、戰一つ出來ず、人のかげごとばかりいふ石田めとは、此の清正一生仲直りは致さぬ。たとひ數年の軍功がみとめられず、此のまま切腹を命せられても、石田めとは仲直りは致さぬ。」といひきつて歸りました。（七の廿三）

加藤清正

判官腹切の場

○力彌御意を承り、兼て用意の腹切刀、御前に直せば、心靜かに肩衣取退け、座を寛げ、「コレ〳〵御檢使、御見屆下さるべし。」と、三方引寄せ、九寸五分押戴き、「力彌、力彌。」「ハア」「由良之助は。」「未だ參上仕りませぬ。」「フウ、エヽ、存生に對面せで殘念、ハテ殘多やな、是非に及ばぬ、是迄。」と、刀逆手に取直し、左手に突立て引廻す。御臺二目と見も遣らず、口に稱名、目に涙。廊下の襖踏開き、驅込む大星由良之助、主君の有樣見るよりも、ハツと許りにドウと伏す。跡に續いて千崎・矢間其外の一家中、バラ〳〵と驅入りたり。「由良之助、待兼ねたはヤイ。」「ハア御存生の御尊顏を拜し、身に取つて何程か」「オヽ、我も滿足滿足、定めて仔細聞いたであろ、エヽ、無念、口惜しいはヤイ。」「委細承知仕る。此の期に及び、申上ぐ

る詞も無し。只御最期の尋常を願はしう存じまする。」「オ、言ふにや及ぶ。」と兩手を掛け、グッ〳〵と引廻し、苦しき息をホッと吐き、「由良之助、此の九寸五分は汝へ遺物、我が鬱憤を晴らせよ。」と、切先にて氣管刎切り、血刀扱出し俯伏に、ドウと轉び息絶ゆれば、御臺を始め列居る家中、眼を閉ぢ息を詰め、齒を喰ひしばり控ふれば、由良之助にじり寄り、刀取上げ押戴き、血に染まる切先を、打守り打守り、拳を握り、無念の涙ハラ〳〵〳〵。判官の末期の一句、五臟六腑に染渡り、扨こそ末世に大星が、忠臣義臣の名を揚げし、根ざしは斯くと知られけり。（忠臣藏）

〔註六二〕　これは、假名手本忠臣藏の四段目判官腹切の場である。この淨瑠璃は竹田出雲・三好松洛・並木千柳の合作であり、時代を憚つて、江戸を鎌倉に、吉良上野介を高師直に、淺野內匠頭を鹽冶判官に作りかへ、家老大石內藏助を大星由良之助、その子主稅を力彌と變名してある。この場は、鎌倉の扇が谷の上屋敷に閉居中、上使が立つて、判官に切腹申付けられる所である。「御檢使」は石堂右馬之丞。「御臺」は「御臺所」の略、名はかほよ御前。「稱名」は念佛。「千崎」の名は彌五郎。「矢間」の名は重太郎。「言ふにや及ぶ」は、言ふに及ばぬの意。「氣管」は喉笛。「五臟六腑に染渡る」は、心の底にしみわたるの意。

（二〇）報復　低、强、中急

（二〇）報復　猿蟹合戰

○クリ　ガ　トビツキマシタ。サル　ガ　ヤケド　ヲ　シマシタ。サル　ガ　ミヅ

曾我兄弟

（二一）激怒　リヤ王物語

由利八郎の意氣

ヲ　ツケ　ニ　イキマス　ト、ハチ　ガ　チクリ　ト　サシマシタ。サル　ガ　ニゲマシタ。ウス　ガ　オチテ　キテ、サル　ヲ　オシツケマシタ。コガニ　ガ　サルノ　クビ　ヲ　ハサミキリマシタ。（卷一）

○ね入つて　居る　もの　を　きる　は　ひけふ　と、「おき　よ、すけつね。曾我兄弟　が　まゐつた。」と　名のりました。すけつね　も　人　に　知られた　さむらひ、「心えた。」と、まくらもと　の　刀　を　取つて　おき上らう　と　しました。二人　は　すかさず　うち取つて、（中略）十八年目　に　めでたく　のぞみ　をとげました。（四の廿四）

（二一）激怒　高、强、急

○王は胸も張裂けんばかりに怒り、早速馬にむちうつて、次女リガンの許に走つた。（十二の十四）

○八郎之を聞くより、くわつと怒り、「汝は兵衞佐殿の家人なるか。過分の口狀たとへんに物なし。我が舊主は秀郷將軍の嫡流として、三代相續して鎭守府將軍たり。汝の主人とても、今の如き無禮の語を發すべからず。武運拙ければこそ、めしうどとはなつたれ、鎌倉殿の家人として、奇怪至極の振舞なり。汝が問ふ所には返答出來

難し。」と、口をつぐみて何事も言はざりけり。景時顏赤らめて引退き、此の由頼朝に復命しけり。（高三の十八）

（二二）叱責　中高、强、中急

○「コレ　ハ　ニセモノ　ダ。　ニクイ　ヤツ　ダ。」ト　イッテ、ワルイ　オヂイサン　ハ　トウトウ　シバラレテ　シマヒマシタ。（二の十七）

○越前守は聲をかけて、「これ女、其の手を放せ。泣くのもかまはず力まかせに引くとは、情を知らぬ不屆者。手を放した方が實母にきまつた。」と申渡しました。（八の十一）

○ふと通りかゝつた某大尉が之を見て、餘りにめゝしいふるまひと思つて、「こら、どうした。命が惜しくなつたのか、妻子がこひしくなつたか。軍人となつて、いくさに出たのを男子の面目とも思はず、其の有樣は何事だ。兵士の恥は艦の恥、艦の恥は帝國の恥だぞ。」と言葉鋭くしかつた。（九の廿四）

（二三）自慢　中、强、中緩

○風　は「何、一まくり　に　して　見せよう。」と　はげしく　吹立てました。（四の十）

○或晩、人ガネシヅマッテカラ、金物屋ノ店デ、ヤカントテッピンガ、ジマン話ヲシ合ヒマシタ。先ヅヤクワンガ言ヒマスニハ、「金ニハイロ〳〵アリマスガ、中デ一番

（二二）叱責　ハナサカヂイ
大岡さばき
水兵の母
（二三）自慢　日と風
ヤクワント
テッピン

人ノ役ニ立ツノハ、私ドモノ仲間ノ銅デアラウト思ヒマス。（下略）（六の三）

○ナポレオン常にいへらく、「不能といふ語は唯愚人の辭書に在り。」と。然れども勢に乘じて自ら制することを知らざるは、人間の弱點にして、失敗の基常にこゝに存す。（高三の十）

○あの榮螺と申す貝は、手丈夫な手厚い貝で、しかも丈夫な蓋がある。そこで、あの榮螺が、何ぞと云ふと、內から蓋をピッシャリ締めて、丈夫な事ぢやと思うてゐまする。鯛や鱸が美しがり、「コレ榮螺や。お前の要害は、大丈夫なものぢや。內から蓋を締めたら最後、外からは手がさせぬ。さりとては、結構な身の上ぢや。」と云へば、榮螺が髭を撫でて、「御前方が其の樣に云うてくれるけれど、あまり丈夫な事もない。しかしながら、マア斯うして居れば、まんざら難儀な事も無い。」と卑下自慢してゐるとき、ザッブリと音がする。榮螺が內から蓋を締めて、ジット考へてゐながら、今のは何であつたか知らぬ、網であらうか、釣針であらうか。是ぢやによつて、要害が常にして無いと、どうもならぬ。鯛や鱸は捕られたか知らぬ。さても心もとない事ではある。したが先づ俺は助かつたと、とかくするうち時刻も移り、もう宜からうと、ソット蓋をあけ、あたまをヌッとさし出して、そこら見まはせば、

ナポレオン
榮螺の自慢

何と無う勝手が違ふやうな。よく〳〵見れば、魚屋町の肴屋の店に、この榮螺十六文と、正札付に成つてゐました。（鳩翁道話）

〔註六三〕この書は、京都の心學者柴田鳩翁の道話を其の子武修が聞書きしたものである。翁は中年に盲となり、諸方で心學を講說した人である。「そこらあたりを見まはせば」以下は「疑惑」、「魚屋町」以下は「驚愕」の調子で讀むこと。

（二四）侮蔑　高、强、中急

○烏ハ大キナコエデワル口ヲイヒ、太イクチバシデツツキマス。モズハ小サイガ、マケヌ氣ノ鳥デスカラ、高イ所カラトンデ來ガケニ、フクロフノカホヲケツテ、「キイ　キイ」トカチドキヲアゲマス。（四の九）

○昔此の村はひどく貧乏で、此の村の名を言ふと、「あゝ、あの貧乏村か。」と言はれたものださうだ。（五の十九）

（二五）嘲笑　高、强、中

○「汝が如き愚なる文盲は實に諭し難し。人に似て蟲なり。己がまゝにすべし。」（高二の廿一）

（二六）戲弄　高、弱、中

（二四）侮蔑	フクロフ
	用水池
（二五）嘲笑	かんにん
（二六）戲弄	白ウサギ
（二七）滑稽	一口ばなし
	マリーのきてん
	塙保巳一
	猫の垣巡
	川柳

○白ウサギハイマ一足デヲカヘ上ラウトイフトコロデ、「オマヘタチハウマクワタシニダマサレタナ。ワタシハコノヲカヘ來タカツタノダ。」トイツテワラヒマシタ。（四の五）

（二七）滑稽　高、弱、中急

○子どもがそら一めんの星を見て、「ああ　わかつた。あの光るところが雨のふるあなだ。」（三の十七）

○「これ、おばあさん、お前は知つてゐるだらう。」すると兵士のおばあさんが、「はい、よいお天氣でございます。」敵はどつと笑ひました。さうして、「こいつ、かなつんぼだな。」と言つて、みんな出て行つてしまひました。（七の廿）

○保己一は笑ひて、「さて〳〵、目あきといふものは、不自由なものだ。」と言ひたりとぞ。（八の十七）

○我が輩は返答を待つために、彼等に三分間の猶豫を與へて、垣の上に立つてゐた。烏は通稱を勘左衞門といふさうだが、なるほど威じの惡いやつだ。我が輩がいくら待つてゐても、あいさつもしなければ、飛びもしない。（高二の七）

○犬を見て猫は背中へ腹をたて。（高三の七）

孔蕡の怪氣焰

○黒犬をちやうちんにする雪の道。（同上）

○油で煮しめた樣なる太織の綿入、藍天鵞絨の紋付、裾からぼろをさげて、薙刀形の草履をはき、頭は月代ぼう〳〵、髭むしやくしやとして、ちぢむさき事いはん方なし。その癖に氣象高く、辯舌滔々として高慢を吐くは、素讀指南の先生、社盟を書き集めて、やうやく五六輩に過ぎざる貧書生と見えたり。「殘念閔子騫」といふ古風なる口癖あり。生國はいづれ片田舍の者、遊學の間四五年になれど、江戸の事はむちやなり。孔蕡「どうだ、主人。夙に起き夜に寐ねて、かせぐものだの。」浮世床主人「五郎「ヤ先生さん。お早うございます。」孔「おれは清貧を樂しむ氣だから、早く起きる氣も無いが、家鹿の爲に起された。ヤ、あたけて〳〵どうもならぬ。」「嘉六が酒にでも醉つて來やしたかネ。」孔「この男は何を云ふ、鼠が酒に醉つて、たまるものか。ハ、、、、、」「へエ。わつちは又筋向ふの嘉六が、例の生醉であたけたかと思ひやした。」孔「何さ。家鹿とは鼠の異名さ。」「鼠にも表德がごせえやすかネ、」孔「表德かは知らぬが、社君だの家兎だのと、色々異名があるて。」弟子留吉「左官だの壁だのとつけるも尤もだネ。あいつが壁へ穴を明けちやあ、左官さわぎだ。」「べらぼうめ、だまつて居ろ。」留「アイ」とへこんで門口を掃除してゐる。（浮世床）

〔註六四〕「浮世床」は「浮世風呂」と共に、式亭三馬の名作の滑稽小說であり、一方は理髮店に入り來る、世の樣々の人物を巧に寫したものである。この一節は、その中の一人「孔蕡」と名づける、世間知らずの漢學者の怪氣焰である。「月代」は、額から頭の中央へかけて髮を剃る當時の男の理髮風。「素讀指南」は漢籍の讀方教授。「社盟」は門生。「殘念閔子騫」は孔子の弟子の「顏淵・閔子騫」をもぢつた洒落。「先生さん」は、先生とばかりでは無禮に聞えると思つて、斯く云ふと、原文に說明してある。「家鹿」は、本草釋名に「嶺南人謂レ鼠爲二家鹿一。」といふ。「來やした」は、「來ました」の方言。「表德」は、表德の號、卽ち別號の意。「べらぼうめ」は、罵る時の詞、一轉すればベランメーとなる。

武將の幼時

（二八）驚愕　高、强、急

吳鳳

○オバアサン　ガ　モモ　ヲ　キラウ　ト　シマス　ト、モモ　ガ　二ツ　ニ　ワレテ、ナカ　カラ　オホキナ　ヲトコノコ　ガ　ウマレマシタ。（卷一）

ふか

○もう少しで雀の巢へ手が屆かうとした時、ふみ外して軒下へどうと落ちた。將軍秀忠が刀を取つて出て見ると、長四郎であつた。（八の四）

○待ちかまへてゐた蕃人どもは、すぐに其の人を殺して、首を取りました。見ると、それは吳鳳の首でございました。蕃人どもは聲を上げて泣きました。（八の六）

○ちやうど其の時、「ふかだ〳〵。」といふ船長のけたゝましい叫び聲が聞えた。老砲手

が驚いて向ふを見ると、船から三四百メートルの處に、大きなふかの頭が見える。人々は叫び聲に驚きあわて、我先にと船へもどつて來る。（十の十三）

（二九）恐怖　中、中、急

○フクロフ　ハ　シカタ　ガ　ナイ　ノデ、大キナ　目　ヲ　見ハツテ　キヨトキヨトシテ　居ル　バカリ　デス。（四の九）

○「頭が八つ、尾が八つある大蛇で、目はほほづきのやうに赤く、せ中には、ひのきや杉の木が生えてゐます。」（五の三）

○一人はもうにげる間がないので、地にたふれて、死んだふりをしてゐました。熊は死人には手を着けないと聞いたからでございます。熊が來て、からだ中かぎまはしましたが、ほんたうの死人だと思つたのでせう。其のまゝ行つてしまひました。（五の廿五）

○元暦二年のころ、おほなゐふること侍りき。そのさま世の常ならず。山くづれて川をうづみ、海かたぶきて陸をひたせり。土さけて水わきあがり、巖われて谷にまろび入り、汀こぐ舟は浪にたゞよひ、道ゆく駒は足の立ちどをまどはせり。いはんや都のほとりには、在々所々堂舍廟塔、一つとして全からず。或はくづれ、或はたふれたる間、塵灰立ちあがりて、盛なる煙のごとし。地のふるひ家のやぶるゝ音、いかづちに異ならず。家の中に居れば、忽にうちひしげなむとす。走りいづれば、また地われさく。羽なければ空へもあがるべからず。龍ならねば雲にのぼらむこと難し。おそれの中におそるべかりけるは、たゞ地震なりけりとぞ覺え侍りし。（方丈記）

（二九）恐怖
フクロフ
大蛇たいぢ
熊のさゝやき
元暦の大地震

〔註六五〕「元暦二年」の七月九日の午の刻。「なゐ」は地震の古語。「立ちど」は立所。「在々所々」はあちこち。「たふれたる間」は、倒れたのでの意。「うちひしげなむとす」は、打挫がれんとすの意。

（三〇）畏懼　低、混合、中緩

○さる程に、治承二年十一月十二日の寅の刻より、中宮御產の氣ましますとて、京中六波羅ひしめきあへり。御產所は六波羅池殿にてありければ、法皇も御幸なる。關白殿を始め奉りて、太政大臣以下の卿相雲客一人も漏るゝはなかりけり。（中略）護摩の煙御所中に滿ちて、鈴の音雲をひゞかし、修法の聲身の毛よだちて、如何なる御物氣なりとも、何面を向ふべしとも見えざりけり。かゝりしかども、中宮は隙なくしきらせ給ふばかりにて、御產も頓に成りやらず。入道相國・二位殿胸に手を置きて、「こは如何にせん如何にせん。」とぞあきれ給ふ。人の物申しけれども、只「ともかくも善きやうに善きやうに。」とばかりぞ宣ひける。「あはれ淨海、軍の陣ならば、

（三〇）畏懼
中宮御產の事

さりとも是までは臆せじものを。」とぞ宣ひける。（平家物語）

〔註六六〕冬の「寅の刻」は午前五時頃。「中宮」は、入道相國平清盛の妻二位殿の所生で、今度安德天皇を產み給ふのである。「六波羅」は洛東にあり、平家の諸邸のある處。「法皇」は後白河法皇。「卿相雲客」は公卿と殿上人。「護摩」は、木を焚きて祈禱する祕密の法。「修法」は祈禱の經文を誦むこと。「よだつ」は恐れて立つ。「物氣」は死靈や生靈などのたゝり。「頓に」は急に、早速。「入道」は、入道して淨海と號した清盛の事。「相國」は太政大臣。「二位殿」は從二位平時子。「臆す」はおぢける。

（三一）煩悶　中低、弱、緩

○陣頭に立つては百萬の敵を物とも思はぬ英雄も、病氣は如何ともすることが出來ない。ようだいは時々刻々に惡くなつて行く。醫師は皆、投藥してもし萬一の事があれば、毒殺のうたがひを受けはしないかと恐れて、たゞ經過を見守つてゐるばかりである。（十の二）

○木陰からじつと見てゐた彼は、しみじみと自分の身の上に思ひくらべて、農夫や牛の勞苦を思ひやると共に、蟲の運命をあはれんだ。彼はだん〳〵物思に沈むやうになつた。（中略）彼は城外に出る毎に、杖にすがるあはれな老人や、息もたえ〴〵の病人、さては野邊に送られる死者をまのあたり見て、益々世のはかなさを感じた。「人は何の爲に此の世に生れて來たのか。我々の行末はどうなるだらうか。」こんな事を次から次へと考へて、遂に心の苦しみに堪へられなくなつた。（下略）（十二の十九）

（三二）疑惑　中低、弱、緩

○「いやいや、おかへし申したら、まはず に 空 へ お上り に なりませう。」（三の廿六）

○大きな虎が山おくで、「どうも分らないのは、あの弱い人間がわれわれの仲間を生けどりにすることだ。」とひとりごとを言ひました。（六の八）

○壯年の頃鷹狩に出で、雨にあひて、とある民家に入り、雨具を借らんとするに、少女出で來りて、一言の答もなく山吹の花一枝を差出す。持資其の意を解せずして歸りしが、後或人の語りて、（下略）（高一の二）

（三三）優柔　中、弱、緩

○人々はかやうにし給へども、大臣殿父子（平宗盛と清宗と）はさもし給はず。舷に立ち、四方見廻しておはしければ、平家の侍ども、あまりの心憂さに、側をつと走り通るやうにて、先づ大臣殿を海へかばと突き入れ奉る。これを見て右衞門の督（清宗）やがて續きて飛入り給ひぬ。人々は鎧の上に重き物を負ひたり抱きたりしたりして入ればこそ沈め、この人親子はさもし給はず、なまじひに水練の上手にておは

（三一）煩悶
アレクサンドル大王と醫師フィリップ

釋迦

（三二）疑惑
はどろも

虎と蟻

太田道灌

（三三）優柔
宗盛父子の生捕り

しければ、大臣殿は、右衞門の督沈まば我も沈まん、助からば我も共に助からんと思ひ、互に目を見かはして、彼方此方へ泳ぎありき給ひけるを、伊勢の三郎義盛、小舟をつと漕ぎよせて、先づ右衞門の督を熊手にかけて引上げ奉る。大臣殿いとゞ沈みもやり給はざりしを、一所に取上げ奉つてけり。（平家物語）

〔註六七〕「なまじひに」はなまじつか。「伊勢の三郎義盛」は源氏方の武士。

（三四）秘密　低、弱、中緩

萬じゆの姫

○萬じゆは其の夜ひそかにうばをつれて、石のらうをたづねました。八幡樣の御引合はせか、門の戸は細めに明いて居りました。うばを門のわきに立たせて置いて、姫は中にはいりました。月の光にすかして、あちらこちらさがしますと、松の一むら立つてゐる中に、石のらうがありました。萬じゆがかけよつて、らうのとびらに手をかけますと、「たれか」と、らうの中から申しました。萬壽はとびらのすきから手を入れて、「おなつかしや、母樣。木曾の萬じゆでございます。」（下略）（六の十五）

畫師の苦心

○或夜小僧、住持の居間に來りて、「彼處に行きて、彼の畫師のする樣を見給へ。」とさやきければ、住持ひそかに行きて見るに、畫師は障子に身を寄せて、樣々に姿を變へつゝ寢起する樣なり。さまたげせんも心なしと思ひて、住持は其のまゝ寢間に入れり。（十一の十一）

（三五）羞恥　中低、弱、緩

水兵の母

○村の方々は、朝に夕にいろ〳〵とやさしく御世話下され、『一人の子が御國の爲いくさに出でし事なれば、定めて不自由なる事もあらん。何にてもゑんりよなく言へ。』と、親切におほせ下され候。母は其の方々の顏を見る毎に、そなたのふがひなき事が思ひ出されて、此の胸は張りさくるばかりにて候。（九の廿四）

のぶ子さんの家

○お暇してから、私はひとりで歩きながら自分の始末のわるいことを考へて、つく〴〵恥づかしくなりました。（十一の五）

綱引

○之を見之を聞いた僕は、同胞の勝利をさも自慢げにをどりはねて喜んだのが、今更恥づかしくなつた。（高一の廿）

阿閉掃部

○「さても唯今の御物語を承り、今更昔を思ひ出で、涙を落してこそ候へ。其の時の御相手になり候ふ青木新兵衞は、恥づかしながら我等にて候ふ。斯く申すばかりにては、浮きたる事に思すべく候ふ。」（高三の十四）

（三六）懺悔　中高、中、中急

虎と蟻

○虎はうん〳〵うなつて、かけまはるより外、どうすることも出來ません。とう〳〵

弱つて、蟻にあやまつたと言ひます。（六の八）

○さて番人どもは、吳鳳を神にまつつて、其の前で、此の後は決して人の首を取らぬとちかひました。さうして今も其の通りにしてゐるのだといひます。（八の六）

○「わたしが惡かつた。おかあさんの精神は感心の外はない。お前の殘念がるのももつともだ。（下略）」（九の廿四）

○太郎はつく〴〵と自分の惡かつた事を後悔すると共に、「はい。」と「いゝえ。」の言ひにくいわけをさとることが出來た。（十の十七）

吳鳳
水兵の母
言ひにくい言葉

（三七）柔和　中低、弱、中

○オチヨガ　オキヤクニ　ナツテ　キマシタ。「ゴメン　クダサイ。」「オチヨ　サン　デスカ、ヨク　イラツシヤイマシタ。」オハナ　ハ　オチヨ　ヲ　ザシキ　ヘ　トホシテ　オチヤ　ト　オクワシ　ヲ　ダシマシタ。「ドウゾ　オアガリ　クダサイ。」「アリガタウ　ゴザイマス。」（二の二）

○最後に目つきのやさしい老紳士が言つた。「私は公爵ウェリントンだ。よい子だから私の頼をきいてくれ。」（十一の廿六）

（三八）仁慈・親切　中低、弱、緩

（三八）柔和
オキヤクアソビ
ウエリントンと少年
（三八）仁慈
親切

○神樣ハ「ソレハ　カハイサウダ。早ク　川ヘ　行ツテ、シホケノ　ナイ　水デ　カラダヲ　アラツテ、ガマノホヲ　シイテ、ソノ　上ニ　コロガレ。」ト　ヲシヘテ　下サイマシタ。（四の五）

○人夫は之を見て、「おやめなさい。あなたから一文でももらふ氣があるくらゐなら、此所まで持つて來はしません。さあ、道を急ぎなさい。私は渡場へ歸つて人を渡します。」（七の十七）

○鐵眼此の狀を目擊して悲しみにたへず。つら〳〵思ふに、「我が一切經の出板を思ひ立ちしは佛敎を盛にせんが爲、佛敎を盛にせんとするは、ひつきやう人を救はんが爲なり。喜捨を受けたる此の金、之を一切經の事に費すも、うゑたる人々の救助に用ふるも、歸する所は一にして二にあらず。一切經をひろむるはもとより必要の事なれども、人の死を救ふは更に必要なるに非ずや。」と。すなはち喜捨せる人々に其の志を告げて同意を得、資金を悉く救助の用に當てたりき。（十一の廿八）

（三九）安寧　中、弱、中緩

○「山の中でも、三軒家でも、住めば都よ、わが里よ。」木びきの力藏さんがうたをうたひながら、大きなのこぎりで板をひいてゐました。何の木か、おがくづが大そう

百ウサギ
安倍川の義夫
鐵眼の一切經
（三九）安寧
きのこ取

よくにほつてゐました。にいさんが「今日は」と言つて、「此の邊に、しめじの出る所はありませんか。」とたづねると、「さあまだ早いかも知れないがね。」と言つて、栗林の下のくぼ地を敎へてくれました。（六の四）

孔明

○白雲いう〳〵去り又來る。西窓一片殘月あはし。うき世をよそなるしづけき住居。出でては日毎畑を打ち、入りては机に書をひもとく。」（十一の廿四）

（四〇）優美　中、弱、中

奈良

○そのかみ金殿玉樓相望みてうちつゞく都大路を、大宮人の櫻かざし紅葉かざして往來しけん、今にして思へば唯一場の夢に過ぎず。（中略）げにや「めぐらせる青垣山に、こもれる大和うるはし。」と歌ひしにそむかず。愛すべく美しき山野は、更に太古以來の歷史と結び文學と結びて、感いよ〳〵深きを覺ゆ。（十二の廿）

春晴千里

○打續く晴天に、都の人々は春にあこがれて、西へ東へと群行く。さし續けたる日傘は、橋の欄干と共に水に影を落せり。花に誘はれて佛に詣で、佛に導かれて花を見る客、今日も清水觀音の堂前を滿たしぬ。舞臺の上より見下す人、舞臺の下に咲き誇る花、恰も一幅の四條畫なるに、老婆は此の間に立ちて、「わらび餅めせ。」など呼ぶ。（高三の一）

木の花は

○木の花は、梅。濃くも薄くも紅梅。櫻の花びら大きに、葉色濃きが、枝細くて咲きたる。藤の花、しなひ長く、色よく咲きたる、いとめでたし。卯の花は、品劣りて何となけれど、咲く頃のをかしう、時鳥の蔭に隱るらむと思ふに、いとをかし。祭のかへさに、紫野のわたり近き、あやしの家ども、おどろなる垣根などに、いと白う咲きたるこそをかしけれ。四月のつごもり、五月ついたちなどの頃ほひ、橘の濃く青きに、花のいと白く咲きたるに、雨の降りたるつとめてなどは、世になく心あるさまにをかし。花の中より、實の黃金の玉と見えて、いみじく際やかに見えたるなど、朝露にぬれたる櫻にも劣らず。（枕草子）

〔註六八〕「木の花は」は、「梅」以下にも係る語なり。「蔭に隱る」は、人麿の歌に「なく聲をえやはしのばぬ時鳥、さく卯の花の蔭にかくれて。」「祭」は、四月中旬に行はるゝ賀茂神社の「葵」祭。「紫野」は、京都の一條の北郊にある野。「あやしの家」は、賤しき民家。

（四一）慷慨　中高、强、中緩

武將の幼時

○賴宣は顏色をかへて、「やあ、正綱、十四歲の時が二度あるか。」といつた。（八の四）

水兵の母

○水兵は驚いて立上つて、しばらく大尉の顏を見つめてゐたが、やがて頭を下げて、「それは餘りな御言葉です。私には妻も子もありません。私も日本男子です。何で命

を惜しみませう。どうぞ之を御覽下さい。」と言つて、其の手紙を差出した。(九の廿四)

○此の頃備前に兒島高德といふ武士あり。主上さきに笠置におはせし時早くも義兵を擧げしが、(中略)今主上隱岐にうつされ給ふと聞き、高德一族を集めていへるやう、

「義を見てせざるは勇なきなり。いでや、行幸の路に待受け君を奪ひ奉りて義軍を起さん。」と。心ある者ども何れも同意しければ、さらばとて備前と播磨との境なる舟坂山にかくれ、今か／＼と待ち奉れり。(十の廿七)

兒島高德

(四二)勇武・豪邁　高、强、中緩

(四二)勇武豪邁神風

○此の時河野の通有は、たつた小舟二そうで向つた。敵ははげしく射立てた。味方はばた／＼とたふれた。通有も左のかたを射られたが少しも屈せず、刀をふるつて進んだ。いよ／＼おしよせたが、敵の船は高くて上ることが出來ない。通有はほぼしらをたふして、之をはしごにして、敵の船へをどりこんだ。味方は後から／＼とつゞいた。さん／＼に切りまくつて、其の船の大將を生けどりにして引上げた。(六の廿一)

○兩軍は入りまじつて、火花をちらして戰つた。謙信は馬に一むちくれて、信玄の本陣に切りこみ、大太刀をふりかざして、信玄に打つてかゝつた。信玄は刀をぬくひまがない。ぐんぱいうちはでふせいだが、えが折れて、肩先へ切りつけられた。信玄の家來は(中略)力一ぱいに謙信の馬をなぐりつけた。馬はおどろいてとび上つたので、信玄はあぶない所を助かつた。(七の十四)

川中島の戰

○あたりの靜けさを破つて、大砲の音がとゞろき始めた。中尉はひらりと北風(乘馬の名)にまたがつて、亂れてゐたたてがみをそろへ、くびすぢを輕くたゝきながら、

「おい北風、今日は大分手ごたへがあるぞ。しつかり賴むよ。」と、まるで人間に言ふやうに言つた。北風は、主人の手がかうしてくびすぢにさはるのが何より好きだつたから、うれしくて、得意さうに頭を高くあげた。(九の廿二)

北風號

○さる程に犬塚信乃は、侮りがたき現八が、武藝に敵を得たりけり、と思へば勇氣彌倍して、刀尖より火出づるまで、寄せては返す太刀音懸聲、兩虎深山に挑むとき、錚然として風起り、二龍青潭に戰ふとき、沛然として雲起るも、斯くぞ有るべき。春ならば峰の霞か、夏ならば夕の虹か、と視る計りなる、いと高閣の棟にして、死を爭ひし體たらく、世に未曾有の晴業なれば、現八は着込の鎌、肱盾の端を裏搔くまでに、切り裂かれしかど、太刀を拔かず。信乃は刀の刃も續かで、初に淺痍を負ひしより、次第に疼みを覺ゆれども、足場を揣りて撓まず去らず、疊みかけて擊つ太刀を、現八右手に受け流して、返す拳につけ入りつゝ、やつと懸けたる聲と共に、眉間

芳流閣上の拾闘

を望みてはたと打つ、十手を丁と受け留むる、信乃が刄は鍔際より、折れて遙かに飛び失せつ。現八得たりとむづと組むを、そがまゝ左手に引きつけて、迭に利腕しかと拿り、捩ぢ倒さんと曳聲合して、もみつもまるゝ力足、此彼齊しく踏み辷らして、河邊の方へころ〳〵と、身をまろばせし覆車の米苞、坂より落すに異ならず。高低險しき棧閣に、削り成したる甍の勢、止るべくもあらざめれど、迭に拿つたる拳を緩めず、幾十尋なる屋の上より、末遙かなる河水の、底には入らで程もよし、水際に繫げる小舟の中へ、うち累りつゝどうと落つれば、傾く舷と立つ浪に、ざんぶと音す水煙、纜丁と張り斷つて、射る矢の如き早河の、眞中へ吐き出されつ。しかも追風と引潮に、誘ふ水なる下り舟、往方も知らずなりにけり。（八犬傳）

〔註六九〕八犬傳は、江戸の瀧澤馬琴が南總の里見氏の八犬士を構へ、それが、足利氏の時に里見氏の復興をたすけた事を叙した歷史小說である。儒教の八德、仁義禮智、忠信孝悌を、犬江親兵衞仁・犬川莊助義・犬村大角禮儀・犬阪毛野胤智・犬山道節忠・犬飼現八信道・犬塚信乃戌孝・犬田小文吾悌順の八犬士に配し、勸善懲惡を旨としてある。この一節は、信乃が村雨丸の寶刀を古河の足利成氏公に獻じに參り、圖らずも現八と格闘に及んだ所である。

「芳流閣」は、足利成氏公の城郭內に在り、要害の物見の爲に建てられた三層の樓閣。八犬傳に「外濠は渺々たる大河にして、流れを閣の下に引きたる、水際に早船をつなぎたり。こは世に阪東太郎と稱へて、八州第一番の大河たり」とある。犬塚信乃は、亡父の番作が前に鎌倉の足利家から預つてゐた村雨丸の寶刀を、惡者にすりかへられた事を知らず、古河へ持參したのは、蟹の村雨丸であつたので、敵の廻し者と誤解されて、捕縛の仰せが下り、そこで芳流閣の屋の棟で、犬飼現八と格闘に及び、組討の果は閣の下の早船に落ちて、兩勇士共に下總の行德へ流れ行き、犬田小文吾の父に助けられて、互に身の上を語り合つて兄弟の義を結ぶことになる。「十手」は、鐵の短い棒の中程に鉤のあるもので、犯罪者を捕へる時に之を以て打つ道具である。「曳聲」は、「えい」と云ふ掛けごゑ。「やつと懸け」「はたと打つ」「丁と受け留む」「ころ〳〵と身をまろばす」「どうと落つ」「ざんぶと音す」「丁と張り斷る」などには、聲喩を用ひてある。

（四三）壯烈　高、强、急

○（一）とゞろく砲音、飛來る彈丸。荒波洗ふデッキの上に、やみをつらぬく中佐の叫。

「杉野はいづこ、杉野は居ずや。」（二）船內くまなくたづぬる三度、呼べど答へず、さがせど見えず、船は次第に波間に沈み、敵彈いよ〳〵あたりにしげし。（八の廿四）

○元の皇帝深く文天祥を惜しみ、ねんごろに諭して元に仕へしめんとす。天祥いはく、

「我は宋の臣なり。いづくんぞ二朝に仕へんや。願はくは我に死をたまへ。」と。帝其の志の動かすべからざるを知り、之を刑場に送らしむ。（十の十八）

（四四）祈願　低、中、中急

（四三）壯烈　廣瀨中佐

文天祥

（四四）祈願

鎌倉攻

○義貞は馬から下りて、かぶとをぬぎ、はる〳〵と海上を拜しました。さて、心の中に、義貞今天皇の御ためにいくさを起して、賊臣北條をほろぼさうとしてゐます。海神ねがはくは潮を退けて、道を開かせたまへと念じて、黄金作りの太刀を取つて、海の中に投入れました。（七の六）

眞の知己

○ピチアスは今生の思出に、老父母の顏が見たくてたまらない。死刑執行の日には必ず歸つて來るから、此の世の名殘に、今一度父母に會はせてもらひたいと願ひに及んだ。王は一言の下にはねつけた。ピチアスの無二の親友に、ダモンといふ若者があつた。王に向つて、「私はピチアスの親友でございます。彼は決して二言致すやうな者ではございません。どうか特別の御仁愛を以て彼の願をお聞入れ下さるやう御願ひ申します。其の代りに私を獄中に入れて、萬一期に至つて彼が歸つて參りませんやうなことがございましたならば、私をおしおき下さいませ。」と願つた。王は此の友情に感じて、其の願意を聞き屆けて、ダモンを獄屋に入れた。（高一の十三）

扇の的

〔注意〕この「ピチアス」の一節は、一二七ページの歎願の一例が此處に紛れ込んだのである。

○與一目をふさいで「南無八幡大菩薩、別しては我が國の神明、日光の權現、宇都の宮、那須の湯泉大明神、願はくは、あの扇の眞中射させてたばせ給へ。これを射損ずるものならば、弓きり折り自害して、人に再び面を向ふべからず。今一度本國へ歸さむと思しめさば、此の矢はづさせ給ふな。」と心の中に祈念して目を見ひらいたれば、風も少し吹きよわつて、扇も射よげにこそなつたりけれ。（平家物語）

〔註七〇〕「南無」は、佛に祈る時冒頭に用ひる語、當時は神佛混合で、神に向つても「南無八幡大菩薩」と稱へたのである。「我が國」は、與一の生國下野をいふ。「那須の湯泉大明神」は、與一が故鄕の鎭守の神。「たばせ給へ」は「たまはせ給へ」の意。

（四五）忠實・熱誠　中、强、中急。

（四五）忠實熱誠　一太郎やあい

○日露戰爭當時の事である。軍人をのせた御用船が今しも港を出ようとした其の時、「ごめんなさい。〳〵。」といひ〳〵、見送人をおし分けて、前へ出るおばあさんがある。（中略）御用船を見つけると、「一太郎やあい。其の船に乘つてゐるなら、鐵砲を上げろ。」〔七一〕とさけんだ。すると甲板の上で鐵砲を上げた者がある。おばあさんは又さけんだ。「うちのことはしんぱいするな。天子樣によく御ほうこうするだよ。わかつたらもう一度鐵砲を上げろ。」〔七一〕すると、又鐵砲を上げたのがかすかに見えた。おばあさんは「やれ〳〵。」といつて、其所へすわつた。聞けば今朝から五里の山道を、わらぢがけで急いで來たのださうだ。（七の十三）

〔註七一〕「忠實・熱誠」の調子は、一般には前に記した如くだが、この場合に、遠く御用船に向つて

大下藤吉郎

呼びかける所は、特に聲高く讀むこと。

○「寒からうが。」「少しも寒くはございません。」「寒くはない。」「はい。これが御奉公だと思ひますれば、少しも寒くはございません。」（七の十八）

五代の苦心

○「此の四代の苦心の後を受けて、國家の爲に、此の學問を大成するのが、お前の役目だ。（中略）それにはわたしが死んでも國へ歸らずに、すぐに江戸へ出て、りつぱな學者を先生にして、一心に學問をはげむがよい。古人も『志ある者は事終に成る。』と言つてゐる。」目に涙を一ぱいためて聞いてゐた少年は、固い決心を顏にあらはして、實行をちかつた。（九の六）

勝安芳と西郷隆盛

○「拙者の考へる所では、今日日本の周圍には諸外國が樣々の考を以て見てをるので、うか〳〵と兄弟垣にせめいでゐたら、日本全國にのしをつけてどこぞの國にやつてしまふやうな事にならぬとは決して申されませぬ。之に比べれば、幕臣の身として如何がな申分ではあるが、德川家の存亡などは言ふにも足らぬ小事でござります。」（十二の廿六）

中吉の誠實

○「いさゝか思ふところ侍れば、暫しの暇賜はりたし。これより浪華に赴きて、主家を再興すべし。願はくば之を元手とし、暫く此のあたりに小商して待ち給へ。」（高三の廿）

○京勢雲霞の如く、淀・八幡に着きぬと聞えしかば、楠木帶刀正行・舍弟正時、一族打連れて、十二月二十七日吉野の皇居に參じ、四條中納言隆資を以て申しけるは、父正成麁弱の身を以て、大敵の威を碎き、先朝の宸襟を休め進らせ候ひし後、天下程なく亂れて、逆臣西國より攻め上り候ふ間、危きを見て命を致す處、かねて思ひ定め候ひけるかに依つて、遂に攝州湊河にして討死仕り候ひ訖んぬ。その時正行十一歳に罷り成り候ひしを、合戰の場へは伴なはで、河內へ歸し、『死に殘り候はんず る一族を扶持し、朝敵を亡し、君を御代に卽け進らせよ。』と申し置きて死して候ふ。然るに正行・正時己に壯年に及び候ひぬ。この度我と手を碎き、合戰仕り候はずば、且は亡父の申しし遺言に違ひ、且は武略のいふ甲斐なき謗に落つべく覺え候ふ。有待の身思ふに任せぬ習ひにて、病に犯され早世仕る事候ひなば、只君の御爲には不忠の身となり、父の爲には不孝の子となるべきにて候ふ間、今度師直・師泰に懸け合ひ、身命を盡くし合戰仕つて、彼等が頭を正行が手に懸けて取り候ふか、正行・正時が首を彼等に取られ候ふか、その二つの中に戰の雌雄を決すべきにて候へば、今生にて今一度君の龍顏を拜し奉らんために、參內仕つて候ふ。」と申しも敢へず、涙を鎧の袖にかけて、義心その氣色に顯れければ、傳奏未だ奏せざる先に、まづ直衣

の袖をぞ濡らされける。（太平記）

〔註七二〕　正平二年吉野勢との兩度の合戰に、京勢が大に敗れたので、尊氏は驚いて、高師直・師泰兄弟を兩大將とし、都合九萬餘の大軍を南下させた。この危急の時に當り、楠木正行以下深く決する所あつて、吉野の皇居に參內したのである。「雲霞の如く」は、夥く群るたとへ。「淀・八幡」は、共に山城の內。「尪弱」は虛弱。「先朝の宸襟」は、後醍醐帝の大御心。「逆臣」は尊氏をさす。「我と手を碎く」は、自ら努力する意。「有待の身」は、凡夫の身の意、法華經科註に「初心有待」とある。「戰の雌雄」は勝敗。「君の龍顏」は、陛下の御尊顏の意。「傳奏」は、武家の奏問を取次ぐ職。「直衣」は、四位以上の制服。

（四六）　確信　　中高、强、中

○孔子は正義の念强き人なりき。其の言にいはく、「富貴は人のねがふ所なり。然れども正しき道によるに非ざれば、我之に居らず。貧賤は人のいとふ所なり。然れども正しき道によるに非ざれば、我之を去らず。」と。孔子常に中正不偏を貴び、「中庸は德の至れるものなり。」といひ、「過ぎたるは及ばざるが如し。」ともいへり。又きはめて學問に熱心にして、其の好學の念の切なる、「朝に道を聞くことを得ば、夕に死すとも可なり。」といふに至れり。（十一の二）

○「此の上は聖賢を訪うて敎を受ける外はない。」と思ひ立つに至つた。（中略）彼は更に其の邊の名高い學者を尋ね廻つて說を聽いたが、どれにも滿足することが出來ない。彼は遂に「もう人にはたよるまい。自分一人で修行をしよう。」と決心して、或靜かな森へ行つた。（中略）彼は夜もすがら靜坐してひたすら思をこらしてゐると、やがて一點の明星がきらめいて、夜はほの〴〵と明けそめた。其の刹那、彼は迷の雲がからりと晴れて、はつきりとまことの道を悟り得た。（十二の十九）

○眞の永生は名によりて、生くるにあらずして、事によりて生くるなり。儒敎の存する所、今なほ孔子あらざるはなく、佛寺の建つ所、到る處に釋迦あり。耶蘇は十字架にかゝれりと雖も、今なほ基督敎徒の命なり。楠公の事績に感激する者の胸には楠公其の人の生命あり。蒸氣機關の動く所には、ワットの血液あり、電氣の線のかゝる所は、卽ちフランクリンが永生の地にあらずや。まことの永生は、時と共に深さを加へ、人と共に廣さを加ふ。されば一人の精神は千萬人の生命となり、河より海に、海より陸に、蕩々汨々として遂に世界を動かさずんば已まざるべし。現在の文明は斯の如き幾多永生の結果に外ならざるなり。（樗牛全集）

〔註七三〕　永生は永久の生命。この文は、評論家高山樗牛の「死と永生」の一節である。「蕩々」は水勢の盛な形容。「汨々」は水勢の疾き形容。

六　詞藻と表出法

〔四七〕詞藻とは、美辭學において、詞をあやなす方法をいふ。例へば「樂しい」といふ直說法は、「極樂のやうだ」の直喩法、「極樂だ」の隱喩法、「樂しい樂しい」の反覆法、「なんと樂しいぢや無いか」の設問法、「あゝ樂しい」の感歎法など、樣々の詞藻に變ぜられる。詞藻は英語に Figures of speech といひ、これを詞姿などとも譯する。

〔註七四〕國書には島村瀧太郎著「美辭學」、五十嵐力著「新文章講話」などの良著があり、洋書には種々ある中に、Genug: "Practical Elements of Rhetoric" などの新良著がある。

詞藻は、文章の效力と趣味とを增すために極めて大切なものであるから、之を朗讀するのに格別の注意を要する。これまでにも所々に詞藻に觸れて朗讀の方法を說いたが、此の章には、詞藻の朗讀において注意すべき諸點を揭げて見よう。

直喩法

直喩法は「ちやうど」「まるで」「恰も」「さながら」「譬へば」「やうだ」「如し」「似たり」「如」などの語を用ひた譬喩であり、通例は、その前後より高くないやう、むしろ稍低く譬喩の心持で讀むこと。

○アレアレ　アガル、ヒカウキ　ガ。大キナ　トビ　ガ　トブ　ヤウ　ダ。（また倒置法）（二の廿四）

○人が黑山のやうに集つてゐました。（五の七）

○右手に、まんぢゆう笠をふせたやうな塚がある。（七の七）

○艦內は深山のやうな靜かさである。（九の十五）

○滿天の星は、寶石をちりばめたるが如し。（九の十九）

○京城の市街が、まるで繪のやうに見えます。（十の十三）

○天下を定むる三分の計、たなそこの上に指さすがごと。（十一の廿四）

○やさしい沈んだ調は、ちやうど東の空に上る月が次第々々にやみの世界を照らすやう、一轉すると、今度は如何にももものすごい、いはゞ奇怪な物の精が寄集つて、夜の芝生にをどるやう、最後は又急流の岩に激し、荒波の岸にくだけるやうな調に、三人の心はもう……（十二の九）

○國運の隆昌、さながら旭日昇天の勢あるを思はしむ。（十二の十三）

○一天かき曇りて、强風吹きすさび、黑雲空をかすめて飛びちがふ樣は、蛟龍の玉を爭ふが如く、天馬の空を驅くるが如し。（高三の十一）

○驕れる者久しからず、只春の夜の夢の如し。猛き人も遂には亡びぬ、偏に風の前の塵に同じ。（平家物語、祇園精舍）

○天の下四方の國には、罪といふ罪はあらじと、科戸の風の、八重雲を吹き放つ事の如く、朝の御霧夕の御霧を、朝風夕風の吹き掃ふ事の如く、……（六月晦大祓の祝詞）

○くらげなす（くらげの如く）たゞよへる時に、（古事記、神代）

こゝに似て非なる所の示例法がある。示例法は直喩法の如き譬喩ではなくて、實例を示すものであるから、「例へば」「如し」などの語を用ひてあつても、之を混同してはならぬ。

示例法

その實例の語は重念すること。

○豐太閤の如き、ナポレオンの如きは英雄である。

○例へば淺間山・阿蘇山の如きは活火山なり。

隱喩法

隱喩法は、直喩法と異なるのは、譬喩だと明示しないだけであるから、その讀みやうは直喩法と等しくすること。

○にはとりが、俵の山へ上つてときを作りました。（六の一）

○ふとん着て、ねたるすがたや東山。（六の二）

○八重の高潮かちどき揚げて、海の誇のあるところ。（十二の十六）

○彼は迷の雲がからりと晴れて、まことの道を悟り得た。（十二の十九）

○「へ」の字「ろ」の字の跡をつけて、まだ興が盡きねば、雪ころがし、雪だるま、雪合戰。（高一の十）

○世界最大の帝國となつたローマも、二葉の芽生で摘取られたかも知れなかつた。（高二の六）

○たとへ天賦の才ありとも、磨かずば玉も瓦石に等しからん。（高二の八）

○四方臺附近の敵を擊破し、天馬空を行くの勢を以て北進し、（高二の廿八）

○雲霧は黃龍となり、波の花となり、蛸の脚となり、赤犬の頭となつて、はては跡もなく消えてしまふ。（高三の八）

○松下村塾は、德川政府顚覆の卵を孵化したる保育場の一なり。（德富蘇峯、吉田松陰）

○世は海なり、身は船なり、志は梶なり。（貝原益軒、大和俗訓）

○弟の時房と泰時といふ一男と、二人を頭として、雲霞のつはものをたなびかせて都に上す。（增鏡）

諷喩法は、或物事を言つて、實は他の物事を諷するのだから、要點の語を重念し、それとほのめかして讀むこと。

○花　より　だんご。（四の十二）

○おに　に　かなぼう。（四の十二）

○コロンブスは、つと立つて、食卓の上のうで卵を取り、「諸君、こゝろみに此の卵を卓上に立てゝごらんなさい。」といひました。人々は……（八の廿）

○七重八重花はさけども山吹の、みの（實の、簑）一つだに無きぞ悲しき。（醍醐天皇の皇子兼明親王）（少女も亦この歌の意をかりて太田道灌に諷したのである）（高一の二）

○太平の眠をさます上喜撰（茶名、蒸氣船）たつた四杯で夜もねられず。（黑船が浦賀に來た頃の狂歌）

○鶯（みそさゞい）深林に巢くふ、一枝（はつかねづみ）に過ぎず。偃鼠河に飲む、腹に滿つるに過ぎず。（莊子、逍遙遊）

提喩法は、物事の一部分を以て全體を提示する言ひ方であり、換喩法は、或物事を他の物事に換へて示す言ひ方である。それで、共に要點の語を重念し、本義の心持で讀むこと。

一、提喩法の例。

○先づいかりをあげ（船を發し）て港を出て行きますと、（七の十六）

○いそがしき時に、手の足らずといふは、働く人の少きをいふなり。（八の八）

○ナポレオンは双に血ぬらず（戰はず）してバリーに入り、（高三の十）

○白いの（雪）がちら〳〵降る。（小栗風葉、世間師）

○君は春秋（御年）に富み、臣は漸く老いたり。（菅原道眞の詩句）

二、換喩法の例。

○彼のまぶたにつゆ（涙）ありき。（八の十五）

○藷屋（いも）ノ看板ニ、八里半ト記セルモノノ如キハコレニシテ、其ノ味クリニ近シトイフ意ナリ。（八の十六）

○名古屋市ハ我ガ國屈指ノ（有數ノ）大都會ニシテ、（八の廿三）

○「すはや、宮には御自害ぞ。御しるし（御首）得ん。」と敵兵ばら圍亂（かこうみだ）して集（つど）ひ寄る。（高二の廿二）

○持傳へたる道具の類を煙（生活）の代（しろ）となしつゝ（高三の廿）

○海上には海賊多くして、舟人白浪（盜賊）の難を去り兼ねたり。（太平記、高麗人來朝）

聲喩法は、實際の物の聲に擬し、または物事の狀態を聲に表はしたものであるから、實際に似通ふやうに讀むこと。

（ウシワカマル　ハ　ヒラリト　ランカン　ヘ　トビアガリマシタ。（二の四）

○コンド　ハ　キツネ、コン　コン。（二の十八）

○ケサ　ウグヒス　ガ、ホウホケキヨウ　ト　ナキマシタ。（二の廿三）

○テフテフ　ハ　ヒラヒラト　マヒ、ハチ　ハ　セツセト　ミツ　ヲ　アツメテ　キマス。（三の一）

○エントツ　カラ　ムクムクト　マツクロナ　ケムリ　ガ　デマス。（三の二）
○ザブザブ　オチル　水　ノ　オト、トントン　ヒビク　キネ　ノ　オト、ソノ　ニ
ギヤカナ　中　カラ、「シゴト　ナサレ　ヨ、キリキリシヤント、カケタ　タスキ
ノ　キレル　ホド。」（三の十一）
○目　ヲ　見ハツテ　キヨトキヨトシテ　居ル　バカリ　デス。（四の九）
○僕は木の上から見て、びく〳〵してゐた。（五の廿一）
○ゐろり火はとろ〳〵（六の十四）
○この太い足で、どさり〳〵と歩きます。（六の廿二）
○トンテンカン、トンテンカント、毎朝暗イウチカラ、弟子ヲ相手ニ打ツツチノ音ガ
聞エマシタ。（七の十五）
○何時の間にか、ぐつすりねこんでしまひました。（八の十一）
○ほのぼのと東の窓はしらみけり。（九の一）
○やがてすや〳〵と眠つた。（九の六）
○さん〳〵、さん〳〵。朝から麥を打つ音が方々で聞える。（九の十四）
○すご〳〵と立去る僧の後影（十の十二）

○うね〳〵と續く岡が雨に煙つて、ぼんやりと遠く見える。（十一の九）
○さえたはさみの音がちよきん〳〵と聞える。（十二の五）
○ばた〳〵とかけ出し、聲の聞えない處まで來て、やうやくほつとして、なみの足ど
りになる。（高一の三）
○春の海ひねもすのたり〳〵かな。（蕪村）（高二の十五）
○あれ松蟲が鳴いてゐる。ちんちろ〳〵ちんちろちん。（唱歌）
○コロはてなリンははあシヤンこゝだわい。（川柳）（平家物語、小督局のかくれがを仲國が月夜に
尋ねて行つた所）
○誕生日祝ふ頃ほひより、ちよち〳〵あわゝ、天窓てんてん、かぶり〳〵振りながら、
同じ子供の風車をほしがる。（一茶、おらが春）
○駒もとゞろと踏み鳴らす、瀨田の長橋打渡り、（太平記、東下り）

なほ國語や漢文などには、聲喩の語が多くある。漢文の聲喩をいへば、「春色駘蕩」「秋風颯々」「櫻花爛漫」「蟲聲唧々」「車聲轔々」「鞭聲肅々」「光彩陸離」「山岳峥嶸」「喋々而辯」「不要呶々」の如きである。

擬人法は活喩法ともいひ、人體の部分、人外の生物又は無生物を人に擬したものである

から、その意にかなふやうに情を含めて讀むこと。

○大きな かめ が 出て きて、「うらしま さん、この あひだ は ありがたうございました。……」(三の十四)

○あたま を 雲 の 上 に 出し、四方 の 山 を 見おろして、かみなりさま を 下 に きく、ふじ は 日本一 の 山。(三の廿五)

○今に 見て ゐろ、僕だつて、見上げる ほど の 大木 に なつて 見せずに おく もの か。(四の十五)

○私 は 道ばた の 一本杉 です。もう 二百年 あまり も こゝ に 立つて 居ます。(四の廿)

○月と日と雷が同じ宿屋にとまりました。(六の十二)

○或時、口・耳・目・手・足等が申し合せて、胃に向つていひますには、「僕等は……(八の廿五)

○ねぢは、「自分もほんたうに役に立つてゐるのだ。」と心から滿足した。(十二の十三)

○如何に溫厚なる我が輩(猫)でも、これは看過出來ない。第一自己の邸内で烏輩に侮辱されたとあつては、我が輩の名前にかゝはる。決して退却は出來ない。(高二の七)

○東寺の塔は我を迎へて立ち、賀茂川の水は我を迎へて歌ふ。(高三の一)

○よく日光の見舞ふ家には、醫者は見舞はず。(諺)

○やれ鳴くな、それほど無事で歸る雁。(一茶)

○ちつと居てくれろと撫でる暮(年のくれ)の金。(川柳)

○生醉の禮者(新年の回禮者)を見れば、大道を横すぢかひに春は來にけり。(狂歌、蜀山人)

(注意) 世界各國の童話その他の譬喩譚などに、擬人法を用ひたものが多い。

現寫法は、過去の事をも今現に活動するやうに表現するものであるから、これをその前後より稍强く讀むこと。

○僕 も はたき を 持つて 手つだひました。天じやう を はらふ、たたみを たたく、ひさしうら の くも の す を 取る、勝手 の すす を はらふ、まるで いくさ の やう でした。(四の十七)

○昔美濃の國にまづしい人があります。……或日山の中で、こけに足をすべらせて、うつむけにたふれました。すると酒のにほひがしますので、ふしぎに思つて、見ましたしますと、石の中から酒ににた物がわいてゐます。なめてみると、酒のあぢがいたします。喜んで、それからは毎日その酒をくんで來て、おとうさんに上げまし

た。（五の十五）

○かる、切る、掘る、運ぶ、誰も彼も一心不亂に働くので、仕事は豫想以上にはかどり、九時頃にはもう數坪の地面が新しく開かれた。（十の九）

○昔、アフリカの或港に一そうの船がとまつてゐた時の話である。……喜の聲はどつと起つた。二人の少年はボートに乘せられて歸つて來る。老砲手は大砲にもたれて、無言のまゝじつとそれを見つめてゐる。（十一の十三）

○鞍馬通りの御幸なりければ、彼の清原の深養父が補陀落寺、小野の皇太皇后の舊跡叡覽あつて、それより御輿にぞ召されける。遠山にかゝる白雲は、散りにし花のかたみなり。青葉に見ゆる梢には、春の名殘ぞ惜しまるゝ。卯月二十日餘りの事なれば、夏草のしげみが末を別け入らせ給ふに、始めたる御幸なれば、御覽じなれたる方もなく、人跡絶えたる程も思し召し知られて哀れなり。西の山の麓に一宇の御堂あり。卽ち寂光院是なり。古く造りなせる泉水木立、よしあるさまの所なり。（中略）中島の松にかゝれる藤波の、うら紫に咲ける色、青葉まじりの遲櫻、初花よりも珍しく、岸の山吹咲きみだれ、八重立つ雲の絶間より、山時鳥の一聲も、君のみゆきを待顏なり。法皇之を叡覽あつて、かうぞ遊ばされける。（平家物語、小原御幸）

〔註七五〕「鞍馬通りの御幸」は、文治二年の初夏。建禮門院（安德天皇の御母）の小原の御閑居（京都から三里北の山中にある寂光院の境內）を、鞍馬の山路を經て後白河法皇が御訪問に御幸あらせられること。「清原深養父」は清少納言の祖父に當る歌人。「小野の皇太皇后」は關白藤原敎道の女で後冷泉天皇の皇后。

誇張法

誇張法は、物事を誇大に表現したものであるから、引延して强く讀むこと。

○ちり　つもつて　山　と　なる。（四の十二）

○「私もはらわたがちぎれるやうに思ひました。（五の廿三）

○其の好學の念の切なる、「朝に道を聞くことを得ば、夕に死すとも可なり。」といふに至れり。（十一の二）

稀薄法

○天地もとゞろくばかりに叫ぶ萬歲の聲……（高一の十六）

○かゝる程に宵うちすぎて子の時ばかりに、家のあたり晝の明さにも過ぎて光りたり。（竹取物語）

○とゝのふる鼓の音は、雷の聲と聞くまで、吹き鳴せる小角の音も、敵見たる虎か吼ゆると、諸人のおびゆるまでに、（萬葉集、柿本人麿）

稀薄法は、誇張法とは反對に、物事を實際よりは稀薄に表現するもので、ぼかしともいひ、その前後よりは弱聲で讀むこと。

○おは文字様で（おはづかしう）ございます。

この類に「おすもじ」（鮓の女詞）「そもじ」（そなたの女詞）「かもじ」（髪の女詞）などがある。

○不束ながら、少しは（隨分）心得て居ります。

○泰山鳴動して鼠一匹。

○その膽の小なること豆の如し。

○限ある御事なれば、建久二年二月中旬に、一期つひに終らせ（崩御し）給ひけり。（平家物語、女院御往生）

引用法

引用法は、陽に又は陰に（左の第三・第四・第七・第八・第九の例の如く）他の既成の語句文章を引用するもので、通例は中の高さ強さ速さで讀むこと。

○名古屋市ハ此ノ城アルニヨリテ名高ク、「尾張名古屋ハ城デ持ツ。」ト歌ハレタリ。（八の廿三）

○古人も『志ある者は事終に成る。』と言つてゐる。（九の六）

○盛政は勝つてかぶとの緒をしめ（陰に諺を引用）ざりし油斷を悔いつゝ、俄にやみの中を退却しはじめたり。（十一の七）

○若宮堂の舞の袖、しづのをだまきくりかへし（靜御前の「しづや賤、しづの苧だまき繰りかへし、昔を今になすよしもがな。」の歌を引用）かへしゝ人をしのびつつ。（十二の七）

○しかしたとへにも申す通り、「一寸の蟲にも五分の魂。」（諺）徳川侍のなまくら刀にも少しは切れる所がござりませう。（十二の廿六）

○「蒔かぬ種は生えぬ」といふ諺は、誰でも知つてゐることであるが、……（高一の四）

○或夜ひそかに出づる五月雨の松の月（蓼太の「五月雨や或夜ひそかに松の月」を陰に引用）など、興趣最も深からずや。（高三の十一）

○歌よみは下手こそよけれ、天地のうごきだしてはたまるものかは。（狂歌、宿屋飯盛）

〔註七六〕古今集の序に、歌の德をほめて「力をも入れずして天地をうごかし」とある。

○春はあけぼの、やう〳〵白くなりゆく洗粉に、ふる年の顔を洗ふ初湯の煙、細くたなびきたる女湯の有樣。（浮世風呂、式亭三馬）

〔註七七〕枕草子の開卷第一に「春はあけぼの、やう〳〵白くなりゆく山ぎは少しあかりて、紫だちたる雲の細くたなびきたる。」とある。

枕詞法及び序詞法は、古歌又は古歌の系統の歌文に用ひられることがあるもので、附け

たりの修飾であるから、強く讀まないで輕く讀むこと。

○神風の（伊勢の枕詞）伊勢の內外の宮柱ゆるぎなき世をなほ祈るかな。（高一の一）

○久方の（月の枕詞）月の桂も折るばかり、家の風をも吹かせてしがな。（菅公の母大伴氏）

○浪間より見ゆる小島の濱ひさぎ（以上は「ひさしく」と云ふための序詞）ひさしくなりぬ君に逢はずして。（萬葉集）

○足びきの（山の枕詞）山鳥の尾のしだり尾の（以上は「長々し」の序詞）長々し（本は「長き長」）夜をひとりかもねむ。（百人一首、柿本人麿）

掛詞法は、一語に上と下との意義を兼ね合つてゐるものであるから、その心して稍緩かに讀むこと。

○都をばかすみと共に立ち（旅立つ、かすみ立つ）しかど、秋風ぞ吹く白河の關。（能因法師）（九の十六）

○遠くなり近くなるみ（爲る、鳴海）の濱千鳥、鳴く音に潮の滿干をぞ知る。（古歌）（高一の二）

○さゞなみや志賀の都は荒れにしを、昔ながら（乍ら、長等）の山ざくらかな。（千載集）（高二の廿七）

○これは〳〵とばかり花のよしの山。（安原貞室）

○立ちわかれいなばの山の峯におふる、まつとし聞かば今歸りこむ。（百人一首、在原行平）

○かぞふれば明日は五月のみかの原、けふまづ奈良の都出でつゝ。（藤川の記、一條兼良）

〔註七八〕三日ノ原（瓶ノ原）村は山城の綴喜郡にあり、大和に近い。聖武天皇がこゝに恭仁の京を造營あらせられた。

緣語法は、互に緣故ある語を巧に用ひて歌文をあやなすものであるから、これを重念すること。

○武藏野はかるかやのみと思ひしに、かゝる言葉の花や咲くらん。（高一の二）

○お富士さん、霞のころもぬがしやんせ、雪のはだへが見たうござんす。（同時に擬人法）（狂歌）

○世の中を何のへちまと思へども、ぶらりとしてはくらされもせず。（狂歌）

○奈良法師、栗子山までしぶりきて、いか物の具をむきぞとらるる。（叡山法師の狂歌）（平家物語、劍の卷）（栗子山は、山城の久世郡にある。宇治橋より南西十五町許り。）

○比叡法師、阿波の上座にはかられて、きびしく獄につかれけるかな。（奈良法師の狂歌）（平家物語、劍の卷）（「阿波の上座」は武者の呼名）

口合法

口合法は、語呂合ともいひ、或文句の口調をきねて作つたものであるから、原の文句と同じ口調で讀むこと。

○玄關に席を改めて口上をきく。（白氏文集に曰く「林間煖酒燒紅葉」）（江戸時代の作）

○主人「コレ留、もつと敷居の脇を能く掃けェ。幾ら云つても、掃き落しやあがる。」弟子「アイ。」孔叢「箒千里、これ留が掃かざる所なりだ。（詩經に曰く「邦畿千里、惟民所止」）アハ、、、、留は奥を潤し床は身を潤す（大學に曰く「富潤屋、德潤身」）と云ふから、髮結床の隙には、奥の用をたして水でも汲むがいい。」（浮世床、式亭三馬）

反覆法と重出法

反覆法は、同語又は同文句を引續きくりかへすもので、次のは前のより速度を加へて讀むこと。重出法は、間を隔てゝ同語又は同文句を幾度か出すもので、同語は重念し、同文句は同じ工合に讀むこと。

○フル　フル　ユキ　ガ、マツ白ナ　ユキ　ガ。（二の十五）

○犬　ハ　畠　ノ　スミ　デ、「ココ　ホレ、ワンワン。ココホレ、ワンワン。」ト　ヲシヘマシタ。（二の十七）

○春　が　來た、春　が　來た、どこ　に　來た。山　に　來た、里　に　來た、野にも　來た。（四の廿三）

集合法と分列法

○大日本、大日本、神代此の方一度も敵に……（五の二）

○トンテンカン、トンテンカンと、毎朝暗いうちから……（七の十五）

○さん〳〵、さん〳〵。朝から麥を打つ音が方々で聞える。（九の十四）

○「薪は無いか。薪は無いか。」彼は氣がくるつた樣にそこらをかけ廻つた。（十の九）

○殘れる月の影踏みて……働く身には憂なし。またゝく星を戴きて……働く身には憂なし。（高三の十九）

○雀の子、そこのけ〳〵、お馬が通る。（一茶）

○若草の妹も乘りたりや、アイゾ我も乘りたりや、舟傾くな舟傾くな。（催馬樂、こながどり）

○かあ〳〵烏が啼いて行く。からす〳〵どこへ行く。お宮の森へ、お寺の屋根へ、かあ〳〵烏が啼いて行く。（信濃の童謠による）

○（上略）嗚呼哀しいかな。回顧すれば四十七年前（中略）嗚呼哀しいかな。君の訃電聞す。（中略）嗚呼哀しいかな。（これは、伊藤博文公の國葬の時における井上馨侯の弔辭から）

集合法は、次の第一例の如く、先づ列叙したものを一つに集合するもので、分列法は、第二例の如く、一つの集合から幾つかに分列するものである。その集合又は分列の境目に

は、降調の後に昇調を用ひること。

○小野道風・藤原佐理・藤原行成、之を三蹟といふ。

○近江八景、即ち石山の秋月・勢多の夕照・矢橋の歸帆・粟津の晴嵐・三井の晩鐘・唐崎の夜雨・堅田の落雁・比良の暮雪を遊覽せり。（「石山の秋月」以下の列敍の昇降は、次の列敍法の第四例に準ずる）

列敍法

列敍法は、三以上の體言などを列敍することである。列敍法の昇降は、第一例・第二例及び第三例の如き場合には、昇昇降乃至昇昇昇昇降とする。第四例の如く數多の列敍の場合には、呼吸の都合で便宜中間に降調を挿むこと。（列敍の昇降は必ずしも一定しない）

○一富士・二鷹・三茄子。

○酒井・榊原・井伊・本多は、家康公の四天王なり。

○五倫とは、君臣・父子・夫婦・長幼・朋友を云ふ。

○十惡は、殺生・偸盜・貪欲・愚痴・邪淫・妄語・綺語・惡口・兩舌・瞋恚。

改說法

改說法は即ち言ひ直しである。その言直しの境目には、降調の後に昇調を用ひること。

○敵軍は敗北せり、否、豫定の退却を行へり。

○家に有りたきは梅・櫻・松・楓、それよりは金銀・米穀ぞかし。（西鶴、日本永代藏）

急轉法

急轉法は、或物事を述べてゐる途中、急轉して他の物事を述べるのであるから、その調子も急變して讀むこと。

○これぞ此の國の——おう——富樫の介。（義經千本櫻）

○山の端白くほの〴〵と——あれ寺々の鐘の聲。（近松、天の網島）

倒置法

倒置法は、文の正序を顚倒させた言ひ方であり、その昇降も換ることが多い。

○アレアレ　アガル、ヒカウキ　ガ。（二の廿四）

○しごと　なされ　よ、きりきりしやんと、かけた　たすき　の　きれる　ほど。（三の十一）

○あぶないことだ、もし宗任に惡い心があつたら。（五の廿一）

○よき日は明けぬ、さわやかに。朝日は出でぬ、花やかに。いざ、起出でて、勇ましく我もはげまん、今日の業。（九の一）

○砲音たえし砲臺に、ひらめき立てり、日の御旗。（九の十）

○安ちいさんはせぐくまり、常に何をか刻みゐる、めがねを掛けてはつぴ着て。（九の十八）

○いで、大船を乘出して、我は拾はん、海の富。（十一の十九）

○先づこそ仰げ、村の鎭めといつきまつれる鎭守の宮居。（高二の四）

○月見れば千々に物こそかなしけれ、わが身一つの秋にはあらねど。（大江千里）

○知らず、生れ死ぬる人何方より來りて何方へか去る〔を〕。（方丈記）

○切に望む、諸君の奮つて御賛同有らんことを。

省略法は、文中の語句を省略し、餘韻を含めて中止又は終止するものであり、省略の所に降調を用ひること。

○「オコシ　ノ　モノ　ハ　ナン　デス　カ。」「ニッポン一　ノ　キビダンゴ。」（一）

○フクロウ　ハ　オモ白イ　カツカウ　ノ　鳥　デス。フクレタ　カラダ、マンマル　ナ　目。（四の九）

○義貞の勢はあさりをふみつぶし。（川柳）（高三の七）

○犬を見て猫は背中へ腹を立て。（同上）

○いゝ着物着ると内でもかしこまり。（同上）

○目には青葉〔を見、耳には〕山ほとゝぎす〔を聞き、口には〕初がつを〔を味はふ好き季節なるかな〕（山口素堂）

○君が代は、千代に八千代に、さゞれ石の、巖となりて、苔のむすまで〔榮えに榮えたまへ。〕（國歌）

「それでは日本一の高山は」（六の二）の如きは、疑問文の省略法であるから昇調を用ひねばならぬ。

對偶法は、對語や對句を總稱するものであり、語句の都合次第で、左の例の如く、昇と降か、降と昇、稍長い對句は、各文末を降と降で讀むこと。

○白砂青松。

○耳も目も、聾ひず霞まず。

○人は死して名を留め、豹は死して皮を留む。（實語教）

○君に忠を致し、父に孝を竭せるは、小楠公なり。

○サル　ガ　カキ　ノ　タネ　ヲ　カニ　ニ　ヤリマシタ。カニ　ガ　ニギリメシ　ヲ　サル　ニ　ヤリマシタ。（卷一）

○一バンボシ　ミツケタ、アレ　アノ　モリ　ノ　スギ　ノ　キ　ノ　ウヘ　ニ。二　バンボシ　ミツケタ、アレ　アノ　ドテ　ノ　ヤナギ　ノ　キ　ノ　ウヘ　ニ。三　バンボシ　ミツケタ、アレ　アノ　ヤマ　ノ　マツ　ノ　キ　ノ　ウヘ　ニ。（卷一）

○ちりがつもつて山となり、しづくがよつて海となる。（五の廿三）

○沖へ急ぐ兄の小舟、濱へ歸る父の小舟。（六の五）

○沙漠地方ニ居ルラクダハ灰色デ、雪ノ中ニ住ム北極熊ハ眞白デアル。（九の五）

○我はたゝへつ、彼の防備、彼はたゝへつ、我が武勇。（九の十）

○一口又一口、平然と藥を飲む王、一行又一行、おそれと興奮に眼がかゞやくフィリップ。（十の二）

○加賀に梅田、越中に櫻井、上野に松井田、合はせて三箇所の地を汝に授ける。（十の十三）

○天、勾踐（こうせん）を空しうするなかれ。時、范蠡（はんれい）無きにあらず。（十の廿七）

○父が木を伐れば自分は雜草をかり取る、父が畠を打てば自分は種をまく。（十一の廿二）

○私は、行はうと思つたことを行ひ盡くし、語らうと思つたことを語り盡くした。（十二の十九）

○何の山、何の川、一木一草に至るまでも歷史あり古歌あり、人をして低回去る能はざらしむ。（十二の廿）

○一時の朋友を得ることは易く、眞の知己を得ることは難い。（高一の十二）

○我は武の爲、家の爲、汝は世の爲、道の爲、つゝがなかれと西東、露けき袖を分ちけり。（高一の廿九）

○菜の花や、月は東に、日は西に。（蕪村）（高二の十五）

○春晴千里、山又山、水又水、近き水は澄みて山の綠を浮かべ、遠き山は霞みて水に藍を流す。（高三の一）

○水の豪壯は、天をうつ怒濤に見るべく、地を震はす飛瀑に見るべく、岩石を提げはしる急流に見るべし。（高三の十六）

○これより行きて、道あれば水あり、水あれば必ず橋あり、全溪にして三十橋、山あれば巖あり、巖あれば必ず瀑あり、全嶺にして七十瀑、地あれば泉あり、泉あれば必ず熱湯あり、全村にして四十五湯。（金色夜叉の鹽原、尾崎紅葉）

○祇園精舍の鐘の聲、諸行無常の響あり、沙羅双樹の花の色、盛者必衰（しやうじや）の理（ことわり）を顯す。（平家物語、祇園精舍）

對比法は、兩々對比を成すものであるから、之を重念すること。

○山國の ものが「日は山から出て、山へはいる。」といへば、島國の ものが「いや、海から出て、海へはいる。」といつてあらそひます。（四の十四）

○頭のてつぺんから尾のさきまで、からだ中すき間もなく（六の八）

○昨日の敵は今日の友、語る言葉もうちとけて、（九の十）